魔法少女まどか☆マギカ★マジか？

深冬

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

とある少女の願いに巻き込まれた少年は、永遠とも言える時間の繰り返しに人を信じる事を止めた。

そんな少年の苦悩とささやかな幸福を綴った物語。

※本作にあんこ成分を期待してはいけません。

目次

プロローグ ―― 1
第一話 ―― 6
第二話 ―― 16
第三話 ―― 31
第四話 ―― 51
第五話 ―― 66
第六話 ―― 82
第七話 ―― 99
第八話 ―― 119
第九話 ―― 139
第十話 ―― 154
第十一話 ―― 170
第十二話 ―― 185
エピローグ ―― 197
Another Epilogue ―― 201
また違う未来 ―― 209

プロローグ

その日、俺を取り巻く世界は終焉を迎えた。

比喩とかそんなちんけな言葉表せることではなく、俺の住む地方都市である見滝原町に突如としてスーパーセルが襲来した。避難所に来る前に確認したニュースで見ただけなのでスーパーセルが何なのかよく分かんないんだけど、非常に激しい嵐だとかお天気キャスターの人が説明していた。

周りには俺と同じくこの体育館に避難してきた人達が身体を寄せ合って、この大災害が去るのを震えながら待っていた。

だけどそれは希望的観測に過ぎないと、俺は子供ながらに思っていた。

なにせ、この避難所に来るまでに俺は激しい雨や突風、それに伴う被害級の落雷なんかをこの身で体験している。

それにこの体育館から外を見てみれば、道路は水浸しになっていて、さらに突風や落雷で倒壊している建物なんかも見える。

ああ、ここで俺の人生は幕を閉じるのか……。

いつまでこの体育館が持つかもわからない状況で、俺は悲観していた。

ただただ俺は普通に生きてきただけなのに、なんでこんな人が大勢死ぬような災害に巻き込まれているんだろうか。

神が存在するとしたら、きっとソイツは気まぐれに人を救い、気分で人を殺す。

憎くてしょうがなかった。

一体俺は何をしたんだ？　どうして俺はここで死ななくちゃいけないんだ？

神とやらを罵倒しようにも良い言葉が見つからず、そんな疑問ばかりが頭を駆け巡った。

俺は震える身体を必死に堪えるように首から提げた十字のネックレスを握り締めた。

＊＊＊＊＊

気付いたら一ヵ月前に戻っていた。

いや……先ほどまでのあの悲惨な光景は悪い夢だったんだ。そうだ、きっとそうに違いない。

ベッドから起き上がり携帯を開き時計を確認した状態で、俺は心のどこかで否定してくる自分を否定する。

それが俺に出来る唯一のことで、どうしようもない悪夢から逃れる手段だった。

――だった。そう、過去形でしか無かった。

あの最悪の限りを尽くす見滝原町の惨状は繰り返された。

自分が悪夢だと決めつけて納得したのにもかかわらず、全く同じ日に、この見滝原の地でスーパーセルは猛威を奮った。

まさか自分は未来予知でもしてしまったんじゃないかと思って、この状況になることを周りの誰かに話すことをしなかった自分を責める。

夢と同じ避難所である体育館の片隅で俺は膝を抱えながら自己嫌悪に努めた。

なんで俺は自分の夢のことを誰にも言わなかった？

――頭がイカれたんじゃないかと心配されると思った。

だとしても言うことに意味があったんじゃないか？

――自分一人が友達の輪から弾かれて孤独になると思った。

もう一人の自分がどうしようもなく嫌いになった。

俺が自分の行いを正当化しようとしているのに、もう一人の自分がそれら全てを否定していく。

同じ事を何度も何度も何度も。

後ろから俺の耳元でもう一人の自分が囁いてゆく。

――う　わ　あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝

轟々と雨の音が体育館に響き渡る中、叫び声が木霊した。

＊＊＊＊＊

ピピピ、ピピピ、ピピピと朝を告げる目覚まし時計のけたたましい音が部屋に響く。
それをぬくぬくとした布団から嫌々ながらも手を伸ばすことでその毎朝のルーチンワークを終わらせてやる。
――ハッ!?
寝惚け眼を擦ることさえもせずに眠気を吹き飛ばし、急いで携帯を開き日付を確認する。
ハハハッ……。自然と乾いた笑い声が口から零れた。
表示された日付はあの災害からちょうど一ヵ月前。
もう何がなんだかわからなかった。
この状況を打破する方法もわからなければ、どうしてこんな事態になったのかも分からない。
俺は自分が三度目の時を過ごしていること以外を両親や友達に正直に話した。一ヵ月後に来るスーパーセルによってこの見滝原町が滅茶苦茶になることを。
そして俺は孤独になった。
友達には訳わかんない事を言っているヤツだと見放され、両親には精神病棟のある病院へと連れていかれた。
奇しくも二度目の時にもう一人の自分に言われた通りになった。
孤独になったその日から自分の部屋に引き籠もった。
誰もかれもが信じられなくて、自分さえも信じられない。
もうどうしたら良いかわからなかった。
そしてもはや予定調和のようにスーパーセルが見滝原町を襲った。
ははははっ、ざまぁみろ。俺の言った通りになったじゃないか。
みんな俺の言うことを聞いて見滝原町から避難していたらこんなことにならなかったんだ。
アハハハハハッ……。

＊＊＊＊＊

四度目。
ここまでくると特に何にも感じなってきた。
ああ、また今日か……と思う程度である。
三度目と同じように孤独になんかなりたくなかったからスーパーセルのことは黙っていることにする。
――もう嫌だ。
目覚めてから二週間。俺はそんな風に思うようになってきた。
分かってるんだよ。どうせこの先もずっと繰り返すんだろ？
俺はこの一ヵ月に永遠に囚われることになるんだ。
嫌だ嫌だ嫌だ。
俺の体感で三ヵ月と二週間。多少の差異は見受けられても同じ内容の繰り返し。
心が壊れそうだった。
自分だけがこの永遠に進まない時間に取り残されているように思えてならない。
だったら、いっそ死んでみようかと思った。
そしたらこの連鎖からも解き放たれるかもしれない。
その日、俺は喉元に包丁を突き立てた。

＊＊＊＊＊

結果から言えばこの繰り返す時間は終わることは無かった。
確かに自殺したはずなのに気付けばあの日の始まりの朝。
気が狂いそうになり、ベッドから飛び出て台所にあった包丁で自分の首を掻っ切る。その行為を目覚める度に繰り返した。
何度死んだかはもう分からない。
初めのウチは回数を数えていたが、十を超えたあたりから数える事を止めていた。
目覚めたらその足でふらふらと台所まで行き包丁で自分を殺す。
そんな単純作業を何度となく繰り返した。
だが、そんな俺の今日という日に異変が起きる。

『やぁ』
もう何度目になるかわからない日の朝。目覚めた俺の目の前に形容したい生き物がいた。
ネコとウサギが組み合わさったような四足歩行の生き物。身体は白く、毛とも触手とも見えるうにょんとしたモノを耳から伸ばしている。背中には丸い穴のような赤いライン見える。
「お前は……何なんだ？」
これまでの今日という日には無かったことだ。
ソイツは掛け布団の上に居て、起き上がった俺のことをくりくりっとした目で俺を見てくる。
『それはこちらのセリフかな。なんなんだい、君は？　僕の経験上、君のような存在は始めて見るのだけど』
「は……？」
この出会いが俺の運命を変えることになる。
空回りだった歯車はようやく噛み合わさり始めた。

第一話

突然の事態だったが、なんとか平静を取り戻して未知の生き物と言葉を交わす。

『ふむ、確かに君の話は興味深いね。それが君の頭の中にある夢物語ではなく、本当に僕たちの認識の外で時間が繰り返されているとしたら、それはもはや驚嘆に値するよ』

キュゥべえと名乗ったそのネコのようなウサギのような生き物は、俺の頭の中に直接語りかけてきた。これが所謂テレパシーというモノなのだろう。不思議な感覚だ。

「違うっ！　俺の妄想の産物とかそんなんじゃなくて本当に時間が繰り返してるんだよ！」

『まあまあ、少し落ち着いてくれないかな。そんなに怒鳴らなくても頭の中で念じてくれれば君の言葉は僕に伝わるよ』

焦りすぎていたらしい。でもそれは仕方がないことだと割り切る。

死んでも続く永遠の連鎖に俺は飽き飽きとしていた。

だからこうして、これまでとの差異が目の前に現れたら落ち着いてはいられなかった。

一度落ち着くために深呼吸をする。

『これで良いのか？』

『ああ、バッチリ聞こえてるよ』

それにしてもこの生き物と良い、テレパシーと良い、まさに非現実的と言って差し支えない。

だから俺はキュゥべえに希望を見出す。

時間が繰り返すことも非現実的で、目の前の生き物も非現実的な存在。

もしかしたら、この生き物が俺を永遠の連鎖から解き放ってくれるんじゃないかと期待していた。

『それで君はどうしたいんだい？』

そんなのは決まってる。

『俺をこの永遠と繰り返す時間から解き放ってくれ』

『どうしてかな？　僕の知る限り君たち人間は不老不死を渇望するじゃないか。言わば今の君の状態は人間誰もが羨む不老不死となんら変わらない。それは人間にとって理想的な状態だと言っても過言ではない』
『……ちっとも良くないよ。確かに人間最後には不老不死を望んでいるかもしれない。だけどさ、予定調和のように繰り返されるだけの世界で生きてるだけってのは俺には堪えられない』
『うーん、見解の相違ってヤツだね。僕には理解できないや』
　無表情のくせに頭の中に伝わってくる声だけは笑ってるように聞こえる。
　それが堪らなくイライラするが、今は我慢するしかなさそうだ。
『それで俺の時間を進める事は出来るのか？　もしくは俺の存在を消しても良い。どちらにしても俺をこの時間から時は放つ方法は無いのか？』
　俺という存在が消えたって良い。
　それでこの連鎖から解き放たれると言うなら安い対価だ。
　どうせ俺が消えたところで、意識も無くなるわけだから苦しむことは無いだろう。生きて時間が進んだ方が良いことは確かだが、それでも俺はもう繰り返すぐらいなら消えた方がマシだった。
『君の話が本当か嘘かは分からないけど、可能か不可能かで聞かれれば可能かな』
「本当かッ!?」
　気づけばテレパシーなんて存在も忘れ、キュゥべえに取っ組みかかっていた。
『やれやれ。君は少々せっかちなところがあるみたいだね。さっきも言ったけど、君はもう少し落ち着くべきだよ』
『ああ、悪い』
　突然掴みかかったのにもかかわらず無表情のキュゥべえを離す。
『それでどうしたら俺はこの繰り返しから解き放たれるんだ？』
『簡単な事だよ。僕に願えば良い。そしたら僕がどんな願いでも叶えてあげられるんだ』

『だったら、早く俺を解き放ってくれよッ！』
間髪いれずに言葉が出てきた。今すぐ解放されたい。
『だから君は少々せっかち過ぎだって。僕に願うことができるのは僕に選ばれた女の子だけ。その女の子は願いの対価に魔法少女として「魔女」と戦う使命を課されることになるけどね』
どうしてここでそんな事を言い出すんだ？
キュゥべえの言っていることが一瞬理解できなかった。
だが、思考を廻らせていくと一つの回答に辿り着く。
魔法少女とか魔女とかはよくわからないが、キュゥべえに願うことができるのはキュゥべえに選ばれた少女だけ。
どんな願いも叶うことになるのなら、その選ばれた女の子に俺のことを解き放つように願ってもらえば、俺はこの永遠に繰り返される時間から解放されることになる。
『ははは っ……、それじゃあ願ってくれた女の子は俺のために魔女とやらと戦わなくちゃならなくなるってわけか』
『そう言うことになるね。もともと僕は魔女と戦ってくれる魔法少女を生み出すために存在しているからね。その過程において君のような異質な存在の介入があろうとも僕の知るところではない』
淡々と言葉を並べるように喋るキュゥべえ。
その瞳は相変わらずくりくりっとしていて何を考えているのかよく分からない。
無表情であるのにもかかわらず、その淡々とした語り口調に恐怖を感じさせる。
『念のために聞くが、俺がキュゥべえに願うことは出来ないんだよな？』
『君は男だろ？　魔法少女になれない君の願いを叶えたところで僕に何ら益は無いじゃないか』
良くも悪くもキュゥべえは現実主義者（リアリスト）らしい。
物事を全て損得で考えるということは、利益さえ提示し続ければそれだけ信用できることになる。
「そうか……。だったら少し考える時間をくれ」

そう言ってベッドにごろんと横になる。
腕で顔を覆い、脱力した状態で考える。
『まぁ、僕としてはどれだけ時間がかかろうとも良いんだけど、君には時間が無いんじゃないの？』
そうなのだ。リミットは一ヶ月後。
今日からちょうど一ヶ月後にまた今日という日に戻ってくることになる。そして戻ったからと言って、またキュゥべえに出会えるとも限らない。
だから早く決めなければならない。
この先もずっとこの一ヵ月を繰り返すのか、自分のために女の子を戦いの道に進めせるのかを。
どうすればいいんだ。
例え俺のために願ってもらうとしても、どうやって願ってもらうとかまったく考えられない。
いきなり俺のために願ってくれとか、魔法少女になってとかいっても信じられる訳がない。
ああ、本当にどうすれば良いんだろうな。
少々キュゥべえという未知の生き物と話しこんでしまったが、学校が始まる時間が差し迫ってきたのでベッドから飛び起きて急いで制服である白い学ランを羽織る。
超特急で朝食を胃袋に収め、「行ってきます」と母親に告げ家を出る。
懐かしいとさえ思える行動だった。
この一ヶ月が繰り返される前に当り前にやっていた朝の一風景。正確には繰り返しが始まってからも少しの間だけ同じように「行ってきます」って言っていたっけ。
ここ最近は目覚めたらすぐに首を掻っ切っていたから久しぶりに感じる。
そんな懐かしさに身を委ねながらも俺は隣を歩くネコとウサギの合わさったような生き物とテレパシーで会話をしながら学校への道を進む。

『なぁ』
『なんだい？』
『見滝原町に魔法少女っているのか？』
朝食を食べている最中に気になった事を聞いてみる。
『いるよ。現在この町にいる魔法少女は合計で二人かな』
あっさりと返ってきた答えに俺は内心驚いた。
キュゥべえのことは信用しているが、こう簡単に答えてくれるなんて思ってもみなかった。
もともと俺は部外者な訳だし、それにキュゥべえは自分のことを魔法少女を生み出す存在と言った。だから魔法少女のことは基本的に喋ってくれないと思っていた。
だから良い意味で期待を裏切ってくれて助かった。
進めていた歩みはやがて大通りへとさしかかる。
信号は真っ赤に染まり、一時停止を促してくる。
『そう言えば、お前って俺以外の人には見えないんだな』
視線を向けた先にいるキュゥべえは、俺と同じように信号止めにあいながらも尻尾をフリフリと振っていた。なにか良い事でもあったのか？
それはともかく、先ほどから何人かの人とすれ違ったのにもかかわらず、その全員がキュゥべえなんていない風に通り過ぎていった。
普通ならこんなネコとウサギの合わさったような珍妙な生き物がいたら声をあげて驚かないとしても、凝視されるか最低限二度見ぐらいはされるはずだ。
それが無かったということはキュゥべえの存在が認識されてないことになる。
『君の言った通り僕の姿は普通の人間には認識される事は無い』
『普通の人間？』
気になることはすぐに聞く。
それがタイムリミットのある俺ができる最良の選択だ。
『君みたいに大量に魔力を持つ特殊な人間以外のごく一般的にこの星に住まう人々のことだよ。ちなみに特殊な人間には魔法少女も該当

するよ。まあ僕の意志で姿を見せることもできるけどね』
　そのキュゥべえの言葉を聞いて俺は額に手を当て溜め息をつく。
『どうしたんだい？　気分でも悪くなった？』
『いや、認めたくない現実って他人から聞かされると結構堪えるなってさ……』
　ちょうど信号が青に変わり休めていた足を再び稼動させる。心なしか先ほどまでよりも足取りが重く感じた。
『俺に大量の魔力があるって言うのは初耳なんだが、どういうことだ？』
　このまましょげていても始まらないので現状を正しく把握するために聞く。
『さぁ？　それは僕にもよく分かんないんだけど、君は僕の見た限り魔法少女と比べても遜色のないほどの魔力を保持していることは確かだね』
　もしかしたら俺は人間を止めてしまっているのかもしれない。
『だったら俺は手を翳しながら『ファイア』とでも叫べば手から炎が出んのか？』
『ハハハッ、そんなわけないじゃないか。確かに君は大量の魔力をその身に宿しているけれど、魔法少女で無い君はその魔力を身体の外部へと放出することなんてできないよ。もしかしてファンタジーの世界と勘違いしたかい？』
　黙れ生きるファンタジーが。
　存在そのものが俺にとってのファンタジーであるキュゥべえにそんな事を言われイライラする。
『僕としては君の性別が女だったら嬉しかったんだけど、やっぱり無い物ねだりはダメだよね』
『俺は男だ』
　ちゃんと自分の性別について宣言しながらも、そんな会話のやり取りをしつつ、やがて俺の通う中学に到着する。
　校門を目の前に俺の足が止まる。
　思い出されるのは俺を訳わからないヤツだと決めつけ孤独にした

友人たち。
だけれどもその友人たちはそのことを憶えていないだろう。
『早く入らないと遅刻しちゃうんじゃないか？』
『ああ、そうだな』
俺は迷いを振り切って歩を進めた。
見滝原中学校。そこが俺の通う学校だ。
ここら一帯では一番歴史のある学校で、数年前に数年前に全面的な改築がなされて最新の設備になったらしい。
俺が入学した時には改築が終わっていたのでイマイチ実感は無いが、校舎が新しくて少しだけ得をした気分だ。
俺の学年である二学年が牛耳っている階に足早に進み、教室に入って自分の席に座る。
ついてこなくても良いのに、キュゥべえは俺の椅子の下に入りこんできた。
授業が始まり退屈な時間が到来する。
すでに二、三度は聞いた内容だ。元来勉強好きでない事を加味しても、新鮮味が無くてつまらない。
仕方が無いのでキュゥべえと会話することでその退屈な気分を紛らわせようとする。
『さっきはこの町に二人の魔法少女がいるって言ってたけど、どちらかと会うことって出来るのか？』
『うーん、どうだろう。僕としては彼女たちに無理強いさせられないから、彼女たちに確認しないとわからないかな』
『だったらアポを取ってくれたら嬉しい』
『それくらいならお安い御用だよ。彼女たちが了承してくれるかはわからないけれど一応訊いてみるね』
そう言ってからキュゥべえは俺の椅子の下から這い出て教室から姿を消した。
あっ……。退屈を紛らわせるための話し相手がいなくなってしまった。
後悔するもそれ以上に魔法少女に会ってみたいという欲求が勝つ。

もしかしたら非現実である魔法少女が、同じく俺に襲いかかっている時間の繰り返しという非現実を何とかしてくれるかもしれないという期待に胸が膨らむ。
そんな簡単に済む問題というわけでもないが、それでも俺にとってはやっと見つけることができた希望なんだ。
それを想うと、これくらいの退屈には負けていられない。
昼休みになると、予定調和のごとく二つ離れたクラスへの転校生についての噂が俺の元へとやってくる。
なんでもその転校生とやらは、たいそうな美少女で学業も優秀という絵に描いたような完璧な人間らしい。
俺のおぼろげになった繰り返し初期の記憶を辿れば転校生のことは噂になった事は間違いないのだが、こんなに美少女だと騒がれていたっけ？
曖昧な記憶を頭の片隅で辿りながらも、その一方で自分の居場所とばかりに俺の椅子の下に戻ってきたキュゥべえとの話に花を咲かせる。
『おめでとう。君の要望通り一人だけだけど、君と会っても良いって言ってくれた魔法少女がいたよ』
『その人に俺のことは？』
『まだ君については会いたがってると言うこと以外、何も言ってないよ。君としても自分のことをペラペラと喋られたくはないだろうしね』
まーな。信用できるか分からないヤツに俺のことを話されたら堪ったものではない。
例え相手が魔法少女という非常識な存在だったとしても、きっと俺の方が特異な非常識な存在だろうから慎重にならざるを得ない。時間を繰り返しているってソイツにいきなり話しても信じてくれる保証はないしな。
その点をキュゥべえは心得ているらしく、言い忘れていた俺としては助かった。
『放課後に校門で待ってるそうだよ。でも、あんまり来るのが遅いと

帰っちゃうかもだって』
『それなら遅れないようにしないとな』
昼休みが残り僅かになったを教室に備え付けられている丸時計で確認する。
さて、放課後までまた退屈な授業だ。
暇潰し対策の四足動物も帰ってきたことだし、放課後まで魔法少女について聞いてみるか。
――魔法少女
キュゥべえに教えてもらったところによると、魔法少女はキュゥべえと契約した元はどこにでもいそうな少女だった存在らしい。
その契約とは、キュゥべえがどんな願いでも一つだけ実現させる事を引きかえに、魔法少女となり魔法を駆使して魔女と戦う使命を課されることになる。
ここまでは朝聞いた内容とさほど変わりないが、確認のためにもう一度聞いた。
そのことを踏まえて考えてみると、俺は〝どんな願いでも〟というのがこの契約の危うさだと思う。
まぁ、魔法少女になることが出来ない俺が考えることではないと思うが、どんな願いでも叶えられるという対価が魔女と戦うだけというのは考えられない。
吊り合わないのだ。魔女がどれほどの強さなのか分からないが、それでも命を賭けて戦うだけではどんな願いでも叶えられるという権利と等価値ではないはずだ。
その程度の対価だったら、俺がキュゥべえと契約したい。
魔女と戦うぐらい、なんだよ。この永遠とも知れない時間から解き放たれる事を考えれば安いもんだ。
そのことを素直にキュゥべえに話すと、『朝も言ったけど、君は魔法少女になれないよ』とつれないお言葉をいただいた。
しかしまぁ、そんなキュゥべえの反応は予想通りだったので特に何も思うことも無く、魔法少女についての新たな情報を話す様にキュゥべえに促す。

キュゥべえによると、契約によって少女はソウルジェムという宝石を生み出すらしい。
そのソウルジェムは魔法少女の魔力の源で、それを手にして魔女と戦う使命を課された者を魔法少女と呼称するようだ。
『さっきからちょくちょく話に出てくる「魔女」とはごく一般的に人間たち想像されている「魔女」のことで良いのか？』
魔法少女が戦う相手である魔女についていい加減気になったので訊く。
これまでの話から想像するに、どんな願いでも叶えられる奇跡を対価にしなければ吊り合わないほどの凶悪な存在ということになる。でなければおかしい。
『うーん。僕は一般常識に詳しいわけじゃないけど、おおよそ合ってるかな』
『おおよそとは？』
『要するに「魔法少女」が希望を振りまく存在なら、「魔女」は反対に絶望を撒き散らす存在なんだ。一般的に世間でよくある理由がハッキリしない自殺や殺人事件は魔女の呪いが原因なことが多いね。ただ魔女は異形の存在なので普通の人間には認識することすらできないんだ。その点において君たち人間が認識している「魔女」とは違うところかな』
なるほどな。「魔女」と「魔法少女」は対の存在で、魔法少女でなければ知覚すらできない。しかも魔女は人間にとって悪い事をするから魔法少女が倒さなければならない。
こういう構図になるわけか。
『つまり魔女は負の存在であり、放置していてはよくないからキュゥべえが魔法少女を生み出すことで駆逐していると言うわけか』
『細かいところは違っているけど、おおよそそういうことになるね。そのために僕は魔法少女になってよってお願いするんだ』
ふふん、と得意げに鼻を鳴らすキュゥべえ。俺とキュゥべえの位置関係上顔を窺い知ることは出来ないがそんな感じがした。

第二話

待つこと十分。まるで舞踏会での壁の花のように校門に背を預けていた俺の元に、校門の上に我が物顔で居座っているキュゥべえを目印にしながら小さく手を振りながら俺とあまり年齢の違わない女の人が歩いてくる。

金色の綺麗な髪を両サイドで垂れ流す様に髪留めで括り、毛先はくるくるとパーマをかけた風に見える。物腰が柔らかそうな印象を受け、落ち着いた雰囲気も漂わせていた。

失礼の無いように校門に預けていた背を浮かせて彼女を迎える。

「あなたが私に会いたいって言ってくれた子で間違いないわよね？」

「ええ、そうですよ。ちょっとあなた方のことが気になったので、会えるようにキュゥべえに頼んでみたんですよ」

対人関係の基本は笑顔。そして嘘偽りの無い真実であると俺は思っている。必要以上の真実を話すかどうかは別として。

『やぁ、マミ。僕としては彼と良好な関係を築いていきたいから、できる限り彼のしたい事を協力してあげて欲しいな』

「安心してキュゥべえ。私としても彼のことをいきなり邪見に扱おうなんて思ってもいないから。それじゃあ、立ち話もなんだし行きましょうか、えっと……」

「向井です。向井キリト。一応二年生です。どうぞ好きなように呼んでください」

どうやらキュゥべえは巴さんに俺の名前を教えていなかったようだ。というか、どの程度まで俺のことを教えているかが気になるところだが、それを今訊こうとテレパシーを使っても巴さんにも聴こえてしまうので失礼にあたるだろうから止めた。

「そう、じゃあ私はあなたのことを向井君って呼ぶことにするわね。あ、ごめんなさい。自己紹介がまだだったわね。私の名前は巴マミ。向井君より一年先輩だけど、そんなに気にしなくても良いから」

よろしくね、と巴さんが右手を差し出してきたのでこちらも右手を差し出して手を握り合う。そこで校門を通りすぎる周りの生徒たち

が俺たちの方に視線を向けていることに気づき、少し恥ずかしかった。
巴さんが恥ずかしがっている様子は見られず、一人だけ赤面してしまう結果になってしまった。やはり巴さんのような美少女は他人からの視線に慣れているようだ。
「行きましょうか向井君」
「ええ、早く行きましょうか巴さん」
柔らかい感触だった巴さんの手を惜しみつつ俺の手との繋がりを断つ。
明日の朝、美少女と手を握り合っていたなんて噂が経ちかねないことに不安感の残しつつ、俺たちは学校の外に出ることにした。
俺たちを先導するように目の前を歩くキュゥべえを普通の人が見ることが出来たら非常にシュールな光景に見えただろう。
巴さんに俺の身の上話をしていると、いつの間にかキュゥべえがいなくなっていた。巴さんは特に反応しないことからあいつは神出鬼没なヤツなのかもしれないと勝手に思い込む。
「へぇー、それじゃあ向井君は何度も何度も同じ時間を繰り返しているってことなのね」
本当にキュゥべえは俺のことを巴さんには全然話していなかったらしい。普通なら俺のことを知った上で会うことを決めるんじゃないかと思うが、そこは巴さんのキュゥべえへの信頼が厚いのか、もともと巴さんが優しかったかの二択だろう。
でなければ、例えキュゥべえが仲介を引き受けたからと言って、魔法少女に会いたいと言う理由を伝えただけでは応じてくれないはずだ。その証拠にもう一人の魔法少女は会ってはくれないみたいだし。
「それにしてもソウルジェムってそういう使い方をするんですね。キュゥべえからは魔法少女の魔力の源としか訊いてなかったから驚きましたよ」
巴さんの持つソウルジェム視線を向ける。
ソウルジェムは卵ような丸みを帯びた形状をしており、巴さんはソウルジェムの上部にひもを通すことで首から提げて持ち運びしやす

いようにしているようだ。色は彼女のイメージにピッタリな黄色である。
「ああ、これね。こうやって魔女の魔力の残り香を探しているの。反応があれば光るから毎日こうして街中を歩いているのよ」
もともと巴さんは今日も魔女の捜索をしようとしていたらしく、そこに俺が会いたいなんて言ったもんだからその捜索に同行するという形で会ってもらっているのだ。
そのことを聞いた時には少し悪い気もしたのだが、巴さんは「絶対に魔女が見つかるってわけじゃないから良いのよ」って笑顔で言ってくれたのでそこからは特に何も思わなくなった。
「特に交通事故や傷害事件……自殺なんかが起きた場所に魔女が潜んでいる場合が多いわ。だから私はそういう場所を優先的にチェックするの。……って、向井君が訊きたいことはこういう事じゃなかったわね」
「あっ、いえ、そんなことないですよ。俺にとっては永遠に繰り返す時間も、巴さんみたいな魔法少女や魔女と言った存在も同じ非常識的なモノに変わりないですから。少しでも自分がこの連鎖から抜け出る可能性があるなら知識として得たいところです」
「先に謝っておくけど、ごめんなさいね。私からしたら向井君が言っている時間の繰り返しているっていうのが信じられないの。私自身の時間も無いし、向井君に教えてあげられることは少ないわ」
「そんなことないですよ。巴さんが魔法少女や魔女のことを教えていただいていることだけでも俺としては助かっています。これまで何度も何度も、気が狂いながら繰り返してきた時間の中で今回の様にキュウベえや巴さんに会ったことは無かったので、巴さんの話は大変タメになりますよ」
思い出されるのはこれまで繰り返してきた時間。
その中では魔法という言葉はファンタジーの産物だった。なのに今俺の隣には魔女と戦う魔法少女がいる。それに対価は必要だけどなんでも願いが叶えられると言ったネコとウサギが合わさったような生き物も現れた。

例え今回も繰り返しから抜け出せなくとも、次回からは魔法という奇跡を当てにしながら一歩ずつ前に進めることだろう。
それはいつ終わるかも分からない永遠の演劇に等しい。
しかも何度も繰り返されるその舞台は途中で下りることは叶わず、出演者たちは無様に踊り狂うしか選択肢はない。
だから俺は一歩ずつしっかりと舞台上から降りる階段を進むしかないのだ。
巴さんと話してみてわかったことがある。
それはキュゥべえの言った通り、俺がこの永遠の連鎖から解き放たれるには誰かがキュゥべえに願ってもらわなければならないということだ。
これは魔法少女のことや魔女のことを聞いてみて出た俺の中の結論で、どうも他の方法では実現性が乏しいというか、そもそも思いつくことさえできなかった。
死んでみても生きてみても両方ともダメ。
そんなどうしようもない現実は理解していて、だったら非常識的存在に頼ってみようということでキュゥべえや巴さんに俺の置かれている状況を喋ってようやく一縷の希望を見出した。
それは自己犠牲を対価に奇跡を得る契約だった。
だがその契約は生物学的に男の俺では結ぶことすらできないという。だから俺が残された道はいたいけな少女に俺を救ってくれと頼むしかなかった。それもその少女を戦いという茨の道に進ませるという残酷な願いで……。
キュゥべえはそれを肯定した。『自分の願いを優先することの何がいけないんだい？』そう言って、俺に新たな魔法少女を生み出すスカウトマンになってくれと言葉を付け加えた。
それはある意味正しいことだった。
人間誰しも一番に優先するのは自分のはずだ。警察官だって消防士だって、人々の笑顔を見て自分が満足するために職務を全うしていることだろう。結局は人の為とか言いつつも最終的には自分の為になるのだ。

だからキュゥべえにだって、君たち人類の為とか言って魔法少女を生み出して魔女と戦わせることで、最終的には自分の利益を獲得しているのだろうよ。それが何なのか知らないし、想像出来ない。
だけれどもそのキュゥべえにとっての利益が何なのかを俺が知る必要も無い。だって、俺の願いはこの繰り返す時間から解き放たれることなんだ。それ以外の他人の事情など知った事ではない。
……なのに何故、俺は俺の為に少女に願わせる事にこんなにも抵抗感を抱いているのだろう。
自分の為に一人の少女の人生を壊してしまうことに、それほどまでに嫌悪感があるのだろうか？　それとも少女に助けられることから自尊心傷つけられるのを恐れているのか？
答えは俺の中で渦巻いているはずなのに、どうもその答えを見つけられずにモヤモヤとした霧の中を彷徨っている感じがする。
「大丈夫？」
隣を歩いている巴さんが俺の顔を心配そうにのぞき込んできた。俺たちは今、巴さんのソウルジェムが魔女の気配に反応したので、その反応を追って魔女を捜している。場所は学校帰りの賑わうショッピングモールだった。
俺は少し俯きがちだった顔を少し上げて巴さんと視線を合わせる。
「ええ、大丈夫ですよ。少し考え事をしていまして」
「そう？　それなら良いんだけど……でも、魔女に遭遇した時はちゃんと気を引き締めてね。本当に魔女は危険な存在なのよ」
「ははは っ、俺のことなんて気にしなくても良いですよ。どうせ死んでもまた繰り返されるんですし、それに魔女が俺を殺すことによってこの連鎖から解き放たれるのなら安いモノです」
自然と乾いた笑い声が喉から出てきた。
きっとこの時の俺の顔は酷かったんだろう。自分のことではないのに巴さんが悲痛な面持ちで俺に諭してくる。
「そんなに悲観してしまうのはダメよ」
「どうしてです？　当事者ではない巴さんには俺の苦悩も絶望も分かるはずないじゃないですか」

「確かにそうね。私には向井君が経験してきたことは分からないわ。でもね、私にだって苦悩や絶望はあるの」
それはそうだろう。人は必ずと言って良いほど、大きさはどうあれその身に苦悩や絶望を抱えている。苦しみや絶望があって、その上に初めて幸福や希望がある。
もしも苦悩や絶望を持っていない人がいたとしよう。それらが無ければ、対になっている幸福や希望なんかは普通のことだと認識されてしまう。
俺の場合は普通の日常こそが幸福であり、希望だった。
そうやって認識できるのは、この地獄とも言える繰り返す時間があって初めて幸せとは何だということを知ることができた。まぁ、今の俺としてはこの繰り返される時間から解き放たれるのなら、日常でも非日常でも、死という終着点でも構わないのだけれども。
だから俺は無理矢理笑って返す。
「そうですね。だから人にはそれぞれ叶えたい願いがあるんですもんね」
俺には巴さんの苦しみなんて分からない。
でも、彼女の苦しみを積極的に訊きたいわけでもない。その苦しみは彼女のモノであり、俺のモノではないからだ。
俺が見る限り、巴さんは俺と同様その苦しみを必死に押さえつけているように感じる。少しの歪みでも簡単に瓦解してしまいそうな心の呪縛。
魔法少女とは皆が皆、俺や巴さんみたいに必死に自分を取りつくろっている人間ばっかりなんだろうか？
でもそれもそうか、とも思う。キュゥべえにどんな願いでも叶う奇跡を願ったのだから、心のどこかが歪んでいてもおかしくはないのかもしれないな。
最後に俺が言葉を発してから少しの間、まるでショッピングモールの喧騒から切り取られたかのように俺たちの間には沈黙が訪れた。
巴さんは何かを言おうと口を開きかけて、何も言葉が出てこなくて口を噤む。俺の方はというと巴さんに特に訊く事も無くなったし、単

純に口を閉じていた。
陽はすでに傾きかけ、ショッピングモールには少しずつオレンジ色の光が差し込み始めていた。
「あっ」
「どうしたんです？」
「近くに魔女がいるみたい……でもこの魔力反応から言って使い魔かしら？」
巴さんの持つソウルジェムが淡い光を放つ。
ちなみに使い魔というのは、元は魔女の身体から分離した存在で、人間を捕食することで分離前の魔女と同じ魔女へと成長する厄介な存在らしい。
つまり、魔女の子供と言うべき存在なのであろう。あくまで俺の推論だが、こうして魔女は増えていくから、その対抗戦力としてキュゥべえが魔法少女を生み出しているのではないかと思う。
「いい？　これだけは注意しておいてほしいんだけど、使い魔と言っても何も力を持たない向井君にとっては危険な存在よ。だからくれぐれも飛び出したり危険なことはしないようにお願いね」
「わかってますよ」
次に繋げるためにもこんな序盤でくたばってはられない。せめて魔女とやらを見るまでは死んでたまるか。
少しでも経験を。少しでも情報を。
俺の中のモヤモヤを晴らすために少しでも知識を身につけるんだ。
それぐらいの気概で進まなくては俺の願いが叶うことは無いだろう。
「行きましょうか」
先ほどまでの表情と打って変わってキリリとした巴さんが、ソウルジェムが指し示す方向へと駆けだす。
その後ろ姿を追うように俺も足を進めた。
「ここよ」
駆けだして十分ぐらいだろうか、巴さんが足を止めたのはショッピングモールの中にある一般人立ち入り禁止の改装中のフロアだった。

そこには人の気配なんてモノはまるで無く、先ほどまでいた賑やかな一角とは打って変わって閑散としていた。
ここまで近づけば俺でも分かる。
妙な圧迫感と言って良いだろうか。目の前に広がるフロアに一歩でも踏み入れれば、それまでの現実から俺が足を踏み入れなければならない非現実へと全てが変化してしまうことが容易に想像できてしまう。
これが魔女の結界か。
俺自身、死んでもどうせ繰り返されるだろうと高を括っていたが、目の前のあまりの異質さに尻込みしてしまう。どうやら自分で自分を殺すより他者に殺される方が、より強い恐怖を生み出すらしい。
「大丈夫かしら？」
額から脂汗を噴き出していたからなのか、巴さんがさきほど俺のことを心配した時とはまた違ったトーンで心配する言葉をかけてきた。
「大丈夫です。少々、決意のほどが足りて無かったようです」
あはは、と笑うしかなかった。
そうか、この威圧感が魔女なのか。こんなのと戦っている巴さんは凄いな。これならキュゥべえが契約の対価に奇跡を差し出すのも理解できそうだ。
額の汗を手で拭う。
「行きましょうか巴さん。俺なら大丈夫なので心配しないでください」
「わかったわ。そのかわり危なくなったら私の後ろに隠れて頂戴ね」
どうでも良いプライドなのだが、男として女の人の後ろに隠れるのはごめん被りたいところだ。しかし、魔女に対する対抗手段においても知識においても巴さんの方が勝(まさ)っているので、ここは素直に首肯する。
「ええ、分かっていますよ」
今はまだ死ぬべきところでは無い。
それを分かっているからこそ巴さんの言葉には耳を傾けなくては。
「……行きましょう」

巴さんはフロアへと足を踏み入れたので、それに俺も続く。
「これは……」
なんとも形容し難い空間だった。まるでその昔ヨーロッパで描かれた絵画の中に迷い込んでしまったと言えば良いのだろうか、イメージとしてはピカソの絵が一番しっくりくるかもしれない。
しかしそれだけでは、この異質な空間を表現することは叶わない。
もっと、こう……ああ、そうか。絵本だ。子供向けの絵本のような空間なんだ。
様々な色がしっちゃかめっちゃかに辺りに散りばめられて、この空間の異質さを醸し出している。
「魔女の結界ってヤツは思ってた以上にスゴイ空間ですね」
「うふふ、向井君はどんな風だと思っていたの？」
俺が呆然としていたからだろうか、巴さんは小さく笑ってからそんな事を訊いてくる。
「もっとジメジメして暗い場所かと思ってましたよ。でも実際は、こんな絵本の中に迷い込んだような馬鹿馬鹿しい空間だとは思いもしなかったですよ」
そんな空間だからこそ、逆に恐怖感を感じさせられる訳だが。
その後も巴さんのソウルジェムの反応を頼りに結界の中を突き進んでいく。鎖がジャラジャラと音を立てたり、かと思えば瓦礫の山が目の前に現れたりだとか、本当によく分からない空間だ。
「……来たわね」
巴さんがそっと呟くように言う。
ここで「何が？」とか訊くほど俺は野暮では無い。もちろんこの結界内に潜んでいた使い魔が現れたのだ。
毛糸玉のようなまるい物体が本体なのだろうか、そこに鼻と口、そして触角と髭を生やし、さらに尻尾のように延びたような機関の先は蝶のようになっている。
そいつが五匹ほど目の前に迫ってきている。
もうファンタジーとしか言いようがない。
これまで生きてきて、これほどまでにファンタジーの世界をこの目

で見たことが無い。俺が置かれている繰り返す時間はどちらかというとSFのようだと俺は認識している。
「早く片づけて先に進みましょうかっ！」
そう言って、巴さんはソウルジェムを両手で胸のところに持っていき目を閉じる。
すると次の瞬間にはさきほどまで着ていた見滝原中学の制服から、土曜や日曜の朝に放送されているようなアニメに登場してもおかしくない如何にも魔法少女ですと主張するコスチュームに変わっていた。
巴さんの金色の髪に合わせるように襟や胸のリボンは黄色く、ふんわりとした上着をコルセットで抑え、緑色のスカートで全体の雰囲気を整えている。
これを〝変身〟と言うんだなと、この緊迫した状況なのに思ってしまう。
そして巴さんはどこからともなく取り出したマスケット銃を使い魔に向けて発砲する。撃鉄の音が妙に生々しい。もしかして本物なのだろうか？
魔法少女と言うのだから、呪文を唱えて杖の先から炎や雷といったモノを放つのかと思っていたら、バリバリ物理攻撃なのかい。これはもうツッコまざるを得ない。
基本的にマスケット銃は単発式であるので、一度撃ったら弾を込めなくてはならないのだが、巴さんは撃ったそばからそのマスケット銃を投げ捨て、次の瞬間には新たなマスケット銃をその手に持っていた。
投げ捨てられたマスケット銃が地面に落ちて鈍い音を出さないのは投げ捨てたそばからマスケット銃が虚空に消えているからだ。
「終わったわ。先を急ぎましょう」
俺が巴さんの攻撃手段について考えていると、全ての使い魔を討ち倒した巴さんが俺を現実へと引き戻す。
「驚きましたよ。巴さんって魔法なんて使わずに戦っちゃうんですね」

俺は未だ巴さんが手に持っているマスケット銃を一度見てから言った。
「うふふ、違うわよ。私が使っているのは召喚魔法よ。それでこのマスケット銃を呼び出して戦っているの」
「ああ、それで投げ捨てたマスケット銃が消えちゃうわけですか」
「そういうことになるわね。さ、先に進みましょう」
マスケット銃を胸で押さえつけるように持って笑う巴さん。
先ほどの戦闘を見てやっぱり本当に命を賭けて戦っているんだと思ったら、その笑顔が無理しているように俺には見えた。
その後も何度か使い魔の襲撃を受けた。しかし、巴さんが魔法で召喚したマスケット銃の射線上に存在しただけでその数を減らしていった。
俺は特に何もすることは無く、使い魔が現れる度に巴さんの後方五メートルぐらいに下がって、戦闘の邪魔にならないように気を使うくらいしかなかった。巴さんにとっては魔女や使い魔を倒すことは使命であるので、今回はそれにお邪魔する形の俺は少しでも邪魔になるような行動は避けるべきだと判断した。
「気をつけて、この先に沢山の気配があるわ」
巴さんは両開きの大きな扉の前で俺を制した。もちろん俺は言われた通りに気を引き締める。
それにしてもここまでに辿り着くまでに『工事中』やら『立ち入り禁止』などと言った看板や立て札などを見かけた。
この空間が現れる前の名残と言っても良いのだろうか？　それがどうも現実と結界の内部との境界が曖昧な感じにしているような気さえした。
「開けるわよ」
巴さんが重そうな両開きの扉を押す。ここは俺の出番だと思ったので俺も手伝う。
ギギィ、と音を立てて扉がゆっくりと開く。見た目通り扉は結構な重さがあり、これだけの動作で俺は息が荒くなる。でも巴さんはまったく息を乱してないことから魔法少女は肉体的に補正でもあるのか

もしれない。
　これは後でキュゥべえにでも訊いてみることにしよう。
「あれは――ッ!?　向井君、私は先に行くわねっ！」
「はい？」
　息を整えるために膝に手をついていて巴さんの言葉を良く聞きとるが出来なかった。しかし、巴さんは俺の曖昧な返事なんて知らないとばかりに駆けだす。
「あっ、ちょっと」
　手を伸ばして制止させようとするも、巴さんはお構いなしに稼働させた足を止めることはない。
　ようやく息を整えて、大きく溜め息を吐く。
「まったく、あんなに急いでどうしたのかね」
　すでに遠くまで行ってしまった巴さんの背中を捜す……と、すぐに見つけた。
　それにしても巴さんと一緒にいる二人組は誰だ？
　制服から見て俺達と同じく見滝原中学の生徒で間違いないだろうが、ピンク色の短い髪を赤いリボンでツインテールにした気弱そうな女の子と青い髪をショートカットしている勝気そうな性格の女の子。腰が抜けたのか二人ともぺたんと床に腰を降ろしている。
　遠目からだから少しばかり自信が無い。別に俺はそこまで視力が良いわけでもないし。
　俺も巴さんの後を追い、彼女たちの元へと駆け寄る。
　って、よく見たらピンク色の髪の子がボロボロになったキュゥべえを抱きかかえている。
「大丈夫かキュゥべえ？」
　別にキュゥべえ自体の命には興味は無いが、コイツが死んだら今回の繰り返しで見出した方法を探求するのに不便になる。
『うん……なんと、かね。マミに、助け、られたよ』
　途切れ途切れになりながらも律義に返事をしてくるキュゥべえ。別に辛いなら返事をする必要なんてないのに。
「向井君。私が使い魔たちを何とかするからその子たちをお願い」

「はい、分かりました」
巴さんに頼まれたので、呆然と事の成り行きを見ていた女の子二人組を連れだって後方に下がることにする。
安全圏まで下がって俺は腰を降ろした。そして改めて先ほどまでこの女の子たちに襲いかかろうとしていた使い魔の集団……いや、軍団を見る。
「にしても、すごい数だな」
別に数える気なんてさらさらないが、ざっと見た感じで総数は１００と言ったところだろうか。あの髭の生えた毛糸玉みたいなヤツのあまりにも馬鹿馬鹿しい数に笑いさえ込み上げてくる。
「……何で笑ってるのよ」
「あん？」
俺は右斜め上の方向に顔をあげる。そこには俺が避難させたキュゥべえを抱いたピンクの女の子と青い女の子。ちなみに俺に喋りかけてきたのは青い女の子だ。
「だから、なんでこんな状況で笑ってられるのかって私は聞いているのよっ！」
「ちょっと、さやかちゃん……」
切羽詰まった表情で怒鳴ってきた青髪をピンク髪が心配そうな顔で見る。ピンク髪……なんか語呂が悪いな。
「俺は向井キリト。見ての通りお前たちと同じ学校の二年生だ。で、お前たちの名前は？」
とりあえず、状況確認の為に名前を訊くことにする。どうやらこの子たちはキュゥべえのことが見えているみたいだし、それにこんな状況に巻き込まれるんだ。魔法少女になれる為の資質と言うものを兼ね備えているのだろう。
俺の願いの為にも知り合いになっておくにこしたことはない。
尚もガミガミと吼えてくる青髪を制するようにピンク髪が俺の望むとおりに自己紹介をしてきてくれた。
「わ、わたしの名前は鹿目（かなめ）まどか。で、この子は美樹（みき）さやかちゃん。二人とも向井君と同じく二年生だよ」

「ふーん、まぁよろしく。ところで美樹さやか」
「なによ？」
「不満そうな表情のところ悪いがアレを見てみろ」
俺は前方へと指を指し示す。そこには次々と両手にマスケット銃を召喚し、使い魔に向けて発砲する巴さんの姿が見える。
ここに来るまでの巴さんの活躍を知っているから特段心配することは無い。
「つまり適材適所ってわけだよ。俺はこうしてお前たちを避難させて、巴さんはアイツらと戦う。……って、巴さんから自己紹介されたか？」
美樹さやかは呆然と巴さんの戦いに魅入られていて、俺の問いに答えたのは鹿目まどかの方だった。
「まだだけど……」
「あの人は巴マミ。俺たちの一年先輩で三年生だな。で、何か質問ある？」
視界の先の巴さんはあまりの数にメンドくさくなったのか、一気にかなりの数のマスケット銃を召喚した。使い魔と同様数え切れないほどのそれらは規則正しく空中に展開される。どうやら重力の影響は受けていないようだ。
「あの丸っこいヤツらは何なのよ!?　それにこの訳わかんない空間だってそうだし、転校生のことだって訊きたいし、あの人のこともあたしはもっと訊きたいわよ」
「うーん、思ったよりたくさんの質問が来たな。あの丸っこいヤツらは使い魔だな。それでこの空間は魔女の結界の中、転校生ってのはよく分からんが巴さんは魔法少女だ。まぁ、俺も詳しく知っているってわけじゃないけどな」
とりあえず俺が知り得ている大まかの情報を喋っておく。どうせ後で巴さんもこの子たちに同じようなことを説明するだろう。
巴さんの方はと言うと、マスケット銃を展開し終えたようで、手に持ったマスケット銃の引き金を引く。すると、展開された全てのマスケット銃の撃鉄が次々と鳴り響き弾を射出していく。

全ての撃鉄がほぼ同時に撃ちつけられたものだから、物凄い轟音になり結構距離を取っていたはずの俺たちの鼓膜にダメージを与える。
放たれた弾丸は使い魔の軍団に吸い込まれるように飛来し、ことごとくを粉砕していく。
「うお、すげぇ」
まさか巴さんがこんな事までできるなんて思ってもみなかった。
ガミガミ言っていた美樹さやかもキュゥべえを抱いた鹿目まどかも呆然を通りこして唖然としている。
「まぁ、とにかくこれで君たちは奇跡を願うことのできる権利を得たんだよ」
俺の言葉にどちらからともなく言葉が紡がれる。
「奇跡……？」
「ああ、俺が欲しくてたまらない奇跡だよ」
羨ましい。俺は願うことができなくて、こんなか弱そうな少女たちにしか願うことができないなんて。
さて、俺の願いを代わりに願うことのできる少女たちを発見したわけだが、俺はどうしたら良いんだろうな。
この子たちの未来を犠牲にして、俺は自分の未来を手に入れられるんだろうか……？

第三話

巴さんが使い魔共の掃討を終えると、まるでゲームの場面転換のように空間が歪み、魔女の結界から現実へと帰還することになった。帰還したと言ってもこの場所は改装中のショッピングモールのフロアで、人の気配がまるでないから現実感と言うものはそれほどないけれど。

「も、戻った……」

美樹さやかがようやく帰還した現実に安堵の表情を浮かべる。

「お疲れ様です」

俺はカツカツとその脚に履いたブーツで床を鳴らしながら、俺たちの元まで歩いてきた巴さんに向かって労いの言葉をかける。

それにしても圧巻の一言だった。巴さんの戦い方がマスケット銃の同時展開によるゴリ押しだったところもそうだし、それよりもこんな戦いを目の前で見たことの興奮が俺の胸の鼓動を早くした。そのことを感じ、俺が男だったことを再確認させられた。

「ありがとう、向井君――」

巴さんが俺にお礼を言い、そしてその後に何かを言いかけた瞬間、タンッと何かが床を鳴らす音が響く。次の瞬間には俺たちの中に再び緊張が張り詰めた。

「ここに魔女はいないわ。仕留めたいならすぐにさっきの使い魔の残留魔力を追いかけなさい。今回はあなたに譲ってあげる」

いち早くその闖入者に対応したのは巴さんだった。やはり魔法少女として場慣れしているからなのか、俺たちの視線の先にいる巴さんと同じように如何にも魔法少女と言う格好をした女の子に話しかける。

どうやら鹿目まどかと美樹さやかは、闖入者であるあの黒髪の長い魔法少女のことを知っているようだ。緊張の色が二人の表情から見てとれる。

この不測の事態に自分が冷静な事に驚きつつも、黒髪の女の子のことを改めて見てみる。

……そして黒髪の魔法少女と目が合った。黒髪の女の子は俺のことを怪訝そうな目で見てきており、そのお返しとばかりに俺も彼女のことを良く見ておく。

黒髪の魔法少女は、ふぅ、と息を吐いて俺から巴さんに視線の先の対象を変える。にらめっこは俺の勝利で終わったらしい。

「魔女になんて興味は無いわ。私が用があるのは――」

「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの。お互い余計なトラブルとは無縁でいたいとは思わない？」

黒髪の魔法少女の言葉を遮るように巴さんが言葉を挟む。巴さんからは素人の俺でも分かるぐらいに敵意がビシビシと感じられる。先ほどまでの柔和な巴さんはどこに行ってしまったんだと叫びたくなった。

女は恐い。強くそう思った瞬間である。

暫しの無言の攻防の後、やがて黒髪の魔法少女は諦めたのか、鹿目まどかをキッと一睨みしてゆっくりとこの場を去っていった。鹿目まどかと美樹さやかは緊張の糸が切れてその場にへたり込む。

気のせいかもしれないが、鹿目まどかを睨んだ後、俺のことを一瞬見たような気がするけど、それはきっと気のせいだろう。俺はあくまで無力な人間なのだから。

巴さんは黒髪の魔法少女が去ったのを確認してから俺たちの方に振り返る。

「キュゥべえを早くこっちに」

「あっ、はい！」

鹿目まどかが目の前まで来て女の子座りで腰を降ろした巴さんにボロボロになっているキュゥべえをそっと手渡しする。なんとまぁ、切り替えの早い事だ。もしかしたらこの切り替えの早さは女性特有のものかもしれないが。

巴さんは渡されたキュゥべえを膝の上に載せて、包み込むように両手を翳す。すると、ポゥ……と光がキュゥべえの身体を包み込み、ボロボロだった身体が見る見る回復していく。

これが所謂回復魔法と言うものだろう。その傷口が治ってゆく光

景は、見方を変えればとてもグロテスクなものに違いない。
「……よし、これで大丈夫」
巴さんは安堵のため息を吐く。
回復魔法で傷が完治したキュゥべえはふるふると首を振ってから巴さんにお礼を言う。
『ふー。ありがとう、マミ。お蔭で助かったよ』
本当に魔法ってすごいんだな。さっきまでまともに喋ることの出来なかったキュゥべえが、こんな呼吸をするように喋り出すなんて考えもしなかった。せいぜい身体が完治するだけで、体力まで回復するとは魔法恐るべしだな。
魔法のすごさを目の当たりにするたびに、これでまた俺の願いが無垢な少女たちの犠牲を対価にしなくても叶うのではないかと期待ばかりが膨らむ。
「お礼ならこの子たちに言って。私じゃ間に合わなかったかもしれないもの。それと冷静に対処してくれた向井君にもね」
「俺に感謝なんていらないぞキュゥべえ。ちゃんと対価なら貰ってるしな」
巴さんの言葉に付け加えるように俺は発言する。俺の願いを叶えられるかもしれない魔法について知る。そのために俺はこんな危険な世界に飛び込んだわけで、むしろ俺をこっちに引き込んでくれてありがとうと逆にお礼を言っても良いくらいだ。
『そうかい？』
「ああ」
キュゥべえは俺に目配せをしてから、
『ならば――ありがとう、鹿目まどか！　美樹さやか！』
先ほどの回復魔法で元気が有り余ったのか、無駄にエネルギッシュにお礼を述べるキュゥべえ。それが悪いとかではないが、さっきまでの緊張感からかけ離れ過ぎていて俺はついていけない。
「なんで名前知ってるの!?」
『なんでって、さっきまどかが自己紹介していたじゃないか』
当り前のようにキュゥべえは言う。鹿目まどかが二人まとめて自

己紹介をしたのはキュゥべえがボロボロになっていた時。あの時にも意識はあったんだな……。
　二人は何か釈然としない様子。
「ま、まぁ……さっき何があったか私は知らないけど、キュゥべえは私の友達なの。助けてくれてありがとうね」
　空気を読んで喋り出すのはさすが巴さんだろう。会ってまだ数時間しか経ってないハズなのに、彼女の優しさと言うものが伝わってくる。別にそれで信用するかは別の話だけど。
「わたしたちも方こそ助かりました！　えぇっと……巴さん？」
「マミで良いわよ……って自己紹介はまだだったわよね？」
　鹿目まどかがワタワタし始めたので助け船を出してやる。
「あ、俺が一応巴さんの紹介はしておきましたよ」
「あらそうなの？　でも改めてちゃんと名乗らせてもらうことにするわね」
　そう言って立ち上がる。そしてスゥっという効果音があるかのごとく変身を解き、見滝原中学の制服に戻る。
　改めて変身を見ると不思議だ。特に一度服が消えるわけでもなく、空間が歪むように次の瞬間には別の服装になっている。これも召喚魔法の一種だろうか？
「私の名前は巴マミ。あなたたちと同じ見滝原中の生徒よ。よろしくね」
　にこっ。満面の笑みで自己紹介を終える巴さん。
「変身した!?　いや、変身が解けた!?」
　驚く美樹さやか。
「いえ、こちらこそっ！」
　鹿目まどかは驚きつつも返事をしている。
「で、そこで座っているのが向井キリト君……ってあなたたちは自己紹介をすませていたのよね」
「ええまぁ」
　特に話の流れ的に立ち上がるまでも無いと判断していたので、結構おざなり気味に巴さんから紹介されてしまった。と言っても、自分で

自己紹介は済ませてあるけど。
鹿目まどかと美樹さやかの視線がこちらに向けられる。
「向井君もわたしたちを助けてくれてありがとね」
「ふん、一応お礼だけは言っておいてあげる。ありがと」
美樹さやかには軽く嫌われてしまったらしい。ふむ、素質ある少女から嫌われるのはマイナスかもしれないが、次があると思えばそこまで堪えるモノでも無い。
軽く会釈でお礼の言葉に応える。
「そしてこの子がキュゥべえ」
『よろしく』
最後に紹介されたキュゥべえが小さい手を挙げて自己主張する。
「ねぇ、キュゥべえ。ひょっとしてこの子たちも……」
前屈みになってキュゥべえに話しかける巴さん。鹿目まどかと美樹さやかはいきなりの話題の変更についていけなかったらしく頭にハテナマークを浮かべている。
『うん、そうだよ』
というか、巴さん……。キュゥべえに確認を取らなくてもコレぐらいは理解で知るでしょ。どう見てもこの二人はキュゥべえのことを知覚できているみたいだし、さっきは使い魔だって見えていた。
『まどか。さやか』
キュゥべえは二人に向かって向き直る。
『僕は君たち二人にどうしてもお願いしたいことがあるんだけど良いかな？』
「お願い……？」
「あたしも？」
あまりにも唐突な話題変更についていけない二人。俺はこの後、キュゥべえが何を言うか分かっている。
なにせ今日、本人から聞いたばかりのことだから忘れるはずもない。
『僕と契約して、魔法少女になってほしいんだ』
笑いかけるようにキュゥべえは二人に〝お願い〟をした。

それは俺が求めてやまない奇跡への片道切符で、同時に過酷な未来への片道切符でもある。
きっとその契約は、一面から見れば悪魔との契約と等しいものかもしれない。
でも、それでも俺は彼女たちが羨ましくて仕方なかった。
結構……いや、かなり重大なお願いであるはずなのに、「ハイキングにでも行かない？」とでも言っているような気軽な印象で言うキュゥべえ。
それが悪いとは言わないが、その権利さえ無い俺からしてみればイライラする事この上ない。もしも俺の理性が何らかの理由で今この時欠如してしまったとするなら、俺は権利を得た鹿目まどかと美樹さやかに襲いかかってしまうと確信できるほどだ。
「魔法少女？」
「え……えぇ？」
やはり二人は話について来れていなかった。まぁ、それもそうか。いきなりこんな事に巻き込まれて、詳しい話も聞いて無いウチに「魔法少女にならないか？」ってお願いされたら誰であろうとも困惑するに決まってる。
「おい、キュゥべえ。いきなりそんなこと言っても誰も了承してくれないと思うぞ」
このままだと埒が明かないと考え、立ち上がりつつキュゥべえに言ってやる。制服のズボンをぽんぽんと叩きホコリを落とす。
「詳しい話もしないまま、事を急いではダメじゃないのか」
『これはまどかとさやかには悪い事をしてしまった。ごめんね』
会った時からキュゥべえの言動は軽い。もしかしたらそれが契約を持ちかける側としてのコイツなりの交渉術の一つなのかもしれない。
「それなら詳しい話は私の家でしましょうか」
『そうだね。それが良いかもしれない』
「あっ、だったら俺は帰りますよ。一応俺は男ですからね。綺麗な女の人の家にお邪魔するのには抵抗があります」

「うふふ、一人暮らしだし遠慮しなくても良いわよ。それにいざとなったら私の方が強いもの」
巴さんの言葉には笑うしかなかった。
特に間違えを起こす予定は無かったが、マスケット銃でハチの巣にされる未来が明確に想像でき、逆に先ほどの光景からここで断ってもハチの巣にされるんじゃないかとさえ思ってしまった。
「……それじゃあ、お邪魔させて頂くことにします」
ひよった俺を誰が責められるだろうか。俺は時間を繰り返している以外、基本的にただの中学生でしか無い。
本当なら今日知り得た情報を整理して、明日からの行動予定を考えたいところだが、巴さんの家にお邪魔する事によって新たな情報が手に入るかもしれないと思うことにする。うん、そうだ。そうに違いない。
「そう、良かったわ」
手を斜めに合わせて喜ぶ巴さん。俺ってここまで巴さんに好かれるような行動を取ったっけ？
でもまぁ、どうやら巴さんはお節介焼きな性格と見受けられるからそこまで意識過剰にならなくても良いのかもしれないな。
『それじゃ、マミの家に向けて出発だ！』
当事者であるハズの鹿目まどかと美樹さやかを置いてきぼりにして話を進めて、詳しい話は巴さんの家に移動してからということになった。
置いてきぼりを食らって現在進行形で困惑を続ける二人の背中を押す様に、キュゥべえを先頭とした一行は一路巴さんの住んでいる家へ向かうのであった。
「あの、向井君……」
巴さんの家に向かう中、俺の後ろを歩いている鹿目まどかが声をかけてきた。ちなみに俺たちの集団は、巴さんとキュゥべえを先頭に、その次が俺で最後尾を鹿目まどかと美樹さやかの順番だ。
特にこの順番に意味は無いが、自然とこういう形になった。
「なんだ、鹿目まどか？」

「まどかで良いよ」
「そうか、鹿目」
「向井君が意地悪してくるよ、さやかちゃん」
何故か美樹さやかに泣きつく鹿目。別に異性の名前を呼ぶのが恥ずかしいだけで、意地悪してるつもりは無いのだが、別にそれを説明するまでも無いか。
「ちょっと、まどかに何してくれてんのよ」
「何って、普通に名前を呼んだだけだぞ、美樹さやか」
「だからあなたのその他人行儀な名前の呼び方が気にくわないんだよ。だからあたしのことはさやかって呼びなさい。そしてまどかのこともまどかって。良いわね？」
良いわね……ではない。だが、恥ずかしいから名前を呼べないなんてコイツらに言えるハズも無く、
「まぁ、考えておく」
自分でも情けないと思う。精神を安定させるために自分の胸元にあるネックレスを掴もうとする。
あれ……？
確かにそこにあるはずのネックレスが無かった。制服の下に入れているので掴み損ねたのかもしれないと思ったが、目で見て確認してみても首にかけているハズのネックレスは見当たらなかった。
「どうしたの？」
怪訝そうな顔で自分の制服の中を見る俺に対し、鹿目が心配そうに声をかけてくる。やはり心の中でもまどかとは呼べない。
朝からの一連の動作を確認するにつれて、ただ単に自分がネックレスをつけるのを忘れていただけだということを思い出す。
慌てて話題を逸らすことにする。
「あ、いや、なんでもない。それよりもなんか用があったんじゃないのか？」
「ずっと気になってたんだけど、向井君も魔法少女だったりするの？」
話題を逸らした事を後悔した。
「あっ、それ、あたしも気になってたんだよね。でも向井は男だから魔

法少女って言うよりは魔法少年じゃない？」
しかも美樹までこの話題に乗ってきた。
落ちつけ俺。知らないことは罪ではあるが、それと同時に免罪符でもあるんだ。それにコレぐらいのことで腹を立ててもしょうがないだろう。
「俺はそんな高尚な存在じゃないよ。どちらかというと、お前たちと同じ少し特殊な一般人という括りに当てはまるんじゃないのか」
自分で言っていることに確証は持てないが、それでも俺には力は無い。ただただ永遠に繰り返される時間を漂っている存在。それを少し特殊と言っても良いのかは不明だが、それっぽちの人間なんだ。
「そろそろ私の家に着くわよ」
俺たちの会話を聞いていたのか、巴さんが絶妙のタイミングで声をかけてきてくれた。
これ以上この話をしていたら、俺は俺自身を抑制できる自信が無い。それを巴さんは見抜いてくれたみたいだ。
それにしても魔法少女か……。
なれるもんならなりたいよ。例え過酷な未来が待ち受けていたとしても、それでも未来がやって来るんだろう？
「ここが私の住んでいるマンションよ」
街は夕焼け色に染まり、もう何分も経ったらその色が夕闇色に変わるだろう。そんな中、俺たちは巴さんの案内で彼女の住む家とやらにやって来た。
そのままエレベーターに乗り込み、巴さんが住んでいる階層に一気に上がる。それにしてもこういう狭い密室空間で周りが異性だらけだと非常に肩身が狭い。巴さんはニコニコしているだけだし、鹿目と美樹は二人でひそひそと小声で密談。唯一俺の助けになりそうなのはキュゥべえだけだった。
とかなんとか考えていたらすぐにエレベーターのドアは開き、巴さんの部屋まで一直線だった。自分が憐れでならない。
「さっきも言ったけど、私、一人暮らしだから遠慮しなくても良いわよ」

そう言いながら巴さんはがちゃりと音を立て玄関の扉を開く。
「お邪魔します」
鹿目と美樹は律義に頭まで下げてから部屋に入っていく。俺はと言うと、「……お邪魔します」と素っ気なく無愛想に小声で言うだけにした。
「うわぁ」
「素敵なお部屋……」
部屋に入って開口一番。鹿目と美樹が巴さんの部屋を見て感嘆の声をあげる。
俺も彼女たちのその意見には賛成だった。巴さんの部屋はデザイナーの人がこの部屋を手掛けたと言われても納得のいくほどに素敵な部屋だった。
「ありがとね。でも、ろくにおもてなしの準備も無いんだけどね？」
あはは、と笑う巴さん。でもそれはしょうがない事なんじゃないだろうか。そもそも俺を含めて彼女たちがこの部屋に来ることが決まったのってつい数十分前ことだし。
……と俺は思ったのだが、巴さんのおもてなしは俺が思っていたのと違うようだ。
「マミさん。すっごくおいしいです」
「うん、めちゃうまッスよ！」
あれれ？　もてなす準備が無いと巴さんは言っていたのになんでテーブルの上にケーキと紅茶が用意されているのだろうか？
どうやら巴さんと俺の間に言語の意味を理解する上で価値観の相違がみられるようだ。もしかしたら巴さんは良いところのお嬢様なのかもしれない。
「ありがとう。向井君はどうかしら？」
「え？　ああ、とっても美味しいですよ」
「それなら良かったわ。それじゃあ本題に入りましょうか。向井君は彼女たちにどこまで話したの？」
「聞かれた事をそのまま答えただけですよ。だからちゃんと説明した方が良いと思いますけど」

「わかったわ。それじゃあ二人ともこれを見てくれる？」
　俺を一瞥してから何処からともなくソウルジェムを取り出す巴さん。先ほどまでは手には何も持っていなかったハズなのにな。だが俺はその程度のことでは驚かない。
「うわぁ、キレイ……」
「これはソウルジェム。キュゥべえに選ばれた以上、あなたたちにも他人ごとじゃないものね。キュゥべえと契約することで生み出される宝石で、魔力の源であり、魔法少女であることの証でもあるの」
　巴さんの説明に美樹が疑問を口にする。
「契約って？」
『僕は君たちの願い事を何でも一つ叶えてあげる』
「え!?　ホント？」
「願い事って……」
『何だってかまわない。どんな奇跡だって起こしてあげられるよ』
「……俺の願いは叶えてくれないくせにな」
　自然と口から言葉が漏れだしてしまった。キュゥべえが俺の願いを叶えてくれないなんて分かってるくせに……。
「え？　なんで向井君の願いは叶えてもらえないの？」
『それは彼が生物学上男として分類されているからさ。僕が願いを叶えてあげられるのは、人間の、それも君たちぐらいの年齢の少女たちだけだからね』
「そうなんだ……」
　何故かしょんぼりとする鹿目。それと美樹も「きっと、良い事あるさっ！」って俺の背中を叩くなよ。別に俺は哀れに思われたくはないんだぞ。
「俺のことは良いから早く話を進めてくれ」
　このままじゃ、話がいつまで経っても進まないような気がしたので続きを促す。
『僕はどんな願いを叶えてあげるけど、その代わりに僕から君たちにお願いした言い事があるんだ。等価交換ってヤツだね』
「あたしたちが魔法少女になるってヤツ？」

『そうだよ。僕がどんな願いでも叶えてあげる代わりに、君たちは魔法少女になって「魔女」と戦う使命を負うことになる』
「その戦わなくちゃいけない魔女ってなに？　魔法少女とは違うの？」
「さっきお前たちが見た使い魔の親玉だよ。と言っても俺もまだ見たこと無いけどな」
　早いところ魔女とやらを実際に見てみたかった。情報は少しでも多く知っておくことに意味があるんだから。
「あのわけ分かんないヤツの親玉か……」
『願いから生まれるのが魔法少女とすれば、魔女は呪いから生まれた存在なんだ。魔法少女が希望を振り撒くように、魔女は絶望を撒き散らす。しかもその姿は普通の人間には見えないからタチが悪い。不安や猜疑心、過剰な怒りや憎しみ。そういう災いの種を世界にもたらしているんだ』
　普通の人間には姿が見えないと言えばキュゥべえもだろ。そして「魔法少女になってよ」と奇跡と言う対価を差し出しながら悪魔の契約と何ら変わりない言葉をかけてくる。
　もっとも、俺の場合は悪魔の契約と言うよりは神の救いのように感じるが。
　その後もキュゥべえと巴さんは何も知らない二人に説明していく。コチラの世界を知って一日目の俺が口出しできるハズも無く、黙っているしかない。
「理由のはっきりしない自殺や殺人事件はかなりの確率で魔女の呪いが原因なのよ。形の無い悪意となって人間を内側から蝕(むしば)んでいくの」
「そんなヤバいヤツらがいるのにどうして誰も気付かないの？」
『魔女は常に結界の奥に隠れ潜んで、決して人前には姿を現さないからね。さっき君たちが迷い込んだ迷路のような場所がそうだよ』
「結構危ないところだったのよ。あれに呑み込まれた人間は普通生きて帰れないから。私が助けにいけなければ、あの場所から生きて帰れなかったと思うわ」
　巴さんの言葉を聞いて絶句する二人。まぁ、そんなもんだろうな。

死と言うのは人間にとってもっとも嫌なことである。キュゥべえの言っていた通り人として生まれたのなら、やがてたどり着く願いは不老不死だろうし。

だが俺の場合は何度となく死んでいるからその辺りの感覚がマヒしてしまっているらしい。それにどうせ繰り返すことになるという安心感のようなモノまである。

クソッ、そんな風に考えてはいけないのに……。

「そ、そんな怖いものとマミさんは戦っているんですか……」

「ええ、命懸けよ。だからあなたたちもキュゥべえと契約するかは慎重に選んだほうがいい。キュゥべえに選ばれたあなたたちにはどんな願い事でも叶えられるチャンスがある。でもそれは……死と隣り合わせなの」

「……」

「うーん、美味しい話ではあるけど悩むなぁ……」

俺ならばその程度のリスクでは悩むことは無い。たったそれだけで未来がやってくるなら。

「うぅ……」

「ねぇ、そこで提案なんだけど、二人ともしばらくの間、私の魔女退治に付き合ってみない？」

「……えぇ？」

「魔女と戦いがどういうものかその目で確かめてみると良いわ。その上で危険を冒してまで叶えたい願いがあるのかどうか、じっくり考えてみるべきだと思うの。もちろん向井君もね？」

「うぇ!?」

俺には関係話だと思って用意されたケーキをフォークで口に運ぼうとしていたら、唐突に俺に振られた。

特にデメリットは無い。魔法少女である巴さんの近くに居れば安全だろうしな。

「まぁ、別に良いですけど……」

「それじゃあ決まりね！」

その時の巴さんの嬉しそうな顔がとても印象的だった。

と言うわけで巴さんのご好意（？）で今後も魔女退治についていくことになった。
俺としては限りある時間の中で、どうやって自分にとって納得がいく方法を探すかと考えていたので願ったり叶ったりの提案だった。
ここで一旦話が落ち着き、一息吐くために誰からともなく紅茶を口に含む。カチャリと陶磁器であるティーカップが音を響かせる。
「あっ、そうだ。あの転校生もマミさんと同じ魔法少女なんですか？」
心が落ち着くような静寂であったのに、その静けさに堪えられなくなったのか美樹が口を開いた。
転校生と言う単語に心当たりがあったので瞬間的に思考を廻らせると、巴さんが使い魔と戦闘している時に美樹から質問されたっけと思いだす。そしてよくよく考えてみると、あの黒髪の魔法少女が転校生とやらなのだろう。
「ええそうね、きっと彼女も魔法少女で間違いないと思うわ。それもかなり強い力を持っているみたい」
美樹の質問に巴さんは首を縦に振った。
その話が事実であるならば、あの黒髪の魔法少女は俺の予想通り魔法少女で、学校でキュゥべえが言っていた二人の魔法少女のウチの残りの一人なんだろうな。
「でもそれならさ、魔女をやっつける正義の味方なんだよね？　それがなんで急にまどかを襲ったりしたわけ？」
へぇー、鹿目はあの黒髪の魔法少女に襲われていたのか。確かにコチラを睨んできていた彼女の目には敵意が感じられた。
『彼女が狙っていたのは僕だよ。新しい魔法少女が生まれることを阻止しようとしてたんだろうね』
「それはどういうことだ？」
始めて聞く情報にだんまりを決め込んでいた俺の口が開いた。
黒髪の魔法少女が新たな魔法少女が生み出されるのを阻止する理由が全く見えてこない。むしろ同じく魔法少女である巴さんは、鹿目や美樹を魔法少女にしようとしているように見える。いや、彼女たちが魔法少女になることを許容していると言ったところか。

だがどちらにしても新たに魔法少女が生まれてくることに対して認めているということになる。
『つまり彼女は自分のテリトリー内で新たに生まれた魔法少女が魔女を倒すことを良しとしていないんだ』
まったく……。キュゥべえの言葉はどこか遠回りでまどろっこしい。これじゃあ、コイツの言葉をまともに聞き入れるのは危ないかもしれないな。
俺がキュゥべえの言葉について考えていると美樹が疑問を口にする。
「なんで？　同じ敵と戦ってるのなら、仲間は多い方が良いんじゃないの？」
「それが、そうでもないのよね。むしろ競争になることの方が多いの。つまり魔法少女は必ずしも味方同士ってわけじゃないの」
現在進行形で俺が脳内で考えていることが目の前で話されている……。簡単には話してもらえないんじゃないかと思っていたのに予想外だった。
「そんなぁ……どうして？」
「魔女を倒せば、それなりの見返りがあるの。だから時と場合によっては手柄の取り合いになって、衝突することの方が多いのよ」
「つまりアイツは……キュゥべえがまどかに声かけるって、最初から目星をつけていて、それで自分の都合の悪い敵を増やさない為に朝からあんなに絡んできたってことか……」
「たぶん、そういうことでしょうね……」
シーン、と空気が重くなる。俺としてはどうということでもないのだが、巴さんの話を聞いて鹿目と美樹が軽く沈みこんでしまっているのが原因だ。巴さんは彼女たちを見て「やっちゃったー」と言いたげな表情をしている。
仕方が無いので俺が空気を軽くするか。
「そんなに気にする必要は無いんじゃないか？」
「え？　でも……」
「だってお前たちは巴さんの魔女退治に付き合うんだろ？　巴さんが

近くにいるなら安全は保障されたようなもんじゃんか」
視界の端では巴さんが「そんなに頼りにされても……」と、苦笑いしている。
「それとも何か？　巴さんと一緒にいれない日常生活の方が恐いのか？　それほどまでにあの黒髪の子は危ないヤツなのか？」
「そ、そんなことないよ！　ほむらちゃんはそんな子じゃない……と思う」
あの黒髪の魔法少女はほむらと言うらしい。本当に今さらの情報だな。それにしても鹿目の言葉が後半に行くにつれて力が無くなっていった。これは自分で言いながら自信が無くなっていったのだろう。
「ならいいじゃないか。そのほむらって子を鹿目が危ないと思っていないのなら何ら心配する必要はない。もしも危ない目に遭いそうになったらキュゥべえを通じて巴さんに助けを求めれば良い。そうだろ、美樹？」
「確かにそうだけど、向井はあたしたちのこと助けてくれないのかよ？」
美樹の言葉には溜め息を吐くしかない。
「俺には魔法少女をどうにかするなんて出来やしないよ。そもそも俺に戦う力なんて無いしな」
時間を繰り返すことは出来るけどな、と心の中で付け足す。厳密には強制的に繰り返されるのだが。この連鎖はまるで呪いのようで……呪い？
確か、魔女は人間に呪いをかけるんだよな？
だとしたら俺をこの永遠の牢獄に幽閉したのは魔女なのかもしれない。
ようやく見つけ出した可能性だが、今はそれを考えている場合では無い。
「だから俺を頼るな。俺は俺自身のことだけで精一杯なんだ。だがもしも俺を頼りたいというなら俺の願いを叶えてくれ。それを言い訳にお前たちが魔法少女になって戦え」

言いきってから、ティーカップに残っていた紅茶を一気に飲み干す。
言ってしまった……。
彼女たちには俺を言い訳に使えと言ったのに、実際は俺の方が向こうから頼んできたということで彼女たちを言い訳に自分の罪悪感を掻き消そうとしている。
「ごちそうさまでした」
重くなってしまった空気を軽くするハズだったのに、余計に重くしてしまって巴さんには悪い事をしてしまったかもしれない。
それでは、と言い残して俺は巴さんの家から帰ることにした。
結構長く巴さんの家にお邪魔させて頂いたようだ。ガチャリと開けた巴さんの家の玄関の扉の向こうではすっかり夜の帳は降りて、辺りを夕闇色に染めていた。足早にエレベーターまで直行し、一階であるエントランスホールまで降り、その足でそのまま巴さんの住むマンションを後にする。
自宅に向かって少し歩いてから振り返る。俺の視線の先には先ほどまで居たマンションがあった。
「何やってんだかな、俺は……」
自分でも理解はしているつもりだ。今の冷静ぶっている自分が、本当は頭の中がぐちゃぐちゃとパニックに陥っていることぐらい……。
だからその場その場で言っていることが矛盾していたと思うし、自分でもよく分からないうちに唐突に口から言葉を発している。それが今回裏目に出たかもしれない。
――自分が自分を制御出来ていない。
その事実が酷く俺を苦しめていた。しかも冷静ぶっている俺の脳はそれを強く認識してしまっていて、それが更にタチが悪い。
認識しているハズなのに自分を制御できないのがどうにももどかしくて仕方がなかった。
溜め息を一つ。十月も後半に入り、吐いた息が白く染まっていた。
「はぁ……、帰るか」
止めていた歩みを再び進める。街灯が俺の進むべき道を照らして

くれている。
「ああ、俺の未来への道も照らしてくれないかなぁ……」
道標さえあればあとは進むだけだから楽で良いな……。
翌日。
今日は忘れずに十字のネックレスを首から提げて登校した。朝起きて今日は忘れないぞとすぐさま首に提げた。このネックレスは十字架と呼ぶにはあまりにもぞんざいな造りをしていて、これまで俺はこの形を十字だと言い張ってきた。
言い張ってきたと言っても、俺がこの十字のネックレスを首から提げていることを知っている友人は少なく、それほどの人数に言ってきたわけじゃないが。
「おはよう」
教室のドアを開けたらまだ早い時間だったのに知り合いの顔が見えたので挨拶をしてから自分の席へと座る。昨日もそうであったのだが、長期休暇後の久しぶりの登校のような感覚に襲われていた。
それにしても昨日は言い過ぎた。
出会ってまだ数時間しか経っていなかった鹿目と美樹に俺の願いと言うか、目的の触り一部を言ってしまった。
――俺の願いを叶えてくれ。
この言葉だけ聞けばなんて傲慢なのだろう。とてもではないが人に頼む態度とは言えない。完全に自分の欲望を他人に強要させようとしているように見える。
自然と出てしまったその言葉はある意味俺の率直な願望なのだ。早くこの地獄とも呪いとも言える繰り返しの連鎖から解き放たれたい。だから俺は言ってしまったのだろう。
少し憂鬱気味に1時限目の授業の準備をしているとどこからともなくテレパシーが俺の頭の中に響いてきた。どこからともなくと言うか、おそらく同じ階層の教室だと思うけど。
『つーかさー、アンタ……ノコノコ学校までついて来ちゃって良かったの？』
『どうして？』

『言ったでしょ。昨日のアイツ、このクラスの転校生だって。アンタ命狙われているんじゃないの？』
　そう言えば、昨日はアレからキュゥべえの姿を見てなかったな。どうせアイツは神出鬼没のようだし心配することは無いのだが、まだまだ聞きたいことがあるから、出来れば俺の近くにいてもらいたいものだ。
『むしろ学校の方が安全だと思うな。マミもいるし』
『マミさんは三年生だから、クラスちょっと遠いよ』
『ご心配なく。話はちゃんと聞こえているわ』
『わ、マミさん!?　てことは向井にも聞こえてるってわけ!?』
　確かに聞こえているな。だから何するってわけでもないが、他人の会話を盗み聞きしていたような罪悪感があったけど。
『この程度の距離ならばテレパシーの圏内だよ』
『えと……あの、マミさんおはようございますっ！　向井君もおはよう』
『おはよう』
　一言だけ挨拶を済ませておくことにする。
『ちゃんと見守っているから安心して。それに、あの子だって人前で襲って来るような真似はしないはずよ』
『なら良いんだけど……。げっ、噂をすれば影』
　言葉から察するにあのほむらって子が登校して来たらしい。俺からみればそこまで露骨に敵意を向けるような態度を示さなくても良いと思う。
『そうだよ。きっと大丈夫だよ、さやかちゃん。ね、向井君？』
『俺に振られてもなんとも言えないんだが……』
『わたし、昨日アレから色々考えたの。向井君に言ってくれたみたいに、わたしはほむらちゃんがそこまで悪い子には見えない。だからきっと大丈夫だよ』
　……俺にそれを宣言されても困るんだが。
『そうね。いざとなったら私や向井君がいるわけだし、鹿目さんが信じる通りにしたらいいと思うわ』

さりげなく俺を入れないでくださいよ巴さん。
『うぅ……。まどかがそこまで言うなら、あたしが騒ぎ立ててもしょうがないか』
そもそも美樹が騒ぎ立てる必要など最初から無い。
『まぁ、頑張れ』
俺から掛けられる言葉はこれくらいしかなかった。
『うん、わたし頑張ってみる！』

第四話

今日は散々な日である。

鹿目たちとテレパシーが切れた後、タイミングを見計らっていたのではないかと勘繰ってしまうほど完璧なタイミングで、同じクラスの友人が俺の席までやって来て「テメェ、巴先輩といつお近づきになったんだ！」と詰め寄られた。

ある程度は予想していたのだが、やはり巴さんはこの学校の一部の男子生徒からは大変知名度が高いらしい。俺としては二年も通っているのにその話が初耳だったことにある種の悲しみが襲ってきた。

そこまで俺は友人関係が狭かったけなぁ……？

しかしまぁ、落ち込んでいても仕方が無いので、「偶然知り合っただけだよ」と返してみるも、「じゃあ、なんで待ち合わせしてたんだチクショー」と反撃を食らう。本当のことを言っても良いのだが、それだとまた孤独になりそうだったので愛想笑いで場を繋ぐしかない。

『実は巴さんって魔法少女なんだ。それ関係で知り合ってな』そんな事を言った瞬間に俺の学校生活は脆くも崩れ去ることになるだろう。すでに一度同じようなことを言って孤独になった経験がある。いわゆる経験者は語るってヤツだ。その時も目の前のコイツは俺のことを突き放しているから信用は出来ない。

その後もウザいぐらいに俺を問い詰めてくる友人から助けてくれたのはＨＲの開始を告げるチャイムでは無く、その後に入って来た担任だった。チャイムが鳴ってもしつこく追及してきた友人だったが、強面で有名な担任から注意されれば引きさがるしか無い。

しかし、担任は強面と言っても、俺が引き籠もっている時には何度となく俺の家まで来てくれていたので本当は良い教師なのである。まぁ、それだけで信用に値するかどうかは別として。

「お前って少し前と雰囲気変わったよな」

昼休みに入り早々に巴さんのことを問い詰めに来た友人が、そんなことをポロっと口から零した。

そりゃ、何ヶ月……何年もの時間が経てば変わるさ。それに俺は変

わらないと先に進めないんだ。
「そうか？　あんまり実感は無いんだけど」
ここは惚けておく。あまりにも急激な変化は人を孤独にするからだ。
その後、二、三分の間少し問答があったが、それは俺のことを呼ぶ声が聞こえてきて終わりを迎えることになった。
「おーい、向井ーっ！」
「ちょっと、さやかちゃん……」
手をブンブンと振って自己主張の激しい美樹と、それをなんとか宥めようとしている鹿目が教室の出入り口のところにいた。鹿目の努力は認めるが、そもそもこの教室に来る前に何とかして欲しかった。
「オイイイイ!!　巴先輩だけじゃなく、いつあんな可愛い女子二人となんか知り合いになったぁあああああ!!」
うるさい。目の前で叫ばないで欲しい。
お前が叫んだせいで鹿目が怯えてるんだけど。まぁ、美樹の方は「可愛いなんてそんなぁ」ってクネッてるけど。
全くもってメンドクサイ状況である。
急激な変化は人を孤独にする……そんなことを思った直後にコレだよ。女子と知り合いになる。それは思春期の男子にとっては急激な変化と言えよう。
「とりあえず呼ばれたみたいだから行ってくんな」
席を立ち二人の元へ行く。背後から怨念のような叫びが聞こえてくるが、スルー一択である。
「なんか用か？」
先ほどまでは引き戸の陰になっていて確認出来なかったが、キュゥべえもいた。おそらく二人はキュゥべえに俺のクラスのことを聞いて来たんだろうな。
「あの、よかったらわたしたちと一緒にお昼ごはん食べようよ」
「ほらほら、うら若き乙女のあたしらと一緒に昼飯食べられるんだ。もちろん良いよな？」
「別に良いけど。はぁ……、ちょっと待ってろ」

一度自分の席まで戻り、朝買っておいたコンビニのパンを持って彼女たちの元へと再度行く。またしても背後から呪詛が聞こえてくるが無視に限る。
「で、どこで食べるんだ？」
「屋上だよ。風がとっても気持ち良いんだ」
「ああ、了解。つか、」『今度から俺を呼び出すときはテレパシーにしてくれ。またバカが騒ぎだすからな』
俺がテレパシーのことで喋りかけると鹿目と美樹は「ハッ」とした顔になった。こりゃ完全に忘れていたな。
『あ、えっと、その、ごめんね』
『うわぁ、失念してた。あたしらがここに来るまでも無かったのか』
ガビーンと悔しがる美樹。なんかそれ古いぞ。
そんな感じテレパシーで会話をしつつも屋上を目指して歩きだす。生徒でごった返している廊下を潜り抜け、屋上へと続く階段を上る。
ガチャリと開いた校舎と屋上とを隔てる重い扉の向こうには、十月の蒼天が俺達を迎えてくれた。扉を開いた瞬間に校舎に吹き込む風がまた気持ちいい。
手頃なベンチに座り、昼飯を食べ始める。俺はコンビニの袋からパンを取り出しパクつく。鹿目と美樹は弁当のようだ。
美樹が一人で騒いで、それに鹿目は苦笑しながらも反応する。そして俺は無言で食べる。時々俺に話を振られるのだが、一言二言で会話が詰まる。やはり同年代の女子と喋るのにはまだ時期尚早のようだ。
各自食べ終わり、食後の駄弁りタイムに移行する。
「ねー、まどか。願い事、なんか考えた？」
「ううん。さやかちゃんは？」
「あたしも全然だわー。なんだかなぁ……、いっくらでも思いつくと思ったのになぁ。欲しい物もやりたい事もいっぱいあるけどさ、命懸けってところでやっぱ引っかかっちゃうよね。そうまでするほどのもんじゃねーよなーって」
「うん」
「向井には命懸けでも叶えたい願いってある？」

「あるぞ」
繰り返しか解き放たれたいっていう唯一の願いが。それさえ叶えられるのなら、他のどんな物を対価に支払っても良い。命なんて安いもんだ。
「ホント？　どんな願いなの？」
「昨日も言ったが俺の願いを叶えてくれるのなら、俺の願いのことを教えてやっても良い」
今はまだお前たちに言うわけにはいかないんだ。
「ちぇ、参考にしようと思ってたんだけどなー」
俺の願いは参考になんてならんよ、と内心苦笑する。それにしても昨日、俺は巴さんの家で空気を重くしてしまったハズなのに、彼女たちは普通に接してくれている。それがなんだか怖かった。
『意外だなぁ……。大抵の子は二つ返事なんだけど』
ああ、俺だったら二つ返事だよ。
「まぁきっと、あたしたちがバカなんだよ」
「そ、そうかな……？」
「そう、幸せバカ」
美樹はここで言葉を切り、立ち上がってフェンスの向こう側に視線を向ける。ガシリと握ったフェンスがギィギと音を立てる。
「別に珍しくなんて無いハズだよ、命と引き換えにしても叶えたい望みって……。そういうの抱えている人は世の中に大勢いるんじゃないのかな。現に向井にもあるみたいだし」
「そうだな」
「だから、それが見つからないあたしたちってその程度の不幸しか知らないってことじゃん。恵まれ過ぎてバカになっちゃってるんだよ。なんで、あたしたちなのかな……」
それはお前たちが少女だからだよ。生物学上、男と分類されていないからこそ、奇跡を願う権利が与えられているんだ。それが堪らなく羨ましいよ。
「不公平だと思わない？　こういうチャンス、本当に欲しいって思っている人は他にいるハズなのにね」

「さやかちゃん……」
美樹の独白はもっともだった。だったら俺にそのチャンスをくれとは言えずに、さすがの俺もだんまりを決め込むしかなかった。
ここら一帯に沈んだ空気が感染してしまったかのように、一同が黙りこむ。見るからに元気印の美樹も、鹿目も、そして俺も……。
別に俺は沈黙が悪い事だと思ってはいない。ただ単に自分がここにいて良いのかと不安になるだけだ。ここ最近、俺の行く先々で沈黙が生まれているような気がするのがより一層俺を追いこみ、口を固く閉じさせる。
不意に空を見上げてみれば、一面の水色の空が迎えてくれるが、ただそれだけだった。
そんな中、そいつは現れた。タンタンタンと上履きが屋上のタイルを踏みならす音が聞こえてきて、一同の視線は自然とそちらに向けられる。
「ちょっといいかしら」
「アンタ……」
「ほむらちゃん……!」
その長くて艶やかな黒髪を吹き抜ける風になびかせ、見滝原中の制服で身を包み俺たちの目の前に登場したのはあの黒髪の魔法少女だった。
彼女は俺たちの顔をそれぞれ一瞥し、最終的には鹿目へと視線を戻す。
『どうすんだよ、おい。これはかなり不味い状況じゃないの?』
美樹がだらりと冷や汗を流す。そりゃそうだよな。俺としてはあまり実感がないが、美樹たちは一度このほむらって子に襲われているから危機感を抱くのは当り前だ。
俺からしてみれば、今この状況でコイツが俺達を襲ってくるなんて思えない。
『どうするもこうするも普通に話しかけられただけの様な気がするから大丈夫じゃないのか』
思った事をそのまま伝えてみる。特に他意は無かったのだが、どう

も美樹は俺の言葉が気に入らないらしく顔をしかめる。
『向井ってさ、緊張感ってものが欠けてるよね』
そんなのは自覚しているよ。そもそも仮に今俺が殺されたって、また繰り返すんだ。そしたら、ほらまた初めの日に戻るだけだよ。こんな状態では失敗なんて恐れるはずもない。だから緊張感なんて俺には無縁なものだ。
さて、どうやって美樹を宥めようかと思っていると、
『大丈夫よ』
と、どこからともなく巴さんの声が聞こえてきた。周囲を見渡してみると、その姿は隣の棟の屋上にいることが確認出来た。
どうやってこの状況に気付けたのかとか、どうやってこの短時間であそこにやって来たのかと疑問が浮かんできたが、今はそんなことどうでも良いか。
『ほら見ろ、巴さんもいるみたいだし大丈夫だろ』
『マミさんがいるなら……大丈夫か』
『そ、そうだよね。ほむらちゃんは危ない人なんかじゃないよねッ！』
そんなこんなで話がまとまり、美樹が強気に出る。
「なんの用だよ、昨日の続きかよ？」
おい、先ほどまでの少し弱気お前はどこに行ったよ。やはり巴さんの存在が大きいのか？
「いいえ、そのつもりはないわ。そいつが鹿目まどかと接触する前にケリをつけたかったけれど、今更それも手遅れだし……」
強気な美樹に対してほむらは冷静にあしらう。そしてキリッとキュゥべえを睨んだ。どうやら彼女はキュゥべえに対して敵意を抱いているらしい。
俺からしても、キュゥべえは胡散臭いところがある。まぁそれでも俺にとっては利用価値があるのでそこには目を瞑っている。
「で、どうするの？　アナタも魔法少女になるつもり？」
彼女は鹿目に視線を戻して言い放つ。昨日もそうだったが、彼女は鹿目に対して何かあるのかもしれない。
「わたしは……」

言い淀む鹿目。未だ決めきれていないと言った風に眼を泳がせる。
そんな鹿目を庇うように美樹がほむらに噛みつく。
「アンタにとやかく言われる筋合いはないわよ！」
しかし、ほむらは美樹に目もくれずに鹿目をその瞳で見続ける。完全に美樹のことは相手にしないつもりのようだ。
「あなた昨日の話憶えてる？」
「え……うん」
「そう、なら良いわ。そいつの甘言に耳を貸して後悔することがないようにね。忠告が無駄にならないように祈ってるわ」
周りにいる俺たちのことなんて初めからいなかったかのように鹿目だけにそう言い残して、ほむらはくるりと俺たちに背を向け歩きだす。
「あ……、待って、ほむらちゃんっ！」
鹿目の呼びかけに彼女はこちらに振り返る。
そのことを確認したのち、鹿目は言葉を紡ぐ。
「あの……、ほむらちゃんはその……どんな願い事をして魔法少女になったの？」
愚直な質問だった。あまりにも真っ直ぐすぎて、愚かな質問だ。
だが、鹿目は分かっていない。鹿目が訊いた事は、魔法少女になって魔女と戦ってまで叶えたかった願い事で、その人を形成する上で根幹に関わるモノだ。
俺だって昨日巴さんと話していた時、少し気になったけどあまりにも失礼過ぎて質問なんて出来なかった。
「……っ」
ほむらは言葉に言い表せないといった風に顔を歪ませ、さっきのくるりという優雅なターンとは違い、タッと焦ったように背を向け俺たちの目の前から立ち去るために止めていた足を動かし始めた。
「わたし怒らせちゃったのかな……？」
「なんだよ、教えてくれたっていいじゃんかよ」
はぁ……、仕方ない。
鹿目は困惑気味だし、美樹は軽い逆恨み。そして巴さんは端からあ

の子に対して敵意むんむんと。キュウベえに至っては傍観している。
ここは俺が動くしかないな。
「ちょっと行ってくる」
そう言い残して俺は駆け足でほむらの後を追う。鹿目と美樹は俺のことを止めようと声をかけてきたが、背後からの言葉はスルー一択だってお前たちが俺のことを呼びに来た時に決まったんだよ。ある種の自業自得ってヤツだ。
「なぁ、待てよ」
「なにかしら？」
ほむらはちょうど屋上から降りる階段の中ほどで足を止めて振り返る。俺は階段の上からそれを見下ろすという構図だ。
「その、なんだ。鹿目には悪気があったわけじゃないんだ。アイツは昨日初めて魔法少女と出会って、まだその意味を知らないんだよ」
「そんなことはわかっているわ。あの子がそんな子じゃないってことぐらい……。それで、もう行っていいのかしら？」
「ああ、分かってくれているならいい。俺は向井キリト。お前は？」
自分から自己紹介していて、恥ずかしくなった。だが、彼女には逆光で俺の顔の赤みなんて識別できないだろう。
彼女は振り向かせていた頭を正面に戻しつつ、
「……暁美ほむらよ」
視界の先で悠々と階段を降りていく彼女を見下ろす。
――暁美ほむら。
よし、憶えた。どこかその名前を聞いたことのあるような気がしたが、まぁどうせ過去の知り合いに似たような名前が居たんだろうなと自己完結することにした。
暁美ほむらが上履きで階段を踏み鳴らしながら降りていく様子を見届けてから、俺は鹿目たちのところに戻ることにした。
視界の端で別の棟の屋上にいる巴さんの様子を窺うと、すでにその姿は無かった。きっと暁美ほむらが俺たちの目の前からいなくなって、安心してこの場を離れたんだろうと当たりをつける。
「どうして向井はあの子のこと追いかけたのよ。あんなヤツのことな

んか放っておけばよかったのに」
「まあまあ、さやかちゃん落ち着いて」
本当にコイツらは何も分かっていない。さっき鹿目が質問したことがどれだけ魔法少女にとって訊かれたくないものかと言うことを。
「いいか、俺は暁美ほむらじゃないが一つだけ忠告しておいてやる」
「ちょっといきなりどうしちゃったのよ。そんな真剣な表情向井らしくない」
言葉から察するにどうやら美樹はたった一日で俺のことが理解できるらしい。ハハッ、思い上がりも甚だしいな。それだけで俺の何度、いや何十度の繰り返ししてきた全てを理解出来るわけないじゃないか。
俺の中の何かが爆発しそうになるが、ここはグッと堪える。
「特に俺が忠告したいのは鹿目、お前だ」
先ほどの暁美ほむらに倣って美樹をとりあえず無視して鹿目に視線を向ける。
「わ、わたし……？」
そうだよ。お前だよ、鹿目。
「お前たちは魔法少女がどういう存在か本当に理解しているのか？」
「当り前じゃん。魔法少女ってのは、魔女を倒す正義の味方なんでしょ。そうだよね、まどか？」
「え？　う、うん。たぶんそうだと思うけど……」
ダメだコイツら。魔法少女を正義の味方とか認識していたのか。まぁ、確かにやっていることは魔女退治というアニメで見る魔法少女モノの勧善懲悪の物語のようだよな。
だけど、現実を見てみれば魔法少女は全然これっぽちもそんな生易しいモノじゃない。
「いいか、魔法少女ってのは義務なんだよ。いつか死ぬまで永遠に魔女と戦わせられる憐れな道化でしかないんだ。そうだろ、キュゥべえ？」
『そんな風に言って欲しくはないなぁ。僕らとしては魔女と戦かってもらう対価として、どんな願いでも叶えてあげると言う奇跡を提供し

ているんだ。僕は物事を一面からしか解釈しない君の考え方はどうかと思うよ』
「と言うことだ。キュゥべえが言ってるんだから間違いない。コイツは嘘だけはつかない」
　キュゥべえは信頼は出来ないが、信用は出来る。自分が利益を損ねることは言わないだろうが、コイツは真実しか言わない。それは昨日既に証明されている。
「契約したら本当に死ぬまで戦わなくちゃならないの……？」
　美樹が恐る恐ると言った感じでキュゥべえに訊く。鹿目も心配そうな顔でキュゥべえを見る。俺の脅しが効いたようで何よりだ。
　まぁそもそも、説明された良い部分だけを自分の知識として吸収するのはよくない。知識とは悪い部分まできちんと把握して、それを理解した上で良い部分を自分で活用出来るように吸収しなければ意味はないのだ。
『簡単に言えばそういうことになるね。でもよく考えてみなよ。全ての生物は時が経てば死ぬんだ。それが早いか遅いかの違いだけじゃないか。それに魔法少女になれば上手くすれば君たち人類の寿命よりもずっと長生きできるかもしれないよ』
「そ、そんな……」
　相変わらず、キュゥべえはなんて事ないように言う。実際、俺からしてみてもなんて事はない。それぐらいの対価なら……と思えてしまう。
　しかし、鹿目や美樹は違う。彼女たちにとって、いや人間にとって死が恐ろしい物だからだ。
　死んだら全てが終わり。きっとそう思ってしまってるんだろう。その終わりこそ俺が求めて已まないものだとは知らずに……。
「これが奇跡を望む対価なんだよ。魔法少女になって命懸けで魔女と戦うまでして叶えたい願い……それはその人にとって重いものなんだろうな」
　俺だったらこの繰り返しから解き放たれたい。そう願う。
　だけど巴さんの願いは？　暁美ほむらの願いは？

それは願った本人と聞き届けたキュゥべえにしか分からない。そもそも訊いてはいけないのだ。
魔法少女にとって願った奇跡とは、その人そのモノと言っても良いぐらい重要なモノで、もしかしたら忘れてしまいたい事のなのかもしれない。
それを他人が気軽に訊いて良いハズはない。
「どうしよう、さやかちゃん……。わたし、ほむらちゃんに訊いちゃいけないこと訊いちゃったッ!?」
「ど、どうしようって……謝るしかないんじゃない?」
二人はようやく事の重大さが理解出来たらしく、どうやって暁美ほむらに謝るかああだこうだとどうやって謝るかと話し合い始めた。
そんな彼女たちを見守る俺にキュゥべえがテレパシーで話しかけてきた。内容からして俺だけにしか聞こえないようにしているのだろう。
『いいのかい?』
『何がだ?』
『二人にマイナスイメージを植え付けるようなことをしてだよ。これじゃあ、彼女たちに君の願いを叶えてもらえなくなっちゃうんじゃないのかな?』
キュゥべえに言われてみて初めて自分が犯したバカな行為に気づく。確かになんで俺は二人に魔法少女となることに抵抗を抱かせるようなことを言ってしまったんだろう。
他の方法を模索中とはいえ、一番確実なキュゥべえに願えない俺の代わりに奇跡を願ってもらうという選択肢を自ら潰しているみたいだ。
『何でだろうな、気づいたらそうしてたんだ。もしかしたら奇跡を願う権利を持っている二人が、あまりにも危なっかしくて見ていられなかったからかもしれないな』
『僕には君の思考が理解できないな。自分の願いとは逆方向の考えを実行するなんて正気の沙汰とは思えないよ』
『自分でもそう思ってるよ』

自分が自分を分からない。
いったい何時からなんだろうな。俺が俺のことを理解出来なくなったのは？
俺の願いはただ一つ。
そう、たった一つなんだからそれに突き進んでいけばいいのに。
どうして俺は……。
その後、わたわたする鹿目と美樹の作戦会議は、昼休み終了を告げるチャイムが合図となって結局良い案も浮かばずに強制的に終了する運びになった。まぁ、俺は関係ないから別に彼女らがどうなろうと知った事ではないが。
それにしても怒らせてしまった人がいる教室に帰らなければならないから、心境としては最悪だろうな。
とぼとぼと歩く二人を置いてきぼりにしてさっさと自分の教室に戻る。これで遅刻なんてしたくはないからな。
そして始まるのは聞いたことのある内容の授業。とてつもなく退屈で仕方がなかった。
「――さて、それじゃあ魔法少女体験コース第一弾。はりきっていってみましょうか」
巴さんは「準備はいい？」とニッコリとした笑顔で俺たちに訊ねてきた。俺たちと言うのはもちろんのこと俺と鹿目と美樹である。
すでに学校終わりの放課後で、現在地は学校近くのファーストフード店である。
ちょっと待て。どうしてこうなった？
確かに昨日、俺は巴さんから勧められて魔法少女の手伝いをする事になった。しかし何故、それを昨日の今日で実行に移しているんだ。
俺は準備なんてなんもしてないぞ。
「準備になってるか分からないけど、持ってきました！　何も無いよりはマシかと思ってさっき体育館から拝借させてもらってきたわ！」
そう言って美樹は、先ほどから何が入っているんだと俺が秘かに思っていた木刀や竹刀が入っていそうな縦に伸びた長い袋から金属バットを取り出した。ファーストフード店の店内でそんな物騒なモ

ノを出すんじゃない。強盗だとでも思われたら厄介きわまりない。
それにしても女子中学生が金属バットを、じゃじゃーんと手に持っているのは違和感しかない。いや、美樹みたいにボーイッシュな女の子ならばアリなのか？
「うん、まぁ……そういう覚悟でいてくれるのは助かるわ」
俺と同様に巴さんも、金属バットを持って来たということよりも、この場でその金属バットを普通に取り出す美樹の神経に若干引いたようだ。というか、あの金属バットは学校からパク――いや、借りてきたのかよ。もしも魔女に破壊されたらどうするつもりだろうか。
「まどかは何か準備してきた？」
「え!?　え、ええっと、わたしは……」
ニシシと笑いながら金属バットを袋に戻しながら美樹が訊くと、鹿目はどこか自信無さげに目を泳がせながらカバンの中にごそごそと手を突っ込んで何かを取り出そうとしている。
まぁそれもそうか、美樹の金属バットの次に何か出せって言われたら俺でも自信がない。もしも自信を持って出せるとしたらナイフだとか包丁だとか殺傷能力のある刀剣類を持ってきたらとかだな。こんな場所では金属バットよりも出してはいけない物であるけれど。
「あっ、そうだ。まどかにはトリを務めてもらうっつーことにして、さきに向井が何持ってきたか見せてもらうことにしようか」
「さ、さやかちゃん！」
「いーからいーから。まどかにはやっぱりトリを務めてもらわないとね。期待してるよ～。てことで向井よろしく！」
いや、俺は何も持ってきてないって。てか、そもそも今日こんな事あること自体初耳だったし。
俺は「何も持ってきてませーん」と両手を小さく広げて主張する。
「向井はダメダメだなぁ～。これからあたしたちは魔女退治に行くんだよ？　武器ぐらい持ってこないと」
「んなこと言ったって、結局戦うのは巴さんだけだろ。俺は後ろの方で傍観してるさ」
そもそも俺たちが魔女退治についていくだけで邪魔なんだから、そ

んな俺たちが危険なことしたら巴さんにとっての負担になるだろうに。まぁ、自分の身を守るためだけに武器を使うのだとすればまた意味が違ってくるが。
「たしかにそうだけど……まぁいいや。じゃあ最後にまどかいってみよー」
俺の言葉なんて端から考える気ないか。どうでもいいけど。
鹿目は「う、うん」と緊張した面持ちで先ほどからカバンに突っ込んでいた手を引き出す。取り出したのは一冊の大学ノート。
そしてそのノートをばばーんと勢いよく開いて俺たちに見せてきた。
「こんなの考えてみたんだけど……」
「うわ……」
「これは……」
……なんて言ったらいいのかな。鹿目が開いて見せてきたページには鹿目自身の絵が描いてあったと言えばいいのかな。それもどう見ても魔法少女の格好をした鹿目が。
武器は弓ですかー。そうですかー。
「と、とりあえず衣装だけでも考えておこうかと思って」
鹿目は静まり返った俺たちの様子を窺うように言った。まぁ、美樹が直前に俺に対して武器ぐらい持って来いと言っていたし、少し気まずいか。
そんな焦った風な鹿目を見て巴さんと美樹は噴き出す。
「え……？　えぇ？　えー？」
いきなり二人が笑い出して戸惑う鹿目。
ようやく一通り笑い終わった巴さんが、
「うん、意気込みとしては十分ね」
「こりゃまいった。アンタには負けるわ。あはは。さー！　準備も整ったし、行くかー！　ぷくく」
「そうね！　行きましょう！　くすくす」
「ひ、ひどいよぉーマミさんまで！」
憐れ鹿目。だが今の状況は自分で作り出したんだから我慢するし

かないぞ。
「む、向井君っ!?」
だから俺に助けを求める子リスのような視線を向けてくるな。
まったく、今日は散々な日だよ。

第五話

ひとしきり俺以外（巴さんと美樹）が鹿目の持ってきたノートで笑い終わった後、巴さんの先導で俺たちは昨日の使い魔たちと戦闘をしたショッピングモールの改装中のフロアに足を運んでいた。

巴さんが自らのソウルジェムを俺たちに見やすいように手に持つ。

「――見てこのソウルジェム。光ってるの分かる？」

巴さんの言う通り、ソウルジェムは淡く光っている。その光源は昨日見た時と同じ黄色だ。

「はい」

巴さんの問いかけに対し、鹿目が代表して返事をする。そしてそれを確認してから巴さんは鹿目と美樹にソウルジェムを見せた理由を話し始める。

「この光が昨日の魔女が残していった魔力の痕跡。つまり魔女の魔力に反応しているの。基本的に魔女探しはこの反応を頼りにするのよ。こうしてソウルジェムが捉える魔女の気配を辿って行くわけ」

すでに俺は昨日同じような説明を聞いたから特になにを思うわけでもなく知っている情報の確認がてらに聞いていたが、美樹が素直に自分の思った事を口にする。

「わー……意外と地味ですね……」

コイツは現実に何を求めているんだろうな。現実は現実で、ファンタジーの世界とは違うんだぞ。何もかもが派手で煌びやかなモノではないんだよ。いくら魔法少女とか魔女とかアニメの世界の単語が出てきたってここは現実なのだ。

俺の置かれている状況だって、他人からすれば認識することのできない地味なモノでしかないしな。

巴さんは苦笑いを浮かべながら「いきましょうか」と魔女を求めて俺たちを先導し始めた。

＊＊＊＊＊

街には傾いてきた太陽のオレンジ色の陽射しが降り注いでいる。俺たちが魔女を探し始めておよそ二時間。見滝原町を当ても無く歩き続ける俺達をあざ笑うかのように一向に巴さんの手に持つソウルジェムに反応はない。

「光、全然変わらないッスね」

何も変わらないこの状況に、さっきまで上がっていたテンションを無理矢理落とされてしまった美樹が愚痴を零す。簡単に魔女が見つかればそれに越したことはないが、こうも早く見つかるわけがないだろうに。

「取り逃がしてから一晩経っちゃってるからね。足跡も薄くなっているわ」

巴さんは、「しょうがなわよ」とブーブー言っている美樹を宥めている。そんな二人を見守るように俺と鹿目は少し後方で並んで歩いていた。因みにキュゥべえは前方のグループにいる。

それにしても鹿目と並んで歩くのは少し気まずい。というか、思春期の少年には異性と並んで歩くの自体気まずいわけで。

掛ける言葉がないと言うか、それで無言になってしまう。もしも美樹みたいにあちらから喋りかけてくれるタイプならば無言になってしまうことが無くて非常に助かる。だが、鹿目はそんなタイプではないので現在進行形で困っている。

「あ、あの……向井君」

と、そんな風に気まずい空気に内心嘆いているとなんと鹿目の方から喋りかけてきた。

「なんだ？」

「……ありがとう。わたし向井君のおかげでほむらちゃんに謝ることできたんだ」

「ああ、そうか。そりゃよかったよ」

昼のことを思い出す。鹿目は暁美ほむらに聞いてはいけない質問をした。それは魔法少女にとっては聞かれたくないだろう事だった。

だから俺は彼女に怒った……いや、忠告したんだ。

それで鹿目が自分のやったことに対して謝ることが出来たのなら

僥倖だ。
「でも、ほむらちゃんからあんまりいい返事もらえなかったんだ。わたし嫌われちゃったのかな？」
「どうだろな、そこのところは俺にも分からん。だがな、もしも鹿目が何もかも嫌になったら俺に言ってくれ。そうしたらお前の進むべき道を教えてやるよ」
　そう、もしも鹿目が何かに迷ったら俺が進むべき道を教えてあげよう。俺を救済すると言う道を……。
「へっ？　どういうこと？」
「いや、なんでもない。もしもの話だよ」
　俺の言葉に鹿目は疑問を持ったようだがここはまだ教えるわけにはいかない。
「巴さん、反応ありましたか？」
　だから俺は巴さんに話しかけることで強制的に話題を変更させる。
「まだ反応はないわね」
「そうですか。でしたら昨日言っていたように自殺現場を回った方が効率良いんじゃないですか？」
「そうね。その方が良いのかもしれないわね」
　俺の助言にすぐさま肯定する巴さん。
　すると美樹が、
「ねぇ、マミさん。自殺現場ってどういうことですか？」
「魔女の呪いは人を自殺へと追いやってしまうこともあるの。あんまり気分の良いものではないけど、自殺現場を回ってみるのも魔女探しには必要なことだわ」
「そんな……」
「他にも魔女の呪いの影響で交通事故や傷害事件が起きるような大きな道路やケンカの起きそうな歓楽街じゃ優先的にチェックしないといけないわ。それと　病院ね」
「病院ですか……」
「ええ。病院に魔女が取り着くと、ただでさえ弱っている人達から生命エネルギーを吸い上げられてかなりマズイことになるかもしれな

いから注意が必要ね」
「病院……」
やたら病院と言う単語を気にする美樹。病院に知り合いでも入院しているのだろうか？
俺も知り合いが入院しているがそれほど気にもならない。その知り合いを心配するぐらいなら今の自分を心配したい。
そんなやり取りをしているとタイミングの良い事にソウルジェムが黄色く光り出した。
巴さんはすぐさまそれに反応する。
「かなり強い魔力の波動だわ。近いかも」
「「え!?」」
同学年の女の子二人組は突然の展開についていけてなさそうだ。仕方ないので俺が導いてやることにする。
「どっちですか？」
「こっちよ！」
ソウルジェムが反応する方向へ巴さんは駆けだす。
「ほら、お前たちもついてこい」
俺は鹿目たちに声をかけて、彼女たちが駆けだすのを確認すると俺も巴さんの後に続いた。
巴さんに導かれるまま俺たち中学二年生トリオはその背中を追って行く。
迷惑そうな視線を向けてくる通行人たちに心の中で謝りつつ大通りを駆け、途中の小道に入りやがて俺たちの目の前には人の気配のまったくない廃ビルが現れた。
「ここですか？」
代表して俺が巴さんに確認を取る。
巴さんは自らのソウルジェムを確認してから、
「ええ、ここで間違いはないわ。きっとこの廃ビルの中に魔女がいるはずだから、みんなは気を引き締めてちょうだいね」
「わかってますよ」
……最低限俺だけは、ですけど。

イマイチ、俺は鹿目と美樹が考えていることがわからない。きっとそれは性別の違いからくるものだろうから、未来永劫俺には理解出来ないんだろうな。
「……あっ!?」
俺たち全員で魔女が潜んでいる廃ビルの全体像を確認していると、美樹が何かを発見したような声をあげる。
「マミさん、屋上に誰か……!」
美樹に言われてみて、視線をビルの屋上へと向ける。
お世辞にも人が居そうにもない廃ビルの屋上に、ＯＬだろうか、地上から見る限りスーツを着た女性が屋上にあるはずの柵を乗り越えて今にも飛び降りてきそうな状態で居た。
案の定と言っても良いのだろうか、あまり予想が当たってもらいたくはなかったが女性がフラフラとした足取りで屋上の淵まで歩いて行き、全身から力を抜くように前のめりに倒れ、そのまま地上へと重力に身を任せながら真っ逆さまに下降し始める。
「ッ!!」
声にならない叫び声をあげる鹿目。
もうダメかと思った瞬間、巴さんが魔法少女へと変身し、黄色く光る魔力のリボンで女性を受け止めた。流石としか言いようがない人命救助である。
「マミさんっ！」
「大丈夫、気を失っているだけみたいだから」
巴さんが鹿目と美樹を安心させるように優しい声色で現状を伝えた。それを聞いて二人は、ホッと胸を撫で下ろす。
そんな二人を暖かそうな目で見た後、巴さんは俺にも視線を向けてきてニッコリを微笑んだ。きっと俺も知らず知らずのうちに心配そうな影が顔に出ていたんだ、とその時初めて気づいた。
巴さんが意識の無い女性の髪をかき上げて、首もとを確認する。
「魔女の口づけ……やっぱりね」
俺は巴さんの言葉を受け、そちらに視線を向ける。なにやら丸い痣のようなモノが確認出来た。

「口づけ？」
「詳しい話は後！　魔女はビルの中よ、追い詰めましょう！」
「はいっ！」
俺としては『魔女の口づけ』について詳しく聞きたいところだったが、女子二人がビルの中に突入する気満々だったので、空気を壊さないようにするために諦めることにする。
ま、魔女を倒してからでも遅くはないさ。
廃ビルに突入する。建物の中は廃ビルらしく至る所に瓦礫が点在し、壁に穴があいていたりととてもではないが何故取り壊されてないのか不思議に思ってしまうレベルだ。
廃ビルの中をズンズン進む。もちろんのこと先頭は巴さん。そんでもって次に鹿目と美樹。そして最後尾に俺と言う布陣である。
巴さんが一番前なのは言わずもがな唯一戦闘能力を有しているからだ。俺が最後尾なのは男だからという理由である。
巴さんが美樹の持つ学校から拝借してきたという金属バットに触れる。すると、金属バッドが黄色く輝き出すと棍棒へとクラスチェンジを果たした。
「うわぁ！」
いきなりの出来事だったから美樹が驚く。それを見た巴さんが「ごめんなさいね」と謝りつつも口を開く。
「これでよし。気休め程度だけど身を守れるはずよ」
「おおっ」
俺が見た感じだと、巴さんは金属バットに魔力を込めたといったところなんじゃないかな。そうすることによりただの金属バットで殴るより物理攻撃の力が上がるとかなんとかそんなところだろう。
何も武器を持ってこなかった自分に軽く苛立ちながらも平常心を心掛ける。
「使い魔の群れを突破出来れば魔女のところに在りつけるわ。それじゃあ行くわよ！」
その掛け声とともに俺たちは魔女の結界の中に侵入する。
結界の中は昨日の髭の生えた丸いヤツが進化したような、蝶の羽を

生やした目が四つあるヘドロみたいな使い魔がうじゃうじゃいた。ちなみにではあるがコイツも髭を生やしている。
巴さんはそいつらをマスケット銃で次々と撃ち倒していく。時たま俺たちの方にまできた使い魔は、美樹が元金属バットである棍棒で殴って撃退していた。
もっとも男の俺が何もしないのは気が引けたため、途中からそこら辺に転がっていたゾンビゲームに登場しそうな手頃なパイプを手にして美樹と同じ作業を始めたわけだが。つまり何もせずにただただついて来ているのは鹿目だけと言うわけだ。特に他意はない。
「恐くないかしら？」
巴さんが使い魔に発砲しながら訊いてきた。
俺以外の二人は「大丈夫です」とか「全然ッ！」とかまったく恐がっていないようだ。やはり巴さんの存在が大きいのだろうな。
俺はと言うと、
「俺が死への恐怖を感じると思いますか？」
俺が唯一恐怖するのは永遠に時間が繰り返しい続けること。ある意味、死と言う概念は俺にとっては救済される一つの方法だ。
もしも死ぬだけで時間の繰り返しから解き放たれるのなら俺は進んでこの命を差し出そう。
「愚問だったわね。ごめんなさい」
「いえ、気にしないでください」
笑って返す。それぐらい今の俺にとってはそれすらもどうでも良い事だ。些細な憤りを感じるぐらいなら時間の繰り返しから抜け出す手段を考える方が良い。
「ここね」
結界の中を進み続け、一枚のドアの前で巴さんが足を止める。
どうやらこの先に魔女がいるらしい。魔女ってどんな姿をしているんだろうな。使い魔がアレな感じだから魔女も似たような姿をしているんだろうか？
巴さんが勢いよくバタンと扉を開ける。
魔女が居ると思わしき部屋の中には数え切れないぐらいの無数の

蝶が、視界一杯に宙を漂っていた。
俺たちへの確認を込めて巴さんが言葉を発する。
「……出たわ。あれが『魔女』よ」
蝶が飛び交うこの部屋の中央で、異様なほどに存在感を醸し出す存在があった。
シルエットで見た感じだとその体躯はキリンのような四足動物で、背中には蝶の羽。そして頭から泥を被ったような奇怪な頭部。さらにそんな頭部にバラの花がいくつも咲いており、その異質さを際立てていた。
「うわ、グロい……」
「あんなのと戦うんですか……？」
女子二人はその見た目から魔女に対しての拒否反応を起こしているようだ。それは仕方のない反応かもしれない。男の俺の目でさえ、あの魔女は気持ち悪く映っている。女の目線で見たあの化け物はどんなふうに映っているかなんて察するに余りある。
今日この時、魔女を見るまで俺は、魔女はいくら超常的な存在とは言え、その姿は人型を保っているんだとばかり勝手に思っていた。
だが現実はどうだろう。今俺の目の前にいる魔女は、昨日見た使い魔や、ついさっき先に進むためになぎ倒していった使い魔たちを進化させたような、とても人型には見えない姿だ。
気持ち悪い。それが素直な感想だった。
「大丈夫、負けるもんですか」
俺たちの心配に応えるように平気な顔をして、その手にマスケット銃を召喚する巴さん。
別に俺は心配なんてしていなかったが、巴さんに声をかける。
「危なくなったら逃げてくださいね」
「ふふ、わかっているわ。向井君は二人のことお願いね」
「ええ、それこそわかっていますよ」
俺が鹿目と美樹を守るのは当然だ。
今現状、俺の願いを叶えてくれそうな存在はこの二人だけだ。彼女たちがもしも死んでしまったら次の機会を待つしかなくなってしま

う。
「さがってて」
巴さんが魔女の待つ戦いの舞台へとふわりと踊り出る。その時に先制に一発と発砲するも巨大な椅子のようなモノで防がれる。
ここで巴さんは一礼。まるで社交ダンスで相手のことを誘っているようだ。
しかしそんなものはお構いなしにと魔女は巨大な椅子を巴さん目掛け投擲。巴さんはその巨大な椅子を新たに召喚したマスケット銃で撃ち落とす。
戦争だ……。
戦闘が今始まったばかりなのにそう思ってしまうほどに、それは常軌を逸していた。例え日本の自衛隊や米国の軍隊がここに現れたとしてもあれに介入する事は叶わないだろう。
巴さんは次々と地面にマスケット銃が突き刺さるように召喚し、それを引き抜いて魔女目掛けて発砲しては投げ捨てる。それを繰り返し繰り返し実行していた。圧倒的な物量である。
しかし、魔女はその体躯から想像できないほどに身軽ですばやく、なかなか巴さんが放った銃弾が当たることはない。
「あっ……」
隣で巴さんと魔女の戦闘を観戦……いや、彼女の中では見守っているといった方が正しいか。鹿目が悲痛な叫び声をあげる。
その原因は巴さんが魔女の使い魔に拘束されたからだ。使い魔は魔女との戦闘に集中していた巴さんの背後から忍び寄りその身体を蔓へと変容させ、巴さんの身体に絡み付き下半身の動きを束縛する。
巴さんは堪らず顔を歪めるがそんなこと知った事ではないというように、蔓はそのまま巴さんの身体を空中へと持ち上げた。しかしそんな状況でも巴さんは魔女へと発砲を止めない。しかしその弾丸は魔女に当たることはなく、巴さんは壁へと打ちつけられてしまう。
「あぁ、ああ……」
「マミさああああああんっ!!」
鹿目が叫ぶ。美樹も信じられないといった風な目をしている。

俺からしてみればどこにそんな心配する必要があるのだろうかと疑問に思ってしまう。戦闘が始まる前に俺が巴さんに危なくなったら逃げてくださいって言ったじゃないか。それに巴さんは了解の言葉を述べた。だからあの状況はまだ危ない状況じゃないハズなんだよ。

巴さんは蔓によって真っ逆さまの格好で吊るされているがこちらに顔を向けるといつもの優雅な巴さんの表情をする。それでこそ巴さんだ。

「大丈夫……、未来の後輩にあんまり格好悪いところ見せられないものね！」

巴さんが放って魔女に当たることはなかった銃弾から、飛び降り自殺しようとした女性を助けた時と同じ魔力で出来た黄色く光るリボンが続々と飛び出してきてお返しとばかりに魔女を拘束する。

その隙に巴さんは自らの胸元のリボンを外すとそのリボンで蔓を切断して自由の身になる。

「惜しかったわね」

どういう原理かは理解出来ないが、巴さんは重力に身を任せながら蔓を切断したリボンをその身の三倍もあろう巨大な大砲へと変化だか召喚をして魔女へと狙いを定める。

「ティロ――フィナーレッ!!!」

耳を劈く爆音。その大砲から放たれた砲撃は動きを拘束された魔女に直撃し、その身を粉々に吹き飛ばした。

今まで俺が見てきた巴さんの物量重視の戦闘スタイルとは一線をかいた、高威力の一撃だった。

巴さんは消えゆく魔女に視線を向けつつ、優雅に床へと着地する。それに少し遅れてカランと何かが落ちる音が鳴り響いた。

「勝ったの？」

「すごい……」

魔女が消滅すると結界が崩れ、景色が元の廃ビルへと揺らめくように戻っていった。

「これがグリーフシード。魔女の卵よ」

巴さんはさきほど音を立てて落ちたモノを拾って俺たちに見せてきた。
「た、卵ぉ!?」
美樹が驚く。俺も魔女が卵から生まれる存在だと知って驚いた。もっとも美樹のように表面に出すことは無かったが。
「運が良ければ、時々魔女が何個か持ち歩いていることがあるの」
『大丈夫。その状態では安全だよ。むしろ役に立つ貴重なモノだ』
今まで居たかどうかすらあやふやだったキュゥべえが心配そうな顔をしていいた鹿目と美樹の為に補足の説明をする。
「魔法少女は戦ったりすると魔力を消耗するの。私のソウルジェム、昨夜よりちょっと濁っているでしょ」
言われてみれば昨日見た時よりも輝きが薄れているように感じる。昨日今日の戦闘で濁ったということだろうか。
「そういえば……」
「でも、グリーフシードを使えば……ほら」
巴さんはグリーフシードを自らのソウルジェムに近付ける。するとソウルジェムから黒い靄のようなモノが出てきてグリーフシードに吸収される。
「あ、綺麗になった」
「ね。コレで消耗した魔力も元通り。前に話した魔女退治の見返りっているのがコレなのよ」
そこまで言い終えると巴さんはそのグリーフシードを宙に放り投げる。その先には誰かが居たようでうまい具合にキャッチした。
「「はっ!?」」
「あと一度くらいは使えるはずよ。貴女にあげるわ。暁美ほむらさん?」
その長い黒髪を揺らしてカツカツと床を鳴らしながら現れたのは暁美ほむらだった。
「あいつ……」
「それとも人と分け合うのは不服かしら?」
「あなたの獲物よ。あなただけモノにすれば良い」

何かが気に入らなかったのか、暁美ほむらはグリーフシードを巴さんに投げ返した。
「そう、それが貴女の答えね」
俺にはさっぱり分からなかったが巴さんには何かが伝わったようだ。
そのまま暁美ほむらはくるりと俺たちに背中を向け去って行った。
「くぅ～、やっぱり感じ悪いヤツ！」
「仲良くできればいいのに……」
「お互いにそう思えれば……ね」
意味深な巴さんの言葉。いったい何が何なのだろうか。
魔法少女の中には俺たち一般人にはわからない専門用語でもあるというのだろうか。
「向井君、お疲れ様」
「へっ？」
最近、考え事をしている時に声をかけられることが多くなった気がする。おかげでいつも変な返事をしてしまっている。
「えっと、どういうことです？」
「ほら、二人のことお願いしたじゃない」
ああ、そういうことか。
「マミさん。向井のヤツ何もしてなかったですよ」
美樹が俺の怠惰を巴さんに報告する。
「ふふっ、あなたたちは気付かなかっただけで向井君はずっと周囲に気を張っていいたのよ。そういう言い方をしてはダメよ」
「そうなのか、向井？」
若干、怪しむような視線で俺を見てくる美樹だったが、巴さんが言ったことで少しだが信じているように思える。
確かに俺は巴さんの戦闘中、周囲の使い魔たちが襲って来ないかと気を張っていたが、それは巴さんが頼んできたという理由ではなく、俺個人的の理由からだ。
だから少し心苦しい。
「まぁ……、うん」

「ありがとう、向井君」
鹿目の感謝の言葉がチクリとこの身を刺した。
その後、俺たちは魔女の呪いのせいで投身自殺をしてしまいそうになったＯＬさんを宥めることになった。と言うのも、目を覚ました彼女は半ば発狂状態で、自分が何故投身自殺なんてしてしまったのかと、訳が分からなくなってしまっていた。
そんな彼女を巴さんは優しく抱きしめ、「大丈夫、大丈夫」と言葉をかけていった。
見る限り、巴さんは慣れたように宥めていたので、以前にもこういう経験があったのかもしれない。
きっと始めての時は一時の俺たちみたいに、どうしたらいいのか分かんなくてワタワタしてしまっていたんだろうな。
なんとかＯＬさんを元気づけて帰宅させると時刻はもう夜に差し掛かろうとしていた。あと二十分もすれば陽は完全に沈むだろう。
すでに俺は皆と別れ、とある目的地を目指して、一人夕日が照らす街中を歩いていた。
「で、なんでお前がついて来てんだよ？」
『別に良いじゃないか。僕が君について行って何か不都合な事でもあるのかな、と逆に問いかけたいよ』
「……まぁ、特にないんだけどさ。ただ、これから俺が行くところにお前がついて来たって、何ら有益なことは起こらないと思うぞ」
『それは僕が自分で判断することだよ。君が無益だと思っていても、僕からしてみたら有益な事なんて星の数ほどあるはずさ」
「そんなもんかねぇ……」
相変わらず、キュゥべえの言っていることは回りくどくて理解し難い。どこか言い包められているようで気分は良くないが、その口（実際にはテレパシーだが）から紡がれている言葉はいつだって嘘偽りの無いモノのハズだ。
キュゥべえの目的が分からない以上、特に俺から何かをする訳にもいかず、済し崩し的についてくることを許可する形になってしまった。

俺がキュウベえを伴って歩くこと三十分。目的地であった白い建物が視界で確認できるまで近づいてきた。
『誰か知人でも入院しているのかい？』
「ん、まーな。なんか今日、久しぶりに会いたくなっちゃってさ」
いったい、いつぶりに合うことになるのだろうか？
永遠とも思える繰り返しの中で、俺の体内時計は壊れきっているので、イマイチいつぶりなのか把握できない。
病院内に入り、まだ面会時間が残っているか受付で確認する。
面会時間は午後八時までとのこと。今はまだ午後六時を回ったところだから余裕がある。
一応、確認がてらに目的の知人が入院している病室を受付で訊き、自分の記憶と相違ない事を確認したのち、その病室へと向かう。
「よっ。暇だから来てやったぞ」
ノックも無しに無遠慮に扉を開いて病室に入る。この病室の入院患者さまは身体をビックと震わせたが、俺の存在を知覚すると頬を緩ませてリラックスしたような顔になった。
「なんだキリトか。いきなりやって来たからビックリしたじゃないか」
「いや、久しぶりに恭介に会いたくなってな。もしかして邪魔だったか？　それなら今すぐ帰るんだが」
「ちょうど僕も暇をしていたところさ。それよりも二日ぶりなのに〝久しぶり〟ってどういうことなのさ」
ハハッ、と恭介は笑った。
コイツは上条恭介。病院に入院しているところから察せられると思うが、所謂他人から同情を買われ憐れみの目で見られる可哀想な少年だ。
将来を有望視されたヴァイオリニストだったが、三ヶ月ほど前に交通事故に遭ってしまい、治療も虚しく身体に麻痺が残ってしまった。特にヴァイオリニストの命である指の回復の見込みはないと言われてしまって、俺とは違う絶望を味わっている。
恭介とは中学に入学した時からの知り合いで結構仲良くしていた

が、あの事故の直後の彼には近づき難く、それでも今こうして彼が笑顔を出せていることにホッとしている。
「あれ？　そうだっけか？」
　あははっ、と俺も恭介につられて笑う。今日は色々なことがあったが、友人と談笑するこの時間が一番楽しい。
　巴さんにしても、鹿目にしても、美樹にしても……もちろんキュゥべえにしても今だ俺は信じきれない。そのせいでずっと緊張を張り巡らせていたが、今はそんな事をする必要はなく、自然体の自分が出せた。
「なぁ、恭介」
「なんだい？」
　恭介と会話をする中で、ふと気になった。
　系統は違うとはいえ、言葉上では同じ〝絶望〟を知る友人に俺は問いかけたくなった。
「もしも、だ。もしも、奇跡や魔法があったらどうする？」
　いきなりの突拍子もない質問だったが、恭介は十秒ぐらい考えてから答えてくれた。
「もちろん、この指を治すさ。例えどんな対価を払っても良い。僕はヴァイオリンが好きなんだ。僕の魂と交換だって言われても了承してしまうんじゃないかな……」
　麻痺の残る手を持ち上げて、それを見ながら言う恭介。
「そうか……、やっぱりお前もそういう答えに辿り着くよな」
　恭介の言葉を聞き、心のどこかにあった罪悪感が消えていく。これまで自分を雁字搦めに拘束していたそれは最後の防波堤だったのかもしれない。
　だけど、それを俺は否定することにした。
　――叶えたい願いがあるのなら、己の全てを賭けるつもりにならなければいけない。
　そうだな。うん、そうだ。そうに決まっている。
「急にこんなこと訊いてくるなんてキリトらしくない。どうかしたのかい？」

「ちょっと悩んでることがあってな。恭介のおかげでスッキリしたよ」
「そうか、それなら良かったよ。もしかして僕の心の傷を抉ってきたんじゃないかと思ったよ」
「……悪い。そんなつもりはなかったんだけどさ」
「わかってるよ。キリトはいつだって僕のことを心配してくれたよね。ただ気を使うだけじゃなく、敢えて僕の現状を説明してきたりして、一時は僕をいじめて楽しんでいるんじゃないかと思った時もあったけど、今はそれが優しさからきたものだってちゃんと理解しているよ」
　そんな大げさなモノじゃない。ただ、数少ない友人のことを気にかけていただけさ。
「……あっ、そろそろ面会時間が終わるみたいだね」
　恭介に言われ時計を確認してみると、確かにもう少しで午後八時になるところだった。
「そうみたいだな。また来るわ」
「うん、待ってるよ」
　恭介の病室を後にする。ぴょこぴょことキュウべえが俺に続き病室から出てくる。
『なんかお前にとって有益なモノでもあったか？』
　病院内と言うことでテレパシーで話しかける。
『まぁ、それなりにね。僕の事なんかよりも君も収穫があったんじゃないか？』
　おおっ、バレてるわけね。病室ではおとなしく俺が腰かけたお見舞い用の椅子の下にいた癖に、ちゃっかり聞いていたんだな。
『ああ、もう俺は迷わない』
　悪魔と罵られようが、何としてでもこの繰り返す時間から這い出てやる。
　そう、例え無垢な少女を欺くことになったとしても……。
　俺には、俺の叶えたい願いがあるのだから。

第六話

もう迷わない、と決心してからおおよそ一週間。
願いの為なら己の全てを賭けると思っていても、結局は今までと変わらず日々を過ごしていた。と言っても、巴さん主催の『魔法少女体験コース』とやらに参加していたのでデンジャラスな日々であったが。
そんな日々であったが、危険な事は少なかった。
なぜなら、俺たち一般人（少々道を外した）に危険が及ぶ前に、すべて専門家がそれを排除してしまうのだ。巴さんがこの体験コースを開いているから当然のことだと思うが、それで勘違いしてしまうヤツもいる。
「やっぱ、マミさんはカッコ良いッスよ！」
使い魔を華麗に倒した巴さんに美樹が称賛の言葉を贈る。別にそれ自体が悪い事ではない。
あまりにも楽観視しているのだ。
「もう！　見世物じゃないのよ。危機感も持ってもらわないと困るんだから」
変身を解いた巴さんが美樹を窘める。
そう、そうなのだ。使い魔と言えども俺たち一般人にとっては危険なのだ。それなのに美樹はまるで映画館に来ているかのようにこの状況を楽しんでいるように思える。
「イエース、分かってますって！　いざとなったらコイツがあるんで大丈夫ですよ」
そう言って、美樹は右手に持つ金属バットを掲げた。
……まだ持っていたのか。そろそろ学校に返さないと盗難の被害届が国家権力の方に届けられてしまうんじゃないか？　まぁ、たかだかバット一本でそんなことにはならんとは思うが一応ね。
「グリーフシード落とさなかったですね」
「まぁ、今のは使い魔だったしそれを期待するだけ無駄じゃないのか」
鹿目がポツリと零した言葉に俺が答えてやる。どうやら使い魔が

グリーフシードを落とさないことを知らなかったらしい。
『そうだね。今のは魔女から分裂した使い魔でしかないから、グリーフシードは持ってないよ』
俺の言葉にキュゥべえが補足をした。
「ここんとこハズレばっかじゃない？」
美樹はブーブーと頬を膨らませる。もしかしたら魔女退治を遊びか何かと勘違いしているかもしれない。敵キャラを倒してドロップアイテムを期待する気持ちは理解できるが、ここは現実なんだぞ。
別に俺はどうってことないが、美樹は死ぬことが恐くないのか？
「放っておくわけにはいかないわ。使い魔だって成長すれば魔女になっちゃうもの」
確かに使い魔は魔女になる。そしてその魔女が人を襲うことが、巴さんにとっては許せないことなのだろう。だからこうして街を歩いてパトロールしているのだ。
「そういえば二人とも、何か願い事は見つかった？」
と、思い出したかのように巴さんが口を開く。
「いやぁ、まだ……。まどかは？」
「あはは、わたしもまだかな」
二人は顔を向き合わせて乾いた笑い声を出した。
「そうだ！　マミさんは……」
何かを閃いたのか、鹿目は口を開いたが、全てを言い終わる前に口を噤んだ。大方、巴さんにどんな事を願ったのか訊こうと思ったのあろう。だけど、俺に忠告されたことを思い出して咄嗟に口を閉ざしたと。
「何かしら、鹿目さん？」
巴さんが喋りかけてきたはずの鹿目が急に黙りこくった事に疑問を投げかける。
さて、鹿目はどうするのかねぇ……。
「あっ、いえ、その……」
もうどうして良いのか分からなくなって、鹿目は言葉を上手く紡ぎだすことが出来なくなっていた。

「大丈夫よ。言いづらいことなら言わなくていいけど、怒ったりしないから言ってくれても良いのよ」
巴さんは勘違いしているのか、いつもの柔和な雰囲気で言った。それが巴さんの長所であり、欠点でもあると俺は思う。
鹿目は巴さんの言葉を聞いて、意を決したようにあわあわさせていた口を動かす。
「言いにくいのなら別に良いんですけど、マミさんはどんな願い事をしたんですか？」
結局、鹿目は訊くんだな。俺としても気になることではあるが、とてもではないが合ってそこらで訊ける内容では無い。
まぁ、いつもならこうして鹿目がやらかした場合は美樹がフォローに回るのだが、その美樹さえも「どうしよう、どうしよう……」と慌てていてフォローどころではなく、助け船が来ない状態だったから進むしか無かったのだろうが。
鹿目の発言で先ほどまでの空気が凍りついた。
しかし、巴さんは先ほど自らの言葉で自分の首を絞めていたので喋るしか道は残されていなく、暫しの沈黙の後、巴さんはポツポツと口を開く。
「……そうね。私は……」
「え!?　あ、いや、言いにくいなら別に……」
「ううん、いいの。自分が言ったことには責任を持たないとね」
年上としての義務と言うか、意地と言うか。俺の思っていた以上に巴さんはある意味で頑固者だった。
「……数年前になるわ。家族でドライブに行った時、大規模な交通事故に巻き込まれてね。そこでキュゥべえと出会って――」
語られたのは、不幸な一人の少女の話。
その話を聞いて、その少女――巴さんと俺は少し似てると感じた。自らが原因では無く、ただただ巻き込まれただけなのだ。
ただ、俺と巴さんとでは決定的に違うことが一つだけあった。
その不幸を自らで解消出来るか出来ないかの違いである。
目の前にキュゥべえ（希望）が存在したのにもかかわらず、一方は

少女だという理由で願いは叶えられ、一方は少年だからという理由で願う権利すら与えられなかった。
「――考える余裕がなかった？
考える余裕さえなかった、ってだけ」
良いじゃないか、例えそうだとしても願いは叶えられたじゃないか。
巴さんが息継ぎの為に話を区切ると、鹿目と美樹からゴクリと唾を飲み込む音が聴こえた。
「だからね、選択の余地があるあなた達にはきちんと決めてほしいの。私にできなかった事だからこそね。もちろん、向井君もね」
俺もだと……？　願うことすら叶わぬ俺にいったい何を選択する余地があるというのだ。
巴さんの言葉に俺は戸惑いを憶える。
「……あ、あのさ、マミさん！」
これまで事の成り行きに身を任せていた美樹が口を開いた。
「願い事って自分の為の事柄じゃないと駄目なのかな？」
「え？」
「例えば、例えばの話なんだけどさ。あたしなんかよりずっと困っている人がいて、その人の為に願い事をする……とか……できるのかなって……」
それは可能だ。むしろ可能でなければ、俺がお前たちとこうしてつるむ意味すらなくなってしまう。
しかし、自らの願いを叶えてもらった相手は、普通なら真実を知ったら後悔するだろう。自分のせいで、一人の少女の人生を台無しにしてしまったって……。
『うん、可能だよ。前例もないわけじゃないし』
キュゥべえが美樹の質問に答えた後、意味深に俺へと視線を向けてきた。
ああ、わかってる。俺はもう迷わない。
「でも、あんまり感心できた話じゃないわね」
「どういうことです？」

「美樹さん。あなたはその人の夢を叶えたいの？　それとも夢を叶えた恩人になりたいの？」
厳しくも、美樹のことを心配する優しい言葉。巴さんは他者を気づかい過ぎて呆れてしまいそうになる。
巴さんの言葉に美樹は顔をしかめる。
「他人の願いを叶えるのなら、なおのこと自分の望みをはっきりさせておくべきだわ。同じようなことでも全然違うことよ、これ」
もしも俺の願いを叶えてくれたのならどっちでも構わない。そう、俺を助けてくれるのなら。
「……きつい言い方でごめんね。だけど、そこを履き違えたまま進んだらきっとあなたは後悔することになると思うから」
亀の甲より年の功……って言うのは、たった一つしか違わない巴さんに失礼か。それでも巴さんと俺たちの人生の密度は全然違うんだろうな。
「……うん、そうだね。あたしの考えが甘かった。ごめん！」
暫しの沈黙の中で何か解答を導き出したのか、美樹はきっぱりと謝罪を述べた。コイツの性格から言えば有り得ないことのように思えてならない。
「難しい事よね。焦って決めるべきじゃないわ」
『僕としては早い方がいいんだけど』
「だめ！　女の子を急かす男は嫌われるぞ？　向井君はキュゥべえみたいに女の子を急かしちゃだめよ」
「わかってますよ」
「あはは……」
まあ、良いさ。とにかく俺は目の前の事からやっていくしかないんだ。

＊＊＊＊＊

かったるい授業を終え、学校から帰宅することにする。
今日は『魔法少女体験ツアー』なる男の俺が何で参加しているか分

からないモノは休みだそうで、少し調べたい事があるのでショッピングモール内にある書店へと足を向けていた。
何故、図書館に行かないのかと訊かれれば、あの無数に人がいるのに静かな空間に俺が堪えられないからである。まぁ、調べ物って言ってもそこまで真剣に調べなければならないわけでもないし、まぁいいかって感じだ。
「魔法……魔法……魔法……」
本が痛まないように空調設備の行き届いた大型の書店で、人差指で新書コーナーの本棚にキレイに並べられた書籍をなぞりつつ、知りたい情報が書かれているだろう本を探す。
「おっ、『現代科学による魔法考察』か……」
そう、俺が調べたかったこととは『魔法』についてである。
こんな方法で間違っているだろう方法を調べるよりも、巴さんやキュゥべえに訊いた方が手っ取り早いわけだが、例え間違っていると知ることに意味があると思っている。
可能性が低くても、選択肢が多い方が良い。
そのままレジに直行してから書店を出る。
「……今日も何も変わらないか」
どんな些細なことでも良い、どんな小さなことでも良いんだ。
日常の裏側にある非日常さえ俺の目の前に現れてくれたら、俺はそれに飛びこむだろう。存在するかもしれない可能性を求めて。
目的のモノは買ったので、それを読むために帰宅することにする。
別に公園とかで読み耽っても良いが、最近は暗くなるのが早いので家に帰ってから読み始めることにした……が、どうもそういうわけにはいかないらしい。
「向井君、おねがい来てっ！」
「うわぁ、ちょ、待て!?」
何故だかよく分からないが、全力疾走の鹿目が俺の腕を取り、そのまま連れだって行こうとしたのだ。急いでいるみたいなので、仕方ないと諦めて俺は鹿目に腕を掴まれながら並走することにした。
「詳しい話は後でするから今は急ぐわよ！」

というか、巴さんまでいる。これは何か起こったということで間違いないだろう。望んでいた非日常の始まりだが、もう少し穏便な方法で誘（いざな）って欲しかったものである。
あっ、せっかく買った本落とした……。

鹿目に先導されて走ることおおよそ十分。
俺と巴さんはそれほどでもなかったが、鹿目は途中から走るスピードが落ちてきて最後の方は俺が逆に引っ張る形となった。
息を切らせながらも鹿目は、
「はぁ、はぁ……マミさん……ここです！」
「ええ！」
巴さんはソウルジェムを掲げる。すると空間がぐにゃりと歪んだ。
なるほど、鹿目が焦っていたのはそういうことか。この先に魔女がいると……。
「キュウべえ、状況は？」
『大丈夫、すぐに孵化する様子はないよ』
巴さんが空間の歪んだ場所に話しかけると、いつもの無感情のキュゥべえの声と言うかテレパシーが聴こえてきた。どうやらこの魔女の結界の中にいるらしい。
キュゥべえと話始めた巴さんを横目で窺いつつ鹿目にどう言う状況なのか訊く。
「えと、さやかちゃんといっしょにグリーフシードを見つけて……、そうしたらさやかちゃんがここに残るって言って、マミさんを連れて来なくちゃいけなくて……でもそれはもう終わったんだけど、その途中で向井君を見つけて無理矢理連れてきちゃったんだけど、ごめんね」
うん、とりあえず鹿目の言っていることは分かった。とにかく魔女の結界の中に美樹がいると言うわけだな。
「落ち着け」
色々と頭の中が纏まりきっていない鹿目の両肩に手を置く。
「鹿目は良くやったよ。ここまで巴さんを連れてきたんだろ？　それで良いじゃないか」

「えっ……う、うん。いきなり連れてきちゃってごめんなさい」
「気にしてないから安心しろ。むしろありがとうと言いたいところだ」
「え……？　でもわたし……」
「良いから気にするなって」
聞きわけの無い鹿目の頭を乱暴に撫でる。突然の事態に鹿目はあわあわし始めた。
「鹿目は目の前の自分に出来ることをしたんだよ。それは他人が責めるべきことじゃないし、それに俺を連れてきたくれたことに関しては、俺自身としてもありがたいと思ってるんだ」
そこまで言い終えると巴さんの方から「二人ともそろそろ行くわよ」とお声が掛かった。むろん、連れていかせてもう俺たちはそれに従うしかないので、俺は鹿目の背中をポンッと軽く叩き、言外に行くぞと言ってやる。
鹿目もバカではないので、巴さんの後に続いて魔女の結界の中に入っていった。それに俺も続く。
相変わらず、魔女の結界は異質な空間だった。今回は病院の中みたいな空間だ。
ああ、そう言えばここは病院だったか。魔女の結界に入る前に見た景色を思い出す。
しかも恭介が入院している病院とか状況が最悪過ぎる。
もしも恭介に何かがあったら……。
――良いじゃないか、どうせまた繰り返すんだし。
ふと頭に浮かんだ言葉が俺に重く圧し掛かる。
俺は何を考えているんだ。これでは、諦めてしまったようじゃないか。
頭を振ってその考えを無理矢理振りほどく。
「――待ちなさい」
巴さんを先頭に結界内を進む俺たちの背後からそんな声が聞こえてきた。
「何かしら？」

あくまで冷静に巴さんが返す。振り返った先には一人の少女がいた。
暁美ほむら。現状の俺には魔法少女であると言う事実しか知らない一人の少女だ。
彼女は巴さんの射抜くような視線なんて気にもしない風に淡々と口を開く。
「今日の獲物は私が狩る。もちろん結界内の二人の安全は保証するわ」
「だから手を引けって言うの？」
何故だかよく分からないが、巴さんは暁美ほむらに対しての当たりが強いように感じる。いつもの優しくて柔和な巴さんから想像できないぐらいに、暁美ほむらに対して敵意をむき出しにしていた。
「信用すると思って？」
言いながら、巴さんは腰を屈め右手を地面に向ける。
すると、暁美ほむらの足元から巴さんの拘束魔法である黄色く光る魔力のリボンが現れ、暁美ほむらを拘束する。
リボンによって不意打ちで拘束された暁美ほむらは苦悶の表情を浮かべ、
「な……ッ!?　ば、バカッ。こんな事やっている場合じゃ……」
「怪我させるつもりはないけど、あんまり暴れたら保証しかねるわ」
殺す覚悟も辞さないとでも言うように冷徹に巴さんは言い放つ。
「行きましょう、鹿目さん、向井君」
「……はい」
暁美ほむらに背を向け結界の奥に歩き始めてしまった巴さんの後に鹿目が続く。俺もそれに倣い歩きだす。
「待ちなさい！　今度の魔女は……これまでとは訳が違う!!」
背後からは悲鳴に近い俺たちを制止する暁美ほむらの声。
そうだ、今なら……。
「巴さん。すいませんが、俺は少し戻ってきますね」
決めたのなら即実行。それに今じゃないとこれから先、いつ暁美ほむらと話を出来るかわからない。拘束されている彼女となら無理矢

理にでも話すことが出来るだろう。
「わかったわ。でも、気をつけなさいね。いくら拘束していると言っても、相手は魔法少女なんだから」
「はい。だからこそ、戻るんですよ」
「ふふ、そうね。向井君には向井君の願いがあったのよね」
巴さんは、言葉に出さなくても俺のやりたい事が分かってくれている。別に分かってくれなくても良いのだけれども、鹿目みたいに困惑の表情浮かべるのは止めてもらいたいな。
「巴さんの近くにいれば安全だから心配するなよ鹿目」
「でも向井君は……」
「俺の事も心配するな。俺は俺の意思で俺自身の為に行かなくちゃならないんだ。例え無駄な事でも無意味じゃないんだ。無駄を積み重ねればしっかりとした土台は作れるんだよ」
「それでは」と巴さんに告げてから俺は彼女たちの進むべき方向から逆走し始める。
さて、暁美ほむらは何を知っているのだろうか？
あわよくば、俺の知りたい情報であって欲しいモノだ。
「よう」
俺は目の前で拘束魔法によって捉えられている暁美ほむらの姿をしっかりと確認してから、彼女に声を掛けた。
暁美ほむらの方も、俺の存在には気づいていたようで、淡々と口を開く。
「何か用かしら？　用がないのだったら、私の身体を拘束している巴マミのこのリボンをどうにかして欲しいところだわ」
「うん、無理だ。たかだか巻き込まれただけの一般人の俺に魔法のことをどうにか出来るわけないだろうに。お前もわかってて言うなよ」
「ええ、そうね。それであなたの私に何の用があってここまで戻ってきたのかしら？　まさか拘束されている私を見て善がりに来たとでも言うの？」
自分では身動きとれないハズなのに、暁美ほむらの双眸は毎度のこと見てきた冷静な視線でこちらを射抜いてきている。

まったく、俺が何かするとか考えないのかねぇ……。仮にも俺は男で、暁美ほむらは女だ。身動きとれない女が目の前にいれば普通の男なら何かいやらしい事でもする可能性が高いだろう。俺はしないけど。

俺は大きなため息をつき、壁に寄りかかる。

「そんなことをするために俺は戻ってきたわけじゃない。俺は魔法少女である暁美ほむらと少しばかり話があるんだ」

「そう。でも私にはあなたと話すことなんて無いわ」

「ハハハ、まぁそんなこと言うなよ。これから先、長い付き合いになるかもしれないんだしさ」

「それはどういう意味かしら？」

「ああ、気にするな。こっちの話だから」

よくよく考えてみれば、今こうして焦る必要はないのではないかと思ってきた。

現状では、俺と彼女は敵対している。しかし、これから先の繰り返された時間のいずれかは敵対していない関係になっているかもしれない。そう考えれば焦る必要なんて無いのかもしれない。

諦めに似た考えかもしれないが、魔法と出会った今回だけで俺が救われるとは思ってはいない。

「……そうかもしれないわね。あなたとは長い付き合いになるかもしれないわ」

「んぁ？　それはどういう意味だ？」

「向井キリト。あなたには関係ない話よ」

ほぅ……暁美ほむらはなかなかに口が悪いようだ。これはまともに話せるようになるまで時間が掛かるかもな。

「まぁいいさ。今回はここで引く事にするよ。また今度、二人きりで話がしたいよ」

壁に預けていた背を浮かせて俺は暁美ほむらに背を向ける。

「あなたと二人きりなんてごめんだわ」

背後から悪態が飛んできた。

俺は上半身だけ振り返り、

「そうだな。確かに今みたいな状況じゃないと二人きりは俺の身が危ないな」
少し特殊な存在とは言え、あくまで俺は一般人から毛が生えた程度の存在。だけど、アチラさんは魔法少女なる非常識な存在。
今はこうして巴さんの拘束魔法のおかげで身の安全は保障され、更には話すことが出来ているけれど、それがなければ俺の話なんて聞いてもらうことすら叶わないだろう。
「じゃあ、またな」
今度こそ俺は暁美ほむらに背を向け、戻ってきた道を更に逆走する。
……暁美ほむら。
確かに俺は彼女の事を知らないのだが、どこかで会ったような気がする不思議な魔法少女。
とりあえず、彼女のことは後回しだ。
先に進んだ巴さんと鹿目に追いつく。
「どうしたんですか？」
「ううん。なんでもないの」
明らかに巴さんの様子がおかしかった。目元に涙を溜め、目は真っ赤に充血していた。それで何でも無いと言われても説得力なんてありゃしない。
「私のことは良いから、向井君はあの子とお話をして何か収穫はあったのかしら？」
「ええ、まぁ」
今はとても話せる状況ではないと言うことがわかりましたよ。いつになったら暁美ほむらとまともに会話できるかわからないけど、それはきっといつか実現するような気がしていた。だから俺は先ほど引いたのだ。
その後は二・三問答があったが、それはキュゥべえの緊急を知らせる声で中断させられる事になった。
『マミ大変だ！　グリーフシードが動き始めた！　もうすぐ孵化する……急いで！』

「ええ、わかったわ。だったらもうコソコソする必要もないわね!!」
そう言うと、巴さんはそれまで着ていた見滝原中の制服から魔法少女のコスチュームへと変身する。
「行くわよ、二人とも!」
「あ、はいっ」
「ええ」
こうして俺たちは駆けだした。
途中で出現する使い魔は巴さんのマスケット銃によって撃たれ、時には銃身で殴打され、その身を滅ぼされていった。
「お待たせっ!」
「ま、間に合った……!」
美樹の元へとなんとか辿りつく。
視界一面に巨大なケーキやらクッキーやらプリンやらが埋め尽くす、ある意味夢の空間ではないだろうか。しかし、だからこそこの空間には異質さしか存在しなかった。
巴さんが異質の中心へと目を向ける。
どうやらグリーフシードは孵化してしまったようだ。愛らしいぬいぐるみのような魔女が俺たちを可愛らしく見ていた。
しかし、巴さんは非常にもそんな魔女へと銃弾を放つ。撃っては新たなマスケット銃を召喚し、次々と銃弾は愛らしい魔女へとヒットしていく。
巴さんは止めとばかりに暁美ほむらへも使用していた黄色い魔力のリボンで魔女を拘束し、マスケット銃を魔女へと向ける。
「これで終わりよ」
圧倒的な力の差がそこにはあった。
少し前からしか巴さんのことは知らないが、それでもいつもの巴さんよりも強さを感じた。何故かはわからない。だけど、それでも強かったのだ。
パンッと乾いた銃声が鳴り響く。
真っ直ぐ空気を切り裂いて突き進んだ銃弾は拘束されて身動きのとれない魔女の胴体に吸い込まれるように命中した。

「え……？」
この場にいる誰もが巴さんの勝利を確信していた。
鹿目も美樹も、そして当事者である巴さん自身も。
だから巴さんは反応できなかった。愛らしいぬいぐるみのような魔女の口から顔のついた黒くて長い蛇のようなヤツが這い出てきた事を。
しかし、俺だけがそいつに反応することが出来た。
何故なら俺は誰も信じていないからだ。そう、自分さえも信じていない。だから巴さんの勝利を確信しつつも、それを信じられない自分がいて、そいつが俺の身体を動かした。
「ゴフッ」
大丈夫ですか巴さん、……確かにそう言おうとしたのに俺の口からは血が吐き出された。
信じられないと言った巴さんの表情。まぁそれもそうか。今、俺の右腕から右上半身に掛けてあの魔女に食われちまったんだからな。咄嗟に巴さんの事を左手で押して助けた対価ってヤツだ。何ら後悔はしていない。
何故自分がこんな事をしたのかはわからない。だけれども、今は魔女に殺されたらこの連鎖から解き放たれるんじゃないかと思って少し期待していた。
ほんの少しの間だけ呆然としていた巴さんだったが、彼女の魔法少女としての役割と言っていいのかわからないが、俺の右上半身をバリバリと咀嚼している魔女に向けてマスケット銃の撃鉄を鳴らした。
そこまで確認して俺の意識は遠のき始めた。
「向井君!?」
徐々に遠のく意識の中、俺の視界一面には必死な形相の巴さんの顔が見えた。
身体が暖かく感じた。おそらく、巴さんが治癒魔法でも使ってくれているのだろう。しかし、巴さんの表情を見る限り、俺が助かる事は無いんだろうなと思った。
まぁ別に俺は命が助かる事自体にさして興味は無いのだからどう

でも良い事なのだが。
美樹が目を白黒させて驚いている。鹿目の目からは大粒の涙が堪えず流れ出て、俺に何かを伝えようと叫んでいる。
もはや断片状にしか彼女たちの声は聞こえてこない。
「ねぇ、キ■■え！　■■■を■■ることはで■■いの!?」
鹿目がキュゥべえに縋るように詰め寄った。何を言っているのかは聞き取れない。しかし、その内容はなんとなくわかった。
おいおい、そんなことはしなくても良いんだよ鹿目。魔女に殺される事で、この永遠とも言える繰り返す時間の呪縛から解き放たれるかもしれない。今回、俺はその可能性を試す事にしたんだよ。だから頑張らなくても良い。どうか死なせてくれ。
『もちろん可能だよ。なに、簡単な事さ。君にはその願いを可能にする力があるんだ』
いやにクリアなキュゥべえの声。頭に直接語りかけているのだから当然のことかもしれないが、今の俺にはそれが苦痛でしか無かった。
待て、キュゥべえ。お前は何を……。
「■■に……？」
『もちろんだよ。だから、僕と契約して魔法少女になってよ！』
止めろ……止めてくれ鹿目。お前は俺に可能性を試させてくれる事すら許さないとでも言うのか？
それに俺の為に願ってくれると言うのなら、俺を生かすのではなく、存在を抹消してくれ。そうすれば俺は楽になれるんだ。
喉が張り裂けそうなぐらい大声を出しているつもりなのに、俺の口はパクパクと陸に揚げられた魚類のようにしか動いてはくれない。
「駄目ええええええええええええッ!!」
不意に聞こえてきた、俺の言葉を代弁するような叫び声。その叫び声には冷静な彼女には窺い知ることが出来なかった感情と言うモノが俺に伝わってきた。
きっと、それは俺と彼女が思っていることが同じだったからだろう。

――暁美ほむら
俺と彼女は鹿目まどかにキュゥべえとこんな形で契約なんてして欲しく無かった。その想いが同じだからこそ、俺には感じ取れた。
鹿目まどかはキュゥべえと契約した。
つまり、巴さんの治癒魔法でも治す事が出来なかった俺の身体の損傷が完全に治ったと言う事だ。
身体を起き上がらせると、鹿目が俺に抱きついて来た。
「向井君……。良かった……本当に助かって、良かった……！」
俺に抱きついている鹿目の格好は、先ほどまで着ていた見滝原中の制服ではなく、ピンクと白を基調としたフリフリの魔法少女のコスチューム。
涙を流して安堵する彼女は放っておいて、周りを確認する。
巴さんはペタンと腰を降ろし、天を仰いでいた。
美樹は溜め息をついて心を落ち着かせていた。
そして、少し離れた場所で確認出来た暁美ほむらは――無表情だった。
何もかもを諦めたように顔には全くの変化は無く、先ほどあれほどの叫び声をあげていた少女と同一人物だとはとてもではないが信じられない。
「どうして助けた？」
「え？」
「どうして俺を助けたんだ!?」
鹿目を俺の身体から引き剥がして俺は言い放った。やり切れない気持ちばかりが先行する。
「だって、そうしないと向井君が死んじゃって……」
「そうだよ向井。まどかのおかげで向井は助かったんだよ」
「お前は黙ってろ美樹！」
キッと美樹を睨みつけて黙らせる。
「な、なんだよ……」
たじろぐ美樹を無視して更に俺は鹿目に対して詰問する。
「どうしてだ!?　どうしてなんだよ？　俺はここで死んだところで全

然良かった。なのになんで俺を中途半端に助けたんだ!?」
俺自身の願いを彼女に話していないからこういう風になるのは当然かもしれない。理屈では理解していても、感情は納得してくれはしなかった。
鹿目の目元から流れる涙は安堵のモノから別のモノへと変容していった。鹿目は横目で巴さんの事を見るも、巴さんは天を仰いだまま動く事は無かった。
その時、
――ガチリッ
どこからか聴こえてきたこの場に似つかわしくない音に、俺は視界から鹿目を外し、その音源の方向に視線を向けた。
「暁美ほむら……？」
俺の見間違いでは無ければ、暁美ほむらを中心として空間が切り取られ始めていた。魔女の結界が崩壊していっているのかと思ったが、少し様子がおかしい。
『そうか。ほむら、君が時間を巻き戻していたんだね。これで一つの疑問に答えがでたよ』
「え……？」
今、キュゥべえは何と言った？
暁美ほむらが時間を巻き戻していただと……？
もしそれが本当ならば……。
「暁美ほむらぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!!」
もう、俺の眼中には巴さんや美樹は当然のことだろうが、先ほど理不尽な怒りをぶつけていた鹿目すら映っていなかった。
全ての元凶へと向かって駆けだす。
お前が、お前が、お前が俺の時間を止めたのかッ!?
問い詰めるつもりだった。いや、ぶん殴るつもりだったのかもしれない。
頭に血が上っていて自分が何をしたかったのはわからない。
しかし、結果から言ってそれが実現する事は無かった。
――俺の意識が暗闇へと飛んだ。

第七話

「ねぇ、キリトくん。キリトくんのおなまえってキリストさまみたいだね」
「キリストさま？」
「うん。キリストさまだよ。とってもえらくて、それなのにみんなにやさしい、かみさまみたいなひとだよ」
「そうなんだ。じゃあ、ぼくはキリストさまになるっ！」
「それじゃあ、わたしは――」
太陽が燦々と降り注ぐ中、公園のベンチに腰掛け一組の五歳くらいの少年少女が会話を楽しんでいた。傍から見るとなんとも微笑ましい。
会話内容から察せられるに、二人の仲は良いらしい。
少年――俺は黒髪の少女に対して身ぶり手ぶりで子供ながらに将来設計図を語っていた。少女もそれに笑顔で答えている。
――おかしい。
何もかもがおかしかった。
ここはどこだ？　この少女は誰だ？　そして俺は何を言っている？
確かにそこにいる少年は俺だったが、俺にこんな記憶は無いはずだ。
いくら俺の脳内で検索を掛けても今俺の目の前で起こっていることの記憶は何も見つからなかった。
「ハハッ、じゃあ■■■ちゃんはぼくのおよめさんだねっ！」
「うん。わたしはキリトくんのおよめさんになる！」
コイツらは何を言っているんだ……。
〝お嫁さん〟だと？　おそらく子供ながらに将来を誓い合っているのだろうが、おい止めろ俺。それは後に黒歴史にしかならないんだぞ。
声を出して二人の間に割り込もうとしたが、ここでようやく俺自身が目の前の二人には認識されていない事に気づく。何故なら俺は俺

自身に掴みかかろうとしたのに、手が空を切ったからだ。
これでさらに意味不明になる。
――今のこの状況は何なんだ？
ようやくと言って良いほど、気付くのが遅すぎた。
目の前に子供の時の俺がいて、それなのに繰り広げられているのは俺の記憶には無い出来事。そしてそれを傍観する俺。
――わけがわからない。
そんな言葉しか出てこなかった。
「ごめん。ぼく、とおくにひっこさなくちゃいけないんだ」
「え……」
俺の困惑を尻目に、場面が変わる。
何故かいきなり別れを告げる子供の俺。そして黒髪の女の子は今の俺と同じように困惑に包まれていた。
「ごめん。ほんとうにごめん……」
「……」
「……」
子供の俺は悲痛な面持ちで黒髪の女の子に謝る。しかし、女の子は黙りこってしまう。それに釣られるように子供の俺も言葉を無くす。
やがて女の子は意を決したように口を開く。
「……またあえるよね？」
目には涙を浮かべ、子供の俺に対し再会の誓いを問う。
「うん。もちろんだよ。だって、■■■ちゃんはぼくのおよめさんなんだよ」
子供の俺は女の子に負けじと必死に涙を堪える。
――本当にこれは何なんだ？
繰り返しになるが、本当に俺にはこんな過去の記憶なんて無い。生まれも育ちも見滝原だし、幼少のころにこんな黒髪の女の子の友達はいなかったはずだ。
「これ……、キリトくんにあげる」
既に決壊してしまった涙を流しつつ、女の子が自らの首から提げたモノを外すと、子供の俺へと差し出す。

その差し出されたモノを見て、俺はさらに混乱する。
――なんで、なんでそれがそこにあるッ！
意味がわからなかった。
訳がわからなかった。
「ありがとう。たいせつにするね」
子供の俺はそれを受け取り、自分の首へと提げる。
「にあってるよキリトくん」
「ありがとう■■■ちゃん」
二人とも堪え切れなかった涙が頬を伝っていた。しかし、別れを涙で終わらせないために必死に笑顔を作っている。
――あれ？
何故か俺の目からも涙が溢れていた。
黒髪の女の子のことなんて知らないはずなのに、こんな別れの記憶なんて無いはずなのに。
何故だか、知らぬうちに目の前の二人に引かれるように涙が頬を伝っていた。

＊＊＊＊＊

ゆっくりと瞼を開く。
そこには、いつもと変わりない俺の部屋の天井があった。
「あれは……何だったんだ？」
ここがベッドの上であると言うことを確認してから、右手で顔を覆った。
あるはずのない過去の記憶。
これが一番しっくりきた己の中の一つの回答だった。
「それにしても……」
ベッドから起き上がり、顔を覆っていた右手をすぐそばのテーブルへと伸ばす。
「なんでこれが……？」
俺が手にしたのは十字のネックレス。別にロザリオだとかそんな

高尚な物ではない、ぞんざいな造りのただのネックレスだ。
このネックレスを子供の俺はあの黒髪の女の子から受け取っていた。
「……そんなはずないじゃないか」
俺の記憶が正しければ、この十字のネックレスは子供の時に両親に買ってもらった物のはずだ。
だからあの女の子の介入する余地は無い……そう、出てくる余地は無いはずなんだ。
なのに、なんで俺は先ほど経験した過去の記憶だかなんか知らないが、よくわからん夢を否定しきれないんだ？
生まれも育ちも見滝原の俺に引っ越しなんて絶対に記憶に残るはずのイベントを憶えていないはずはないじゃないか。
「……わけ、わからん」
せっかく起き上がらせた身体をポスンとまたベッドへと預ける。
こんなにも訳がわからなくなったのは、繰り返しが始まった当初以来ではないだろうか？
いや、あの時と今では少し意味合いが違うか。
あの時はなんで繰り返すのかがわからなかったという、自分以外に向けた不信感。
しかし、現状感じているのは自らを信じられない言い知れぬ不安感。
どうして……どうして、と疑心暗鬼になるもの自己防衛のための一つの手だろう。
だが、俺は何を疑えばいいのかわからずに、ただただ頭を空っぽにしてボーッとすることしか出来なかった。
結局、母親が学校の時間だと言うことを知らせてくるまで、ずっと俺は天井を見詰めつつけていた。
あの過去の記憶だか夢だかよくわからんものを何で俺は見てしまったのかとか、繰り返しの原因が暁美ほむらなのかもしれないとか、考えるべきことはいくつもあったのに、まるで脳内の許容量を超えてしまったのではないかと思うぐらいに何も考えられずにボーっ

としていた。
母親に急かされるまま制服に着替え、朝食を食べ、そして学校へと続く道路をゆらゆらと歩く。
「そういえば、今回はキュゥべえはいなかったな」
繰り返しの原因が暁美ほむらとかもしれないということを知ることができた以上、別にキュゥべえはいなくても良いのだ。暁美ほむらに直接繰り返しのことを問い詰めればそれで良いのだから。
しかし、いなくても良いが、どちらかと言えばいた方が良い。暁美ほむらが魔法少女であるという事実を鑑みれば、キュゥべえがいた方が円滑な話し合いが出来るかもしれない。
ダラダラとした足取りで見滝原中学の校門を潜る。
周りには俺以外に誰もおらず、すでに授業時間が始まっているようだ。
俺は急ぐ気にもなれず、トボトボと自分の教室を目指して廊下を歩いた。
「おはようございます」
ガラーッと教室後方の引き戸を開き、朝の挨拶をしながら教室に入る。
クラスメイトが全員、授業中の闖入者である俺に目を向けてきたが、それも数秒後には一時限目の授業を担当している教師へと視線を戻した。
教師の方も、これと言って俺に遅刻のことについて何を言うでもなく、早く着席するように促すだけだった。
退屈な一時限目の授業が終わると、友人が俺のところへとやって来た。
「キリトが遅刻してくるなんて珍しいじゃん。なんかあったの？」
「いや、ただの寝坊だから気にすんな。お前だって時々あるだろ？」
「まあな。でさぁ、キリトちょっと聞いてくれよ――」
遅刻した理由を適当に言うと、友人はすぐさま納得してくれたが、その友人の続けた言葉に俺は胸の奥に何かが灯るのを感じた。
「――別のクラスに超可愛い転校生が来たらしいんだけどあとで見に

行かねぇか？」
「……転校生？」
「そうそう、黒髪の長い美少女らしいぜ。これはもう、アタックするしかねぇよな！」
黒髪……そう言えば暁美ほむらは転校生だったな。
暁美ほむらのことを強く意識すると更に胸の奥が熱くなった。
怒り、憎しみ、苛立ち。この気持ちを上手く表現する言葉が見つからないが、負の感情であることは間違いない。
「……そ、そうだな。でも俺は止めておくことにするわ」
なんとか冷静を装って返答する。
「なんだ、向井はノリ悪いなぁ。もしもその子と俺が付き合うなんてことになってもしらねぇぞ」
「ハハハッ、それは無理だろうから安心しとけ」
「な、なんだとぅ!?」
友人とのそんな会話も二時限目の予鈴でお開きになる。
そうだ……そうだったな。俺はこの繰り返す時間から解き放たれたいんだ。
今日、目覚めてからずっと考えることをあまりしなかったことを強く認識する。いや、本来の目的を再確認すると言った方が正しいかもしれない。
昼休みまで待って、暁美ほむらがいるであろう鹿目と美樹の教室へ向かう。
すると何とタイミングが良い事に、暁美ほむらと鹿目が教室から出てきたところだった。
「暁美ほむら。話があるんだが」
ちょうど俺がいる方向に歩いてきたので名前を呼ぶ。
しかし、暁美ほむらは俺になんて目もくれずに、つかつかと俺の真横を通りすぎる。
「あ、暁美さん。呼ばれてるよ……？」
鹿目がそんなことを言うが、暁美ほむらは振り返って「早く行きましょう」とだけ言うのだった。これに鹿目はどうしたら良いのかわか

らなくなったと言った風にあたふたし始めた。
　そんな鹿目は放っておいて暁美ほむらに話しかけることを続ける。
「暁美ほむらはなかなかに酷いヤツだな。二人きりで話をしたいっていたじゃんか。まぁ断わられたんだけどさ」
「あなたもしかして……」
　今まで眼中になかったはずの俺を見て目を見開く暁美ほむら。
　おっ、反応ありってか。これはもう間違いないのかもしれない。
「互いに長い付き合いになるかもって言い合った仲じゃないか」
　俺が言い終わって数秒の沈黙の後、暁美ほむらは鹿目へと視線を移動させる。
「……ごめんなさい鹿目さん。保健室には彼に案内してもらうことにするわ」
「あ、う、うん。それじゃあ、またあとでね暁美さん」
　鹿目はきょどりながらもしっかりと暁美ほむらに挨拶をしてから、教室に戻っていく。
　暁美ほむらは鹿目が戻るのを確認してから、視線を動かして俺を睨む。
「とりあえず屋上行こうか」
　積もる話もあるし、誰もいないところでゆっくりと静かに話すためにな。
「そうね、二人きりで話をするためにもそれが良いと思うわ」
　暁美ほむらはくるりと俺に背中を向け、階段を目指して歩きだした。俺はその背中から一メートルほど開けて追随する。
　階段を一段一段と足を踏み外さないためにゆっくりと踏みしめるように昇り、暁美ほむらは屋上へと続く扉を開ける。
　少しずつ開けられたドアの隙間からは今が真昼間と言うこともあり、陽射しが差し込んでくる。その陽光に一瞬目が眩んでしまうが、視線を下に向けることで明るさにすぐさま対応する。
　そして、屋上へと俺も進んでいく。
「驚いたわ。あなたはあの場所にいたあなたなのね」
　俺を待つようにこちらを向いていた暁美ほむらはそんなことを訊

いて来た。
「そういうお前はあの場所にいたお前で間違いないよな？」
「ええ、間違いないわ」
「そうか……」
　ようやく俺の願いにまた一つ近づくことが出来た。
　これで彼女が繰り返しの原因で、俺を解き放ってくれさえすれば全ては解決してされるだろう。
「ならなんで、俺を繰り返しに巻き込むんだ……？　理由があるなら教えてくれよっ！」
　鬱憤をすべて吐き出す様に、力強く言葉に乗せる。
　さきほど暁美ほむらと相対してからずっと言いたかった。屋上に来るまで、一歩一歩と歩を進める度に我慢していた。むしろここまで来るまでに言うことを我慢できたことに我ながら驚きを隠せない。
　暁美ほむらは俺の言葉に、言っている意味がわからないとでも言うように首を傾げる。
「それはどういうことかしら？　私からしてみれば、あなたがこの時間軸に存在していることに驚いているのだけれども」
「わからない……だと……？」
　ここで俺は我慢の限界に達し、必死に押さえつけていた自制心を解放して暁美ほむらに詰め寄り胸倉を掴む。
　暁美ほむらは抵抗せずになすがままに胸倉を掴ませてくれたのがちょっと拍子抜けだったが、今はそんな事を考えている場合では無い。
「何度も何度も……気付いたら今日で、俺の時間は今日から約一ヶ月しかなくなったんだよ！　周りの全ての時間は停滞しているのに、俺だけ進み続けていて……狂いそうになった。いや、狂っていた」
　胸倉を掴まれているはずなのに無表情の暁美ほむらの紫色の瞳には、ただただ俺の悲壮感漂う表情が映っていた。
「なぁ、お前がこの時間の繰り返しの原因なんだろ？　……だったら、俺を解き放ってくれよ」
　一つ一つの言葉を言う度に暁美ほむらの胸倉を掴む手の力がどん

どん抜けてゆき、終には彼女の前で地に手を着いてしまう。屋上のタイルが俺の視界一杯に広がっていた。
やっと見つけた。……やっと見つけたはずなのに、俺の身体は暁美ほむらに復讐をするでもなく、目の前で力無く崩れ落ちることしか出来なかった。
彼女が俺を巻き込んだ張本人。だけれども、何故か彼女に対して俺の感情を捲し立てることしか出来ない。
「……ごめんなさい」
自分自身がわからない……そう思っていると、不意に頭上から俺の勝手な言い分を黙って聞いていた暁美ほむらの声が聞こえてきた。
その声に釣られて顔を上げる。
「確かにあなたの言う通り、時間を巻き戻しているのは私よ」
「だったら、だったらなんで謝るんだよ……。早く俺の時間を進めるなり、俺を繰り返しから除くなりしてくれよ……。なぁ、本当にお前がこの繰り返しを起こしてるのなら簡単に出来ることじゃないのかよ!?」
懇願するように言葉を吐き出す。
自尊心なんて捨ててしまえ。今俺に必要なのは、俺の時間が進むか止まるかというどちらか二つの結果のみだ。どちらかを俺にくれると言うのならば、例え俺を今の状況に巻き込んだ暁美ほむらに頭を下げるくらいどうということはない。
「頼む……頼むよ。お前が俺の願いを叶えてくれないと言うのなら、俺は同年代の少女に俺の代わりにキュゥべえに願って貰うぐらいしか、方法が見つからないんだ。そんなの俺は嫌なんだ。俺のせいで女の子に苦しみを押しつけるなんて……本当は嫌なんだ」
一度は迷わないって決めたのに。この繰り返しからどんな事をしても這い出てやると自らに固く誓ったはずなのに。
結局のところ、俺は心の底から覚悟なんて出来ていなかった。
表面上だけ自分を取り繕って、自らをまるで悲劇のヒロインかのように扱っていた。そして今、自らの言葉によってそのメッキが剥がれ落ちた。

「あなたの事情はわかったわ」
「なら――」
「でも、ごめんなさい。私にはあなたが何故私の時間遡行に巻き込まれているかわからないの」
本当に申し訳なさそうな顔。いつも無表情だった暁美ほむらの初めて見せる表情だった。
暁美ほむらは俺と言う存在に対し、負い目を感じたのかもしれない。そんな視線はいらないんだよ。ただ、俺を繰り返しから解き放ってくれさえくれれば……。
「どういうことだ……？　もしかして俺の停滞した時間をお前はどうすることも出来ないとでも言うのか？　お前が俺の時間を止めた癖に……」
「……ごめんなさい」
俺にただただ謝罪の言葉を口から吐き出す暁美ほむら。
「嘘だ嘘だ嘘だ、嘘だッ！」
俺は立ち上がり、暁美ほむらの肩を乱暴に掴む。彼女は瞳を伏せ、俺と目を合わせようとはしない。
単純に力を比べれば俺の方が弱くて簡単にあしらえてしまえるのに、彼女は何もしようとはしなかった。
「本当の本当に、俺の時間を進める事も止める事も出来ないのか……？」
やっと見つけた誰も傷つかずに俺の願いが叶えられると思った方法。だけど無情にも返って来た言葉は先ほどから繰り返されてきた言葉と同じモノだった。
それを訊いて俺は暫しの間動きを止めて考えることに没頭した。
「……悪かったな」
ようやく考えがまとまった俺は暁美ほむらの肩から手を離し、揺ら揺らと校内へと続く扉へと向かう。
「待って」
「なんだ？」
俺を呼ぶ暁美ほむらの声が聞こえてきて振り向く。

「私にはあなたが何故巻き込まれたかがわからない。だからあなたの時間を進ませる事も止めることもできない」
「それは俺も理解した。だから俺はもうお前に頼らない」
「向井キリト。それであなたはこれからどうするつもりなの？」
引け目を感じたのだろうか。自らが自分は何も出来ないと言っておきながら、俺に訊ねてきた。
「決まってるじゃないか。俺の時間を停滞させた張本人である暁美ほむらが俺の願いを叶えられないと言うのなら、残る方法はただ一つだ。奇跡を願う権利を持っているヤツに俺に変わって願ってもらう。なに、素質があるという少女には心当たりが二人ほどいるんでね」
そうだ。張本人様が出来ないって言うのならば、以前に出来ると言ったキュゥべえを頼るしかない。もはやそれしか俺が解放される道は残されてない。
ここは心を鬼にしてでもそれに縋るしかないんだ。
「もしかして、その二人と言うのは――」
「ああ、美樹さやかと――鹿目まどかだ」
俺は他に魔法少女になれる素質を備えた少女を知らない。だから何としてでも、二人のうちどちらかに俺の願いを叶えてもらうしかない。
もうここには用はない。止めていた足を動かし、校内を目指す。
「じゃあな。もうお前とは関わることは無いと思う。せっかく長い付き合いになるかもしれな――」
去り際に挨拶を残そうとしていると、乾いた音とともに突如左胸辺りに痛みが走る。
視線を向けてみるとその痛みの中心からどんどん赤い液体が純白の学ランに広がっていくのが見えた。
「え？」
「ごめんなさい。私の願いが叶うまで、あなたの苦しみも私が背負うわ」
――パンッ
再度聴こえたその乾いた音とともに俺の意識は途絶えた。

＊＊＊＊＊

「んぁ……」

朝。窓から吹き込む優しい風で意識がだんだんと覚醒する。寝惚け眼ながらもベッドから身体を置き上がらせ瞼を擦り、意識の覚醒を急がせる。

そう言えば、暁美ほむらに殺されたんだと頭がボーッとする中、思い出す。しかし、不思議と俺の中に怒りは湧いてこなかった。

なんなんだろうか。不思議な感じだ。暁美ほむらが繰り返しの原因とわかったのにも関わらず、彼女では俺を永遠の呪縛から解放できないと知って、それで彼女に対して興味が無くなったのかもしれない。

覚醒した意識で、彼女に話しかける。

「こんなところまでやって来て、何か用かよ？」

俺の視線の先には暁美ほむらが居た。

ちょうど俺がベッドから上半身を起き上がらせた目の前に、青を基調とした魔法少女のコスチュームを身にまとった彼女が静かに佇んでいたのだ。窓から吹き込む風がカーテンを吹き上げ、それが朝の淡い陽射しと相まって幻想的だった。

だが、俺の関心はすでに暁美ほむらには無く、特に驚くことも何も思うことはない。強いて挙げるのならば、なんで俺の部屋なんかに居るんだろうと思ったぐらいだ。

「……ごめんなさい」

それだけ言って、暁美ほむらはいつの間にかその手に持っていた拳銃を突き付けてくる。

そのゆっくりとした行動に俺は身体から汗がじっとりと噴き出してきたのを感じた。

「おい……やめろ、何を……しようと、してるんだ」

それから数秒後、俺の部屋から人の姿がなくなった。

＊＊＊＊＊

瞼を開く、そしてすぐさま部屋から出ようとベッドから飛び降りる。

――カチャリ

ベッドから飛び降りた態勢のまま、俺は動くことを許されなくなった。後頭部に感じる固い感触。きっと拳銃だろう。

普通なら有り得ない状況だが、それ以外には考えられなかった。

「なぁ、どうしてこんなことするんだよ。お前は俺のことを助けられないって言ったじゃないか。それなら俺の好きにさせてくれよ」

背後にいるであろう暁美ほむらに対して話しかける。

おそらく少しでも動いたらその手に持つ拳銃で頭を撃ち抜かれるだろう。だから口だけを動かし、なんとかこの状況からの脱出を図る。

「言ったはずよ。あなたの苦しみも――私が背負うって」

「俺はこんな事を望んでいたわけじゃない」

「知っているわ。だから私はこうして、あなたの苦しみを最小限に抑えようとしているのよ」

――ごめんなさい。

＊＊＊＊＊

目を開き身体を起こすとやはりそこには暁美ほむらがいた。窓から吹き込む風が彼女の長い黒髪をふんわりと揺らしている。

そんな彼女に対して口を開く。

「……また俺を殺すのか？」

「ええ、その通りよ。それがあなたを巻き込んでしまった私への罰だから」

抵抗は無駄のようだ。そもそも多少変わっているとしていても、ただの人間である俺が魔法少女である暁美ほむらに対して抵抗なんて出来るはずがない。

だからと言って逃げようとしても、前回と同じ結末になるだろう。
ならば俺が取れる行動は一つしかない。
「そうか、なら殺せよ。俺の苦しみも背負ってくれるんだろ？　二人分の苦しみに苛まれながら、早くお前の願いとやらを叶えて俺を解放してくれよ」
本当に暁美ほむらが俺の苦しみまで背負ってくれるかはわからない。だけれども自分が巻き込んだ人間を殺し続ける苦しみは背負ってもらう。
これぐらいしか俺に出来る抵抗が見つからなかった。
――カチャリ
女子中学生の小さい手に握られた拳銃の照準が俺へと合わせられる。
「今の私には、これぐらいしか贖罪が思い浮かばないから……」
いつになったらこの連鎖は終わってくれるのだろうか。

＊＊＊＊＊

「今回はどうだったんだ？」
「……駄目だったわ」
「そうか……そりゃ残念だ」
眩しい朝の光が俺の部屋に差し込む中、俺と暁美ほむらは言葉を交わしていた。
なに、別段珍しいことではない。朝起きて暁美ほむらに殺される。その幾度となく繰り返されてきてワンパターン化した流れの中の一幕だ。
彼女に殺され始めた最初の方は互いに何もしゃべることはなかったが、何度となく繰り返すにつれてどちらからともなく言葉を交わすようになっていった。
俺の勝手な想像だが、おそらく孤独に耐えられなかったのだろう。俺たちの時間は進み過ぎたのだ。
繰り返せば繰り返すほど、周囲との時間は少しずつズレていく。こ

れは俺の経験談だが、なまじ少し先のことを知っているから迂闊なことをしゃべれば周囲からは疎外される。
孤独とは本当に寂しいのだ。それを知っているから同じ時間を生きている存在に惹かれる。現に俺は暁美ほむらと過ごすこの短い時間が好きになってしまっていた。
少しの違いはあれど、いずれは全てがリセットされてしまう人たちといるよりも、時間の進み続けている存在と一緒にいることが何よりも落ち着けた。こんなのは繰り返しが始まって初めてのことだった。
「これから私に殺されるとわかっているのに、なぜあなたは笑っていられるの？」
自然と表情に出ていたらしい。
「なぜって、それは暁美ほむら。お前とこうして同じ時間で存在出来てるからだ。周りはみんな停滞している。だけど俺とお前は進み続けているじゃないか」
「でもそれは私が――」
「わかってる。原因は確かにお前かもしれないけど、今となっちゃそんなことどうでもよくなっちまったよ」
抵抗は無駄。逃亡も無理。それなら、せめて苦しみを……と思っていたが、俺は現状に満足してしまった。
「どうして？　どうして……そんなこと言うのよ。あなたの苦しみも私が背負うって言ったのに、これじゃあ私が馬鹿馬鹿しいじゃないの」
「そうだな……それじゃあ、その手に持った拳銃を貸してくれないか？」
「どういうつもり？」
「ああ、勘繰るな。自分で自分を殺すだけだから。それならお前は俺の分の苦しみは背負わなくて良いだろう？」
自殺なら慣れている。包丁で自分の喉を掻っ切っていた経験がこんなところで役に立つとは思いもよらなかった。
ここに置けと、暁美ほむらに手のひらを差し出す。もう彼女だけに苦しみを押しつけるのは止めよう。

「どうした？　早く渡せよ。そろそろ学校が始まる時間だぞ。転校生が初っ端から遅刻は色々とマズイんじゃないか？」
　時刻はもうすぐ八時になろうとしていた。そろそろ母親が俺を呼びに来る時間なので早くして欲しい。
「どうしてそんなことを言うのっ！　私はあなたの苦しみも背負うって覚悟したのに、それなのにどうしてッ!?」
　拳銃を持つ暁美ほむらの手がガタガタ震え始めた。その震えた状態で俺に照準を合わせる。
「どうしてって、それが俺の出した結論だからだ。俺はお前と過ごすこの短い時間が好きになっちまった。だからせめて自分の苦しみぐらい自分で背負いたい」
　それぐらいしか、背負い続けてきた彼女に出来ることが無かったから。
「ふざけないでッ！」
　俺の想いとは裏腹に、暁美ほむらはそれを否定する。
「そんなの自分勝手よ！　私のことを何も知らないくせに！」
「そうだな。これは俺の自分勝手だ。だから早く渡せ。もうすぐ母親が来そうだ」
「駄目、駄目よ……。それは許せるわけないじゃないッ！」
　そう叫んで暁美ほむらは引き金を引く。
　俺はなんら抵抗はせずにその弾丸を身体で受け止めた。
「ッぅ……」
　俺の身体ごと寝巻として着用していた白いTシャツの腹部に一つの穴が穿たれる。その小さな穴を中心として、クモの巣のように俺の血液が白いTシャツに染み込み広がってゆく。
　右手で撃たれた個所を押さえるも、流れ出る血液は止まらない。
　すぐに死ぬことは無い。何故なら現に今俺は生きているからだ。しかし、このまま何もしなければ俺は数分後には出血多量で死ぬだろう。
　ああ、自分で自分を殺すつもりだったのにな。
　俺がこの繰り返しから解放されるために、暁美ほむらの負担を減ら

す事。そして、俺自身がもう彼女に俺なんかの為に手を汚して欲しくなかったから。
彼女の手から力が抜け、拳銃が床へゴトッと鈍い音を立ててフローリングの上に落ちる。
「あ、ぁあ……、あぁぁああ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛ッッ!!」
暁美ほむらの叫びが静かな俺の部屋に響き渡った。痛みを堪えながら拳銃に向けていた視線を彼女へと移動させると、暁美ほむらは頭を抱えながら顔を歪ませていた。
こんな彼女は見ていられない。素直にそう思った。
だから俺はベッドから降り、彼女の元へと近寄る。一歩踏み出す度に血が腹部から勢いを増して体外へと流れ出ていった。
俺の額には汗がにじみ、暁美ほむらと別の意味で俺の顔は苦痛に歪む。
血液が足りないみたいで身体が重い。彼女の元まで来るのに息を切らしていた。
「ハァ、ハァ、ハァ……」
俺と暁美ほむらの視線が交差する。
彼女は、未確認飛行物体だとか未確認生命体でも見てしまったかのように眼を大きく開く。その瞳からは弱々しい彼女が感じられる。目尻には少量の水分を確認することが出来て、俺の為に泣いてくれたのか、と俺の心は何故か満たされた。
それまで撃たれた個所を押さえていた右手を離し、俺は両手で縋りつくように暁美ほむらの身体に抱きつく。
「えっ……」
「ごめん。……また、背負わせ、ちゃうな」
ここまで移動するのに力を使いきっており、既に自分で自分を殺す余力なんて残されてはいなかった。
俺の予定なら、ここまで辿り着いて、暁美ほむらが床に落とした拳銃を拾って自分の頭をブチ抜くはずだったんだけどな。今は喋ることが俺に出来る残された唯一の事だ。
彼女に抱きついたことで、彼女の青を基調としたセーラー服のよう

な魔法少女のコスチュームに俺の血液が染み込んでいった。これについても謝りたかったが、余計なことに残されたことを使うわけにはいかない。
「次から……自分で死ぬから、そんな、顔、するなよ」
もはや俺の身体にはほとんど力が残っておらず、腕の力が抜け、重力に従うように暁美ほむらの身体から床へと崩れ落ちる。
「駄目ぇッ!?」
だが俺の身体は床へ衝突する前に暁美ほむらの手によって抱きすくめられた。
残る最後の力で必死に彼女の顔を窺う。
「ごめんなさい……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
そこにはぐちゃぐちゃに崩れた泣き顔しかなくて、もどかしくて仕方なかった。
なんで俺は、彼女にこんな顔をさせてしまっているのだろう。
確かに初めは暁美ほむらの苦しむ姿を見るために俺は死ぬことを選んだ。しかし、今は彼女の泣き顔なんて見たくなかった。
――無力な自分がどうしようもなく嫌いになった。

＊＊＊＊＊

ベッドの上で起き上がり窓の外を見る。
今日と言う日の朝日を浴びるのは何度目だろう。
きっと薄れた記憶を思い出そうとしても無駄になる。それほどまでに何度も……何度も何度も繰り返してきた。
『やぁ』
俺以外誰もいないはずの部屋なのに知っている声が俺の中へ直接響いてきた。ソレがいるであろう勉強机の上に視線を向ける。
「何か用か？」
『はじめまして、僕はキュゥべえ。いきなりで悪いんだけど、君は何者だい？』
「ふふっ……あはははっ」

二度目だな。今日目覚めて最初にあった存在がキュゥべえだったのは。
おそらくその回数は一番少なくて、次点が俺を起こしに来た母親だろう。そして、一番多かったのは……。
『急に笑い出してどうかしたかい？　いきなり過ぎて僕にもついていけないや』
「ああ、悪いな。あの時の俺があまりにも馬鹿馬鹿しいことをしていたんだなって思ってさ」
俺の返事にキュゥべえは首を傾げる。
別に俺は理解してもらうつもりで言ったわけではないからどうでもいい。
『まぁいいや。それでなんなんだい、君は？　僕の経験上、君みたいな男であるのに莫大な魔力をその身に宿している存在は初めてみるよ』
「……何なんだろうな？　俺にもよくわからん。ただ……」
『ただ……？』
「ただ……いや、やっぱり何でもない」
言いかけて、コイツに言っても無駄だと思い口を噤む。
俺はキュゥべえに願うことはできない。もしも願うとしたら、鹿目や美樹を代わりに犠牲にしなければならない。そんなのは俺望むところではないのだ。
それに俺は、全ての原因の彼女と一緒にいた方が良いと思ってしまっている。
「もうお前と話すことはない。そろそろ学校に行かなくちゃいけないからどっか行ってくれ」
『残念だよ。君とは良い関係を築けそうかと思ったんだけどな』
そう言い残してキュゥべえは俺の部屋から姿を消した。
俺はそれを確認してから見滝原中学の白い学ランに着替えて、朝食を食べにリビングに向かった。
さっさと朝食を食べ、早めに学校に行くことにする。
学校についた俺は上履きに履き替え、裏門へと通じる正面玄関で彼女を待つ。

彼女がここに来るかはわからない。だけど、彼女は今日転校してくる転校生のハズで、それならばここから学校へ入ってくる可能性が高い。

何故か、今回は俺を殺しに来なかった。

そのことが俺の頭に過ぎるが、頭を乱暴に振って頭から追い出す。

時折登校してくる教員たちに挨拶をしながらその時を待つ。

そして彼女はやって来た。

俺の存在を確認して、彼女の動きが固まった。久しぶりに見た彼女の制服姿はなんだか懐かしさを感じた。

「なんで、あなたがここに……」

「なんでって、それはこっちが訊きたいな。なんで今日、俺のところに来なかったんだ？」

「それは……」

彼女はなんとも言いにくそうに視線を逸らす。

「まぁ、いいさ。それよりもお前に言いたいことがあるんだよ」

「私に？」

朝目覚めてから学校に来て、そしてここで彼女を待つ間ずっと考えていた言葉を言う。

「俺に、お前の願いを叶える手伝いをさせてくれ」

これがもっとも良い選択だと俺は導き出した。

誰にも迷惑をかけることが無く、俺がこの繰り返しから解き放たれる唯一の選択。それに彼女にこれ以上俺を殺させると言う苦痛を与えずに済む。

彼女――暁美ほむらの返答は……。

第八話

「あれが……アイツのせいでほむらは永遠とも思える時間の中を繰り返してきたのか」
「ええそうよ。あれを私が倒さない限り、私たちの時計の針は進まない」
――ワルプルギスの夜
それは激しい嵐の中、悠然と見滝原市の宙に浮いていた。
巨大な歯車に、ドレスを着た人形を逆さに吊るしたような姿。あまりにもその魔女の大きさが馬鹿げているぐらいに大きすぎて、こんなのを本当にほむらが倒せるのか心配してしまう。
そんな俺の心情が顔に出ていたのだろう。ほむらが俺に微笑みかける。
「大丈夫よ。私は何度となくあれと対峙してきた。こんどこそ倒して、私とあなたの時間を進められるように努力するわ。だから……」
「ああ、わかってる。アイツのことは俺に任せておけ。成功を祈ってるよ」
ワルプルギスの夜に向かって駆けてゆくほむらの背を見届ける。
さて、俺も俺のするべきことをしなければな。
彼女がいるであろう避難所に指定されている体育館目指して歩いていると、その進路上を逆走するように目的の人物が他一名と連れだって息を切らせながら走って来た。
大雨の中、よくもまぁ傘も差さずにご苦労なことであるが、俺からしてみれば彼女がここにいると言うだけでナンセンスだ。
「そんなに急いでどこ行くつもりだ――鹿目？」
「む、向井君!?」
「向井こそなんでこんなところにいるんだよ!?　今がどういう状況かわかってるんだろ！」
俺がここにいるだけで驚く鹿目に対して、美樹はその手に一振りのサーベルを握っており、マントを羽織った騎士のようなその服装からも美樹が魔法少女であると言うことが窺い知れる。

「ああ、だから美樹、お前はこの先に進むと良い。だが鹿目、お前を先に進ませるわけにはいかない」
「どういうことだよ向井!?　まどかはあたしの仲間だ。それにまどかが一緒にいてくれるからあたしはあたしのままで戦えるんだ！」
　俺は美樹には進んで良いと言ってるのに、何故か鹿目も一緒に通せと美樹がうるさい。完全に鹿目は置いてきぼりの状況で、あわあわしている。
「そんなに魔女化を恐れてるのか？」
「ッ……」
　魔法少女は魔法を使う度にソウルジェムに穢れを貯める。普通ならその穢れは魔女が落とすグリーフシードを使って吸収するのだが、それをせずに穢れを貯め続けると魔法少女は魔女へと変貌を遂げる。
　あの時は大変だった。
　失恋から自暴自棄になった美樹が闇雲に魔女や使い魔を倒していった。それだけなら何の問題も無いのだが、美樹は死ぬつもりだったらしくグリーフシードを使ってソウルジェムの穢れを吸収しなかった。
　それを近くで見ていた鹿目がほむらに相談して、やむなく俺たちが――と言っても、ほむらが鹿目経由で美樹に真実を伝えることでなんとか魔女化を止めさせることが出来た。
　その後、なんか色々と鹿目がいたから自分は魔女にならなかったとか勘違いした美樹が鹿目にベッタリで、現在進行形で非常にめんどくさいことになっている。
「そんな言い方は良くないと思うよ」
　黙った美樹に代わり、鹿目が喋り出す。
「こんなのどうでも良いじゃんかよ」
　俺のするべきことは美樹には関係していない。だからこそ、美樹なんてどうでも良い。
「どうでもいい、って……」
「それよりも鹿目、お前はどうなんだ？　お前がこの先に進めば確実に足手まといになる。もしかしたらそのせいで美樹が、そしてお前自

身も死ぬことになるかもしれないんだぞ」
「わたしは……」
「まどかはあたしが護るッ！」
　俺の問いかけに対して答えようとした鹿目だが、言い始める前に美樹が大声を張り上げて言わせなかった。
　その行為がどうしようもなく俺を不快にする。美樹さえいなければ、俺がやるべきことは割と簡単に済みそうなのに。
「護れるのか……？　この先にいる魔女はほむらでも勝てるかどうかも怪しい相手だぞ。ほらむにさえ簡単にあしらわれるお前に、本当に鹿目を護りながら戦えると思うのか？」
「っ……!?　だったら、なおさらあたしが行かないといけないじゃんかよ。転校生一人じゃ倒せないんだろ？　だったらあたしが加われば――」
　抜け穴を見つけた風に勝ち誇った表情をする美樹。だけれどもコイツは何もわかっていない。
「だから言ってんだろ。美樹、お前は先に進んで良いってさ。ほら行けよ。お前がほむらに加勢してくれれば勝てる可能性が高まるからさ」
　バカだバカだとは思っていたが、ここまでバカだとは思ってもみなかった。美樹の鹿目に対する執着心はすでに病的な盲信にまでなっているのかもしれない。
「ダメだダメだダメだっ、まどかがいないとダメなんだ!!」
　美樹の叫びを聞いた次の瞬間、感じる死の感触。
　それは初めて感じる感触だった。
「グッ……」
　まさかサーベルで腹を刺されるとは思わなかった。
「向井が悪いんだからな。そう、向井が悪いんだよ」
　美樹は、俺にサーベルを突き立てた態勢で自分の行為を正当化する言葉を呟いていた。
「さやかちゃん!?」
「さぁ行こうか、まどか。邪魔者はいなくなったよ」

美樹がサーベルから手を離すと、俺の身体は呆気なく地面に崩れ落ちる。
「大丈夫、向井君!?」
鹿目が駆けよってきて俺のことを抱きあげ涙を流してくれるが、それに応えることすらできない。
「なんで……なんで、向井君にこんなことするの、さやかちゃんっ!!」
俺の視界からは確認できないが、言葉から察するにきっと鹿目は美樹を睨みつけているのだろう。
「あはは、なんでまどかがそんな顔してるの？　あたしたちの邪魔者が消えたんだよ？　もっと喜ばなくちゃ」
狂ったように美樹が笑う。そんな美樹を鹿目が拒否して、鹿目は美樹に殺された。
これでずっと一緒だね、と鹿目の死体を抱きしめる美樹を最後に確認して、俺の意識は完全に終わりを迎えることになる。
ごめん、ほむら。
今回はお前の願い、叶えられなかった。
――鹿目まどかを死の運命から救い出す
たったそれだけのことなのにな。
だけど、その願いはほむらが幾度となく改変させようと繰り返しても成し得られなかった願いでもある。
鹿目がワルプルギスの夜と相対せばキュゥべえと契約して魔法少女になり、そして魔女になる。
もしもワルプルギスの夜に相対さなくても何かしらの原因で鹿目は死ぬことになる。
そのことをほむらから訊いた時は若干信じきれなかったが、今なら完全に信じられる。
何故なら俺の目の前で鹿目が死んだからだ。
どうしてほむらが鹿目を救おうとしているのかは知らない。
だけれども、俺はほむらの願いを叶えるために鹿目を救わなくてはならない。
それが、彼女に苦しみを背負わせてしまった同じ時間を生きる俺に

しか出来ない贖罪だから。

＊＊＊＊＊

何度となく、俺とほむらはこの一ヶ月を繰り返した。
時には巴マミと共闘し、美樹さやかと共闘し、未だ語った事はない佐倉杏子とも共闘したりしたが、それでもあの最悪の魔女『ワルプルギスの夜』にはまるで歯が立ちそうな気配が微塵も無かった。
他にも俺たちの目的である鹿目まどかを死の運命から救い出すことを否定してきたイレギュラーである美国織莉子、呉キリカの存在もあった。
その平行世界では美国織莉子が魔法少女として現れ、彼女の持つ未来を見通す魔法で鹿目まどかの魔女化した未来を知り、それを阻止するために同じく呉キリカとともに鹿目まどかを殺そうとしてきた。
もちろん、俺とほむらも黙って見ていたわけではない。なぜなら俺たちの目的は鹿目まどかを救うことだからだ。
しかし、最終的には俺たちは美国織莉子の執念に負けてしまった。
せっかくワルプルギスの夜に勝つことが出来そうな戦力が揃ったと思ったのに、鹿目まどかが殺されてしまってはほむらの願いは果たせないので、やむなく俺たちは次の時間へと旅立った。
あの時のほむらの悔しそうな表情は見てられなかった。
次こそは……と意気込んでみるも、その後は美国織莉子も呉キリカの姿を確認出来た時間軸は存在しなかった。
ほむらは何も俺には教えてくれなかった。
俺は彼女の願いを叶えるのを手伝っているというのにだ。しかしそれでも俺は全然構わなかった。
それは勝手に俺が言い出したことなので、それなのに色々と教えてもらおうなんて厚かましいにもほどがある。
だから俺は、様々な事を知ろうと動きまわった。
これから語るのは俺が体験したほんの一部の記憶である。

＊＊＊＊＊

「ふうん、これが鹿目の部屋か」

初めて入った鹿目の部屋を見渡す。壁にはデザインを意識したのか十二本の突起が飛び出している奇怪な時計やタペストリーが掛けられており、ベッドの上にある台にはいくつもの可愛らしいぬいぐるみが並べられていて、女の子の部屋に入ったんだなと実感する。

勘違いして欲しいわけではないのだが、女の子の部屋に入るのはこれが初めてのことではない。むしろ、ほむらが住むアパートにはよく出入りしていたりするのだが、あの部屋は魔法でその内装が変えられており、上から見れば時計盤のような部屋だ。これ以上は説明し難いので勘弁願うが、とにかくアレを女の子の部屋とは俺は認識してはいない。

「あはは、はずかしいからあまり見ないで欲しいんだけど……」

「悪い悪い。配慮が足らなかったよ」

鹿目に促されるように俺は勉強机に備え付けられていたイスに座り、鹿目自身は自分のベッドへと腰を降ろした。

「それで、何の用？」

だいたいの見当はついていたが、確認ついでに本人の口からしゃべってもらうことにする。

「……あ、あのね。向井君ってほむらちゃんとなかよしなんだよね？」

「仲が良いって言うのかな……？　よく一緒にいることを仲が良いって言うなら仲は良いんじゃないか」

俺とほむらは仲が良いのだろうか？

イマイチ、自信を持って答えられない自分がいた。俺たちの関係を例えるなら共犯関係とでも言うのだろうか。同じ目的のためにそれ以外のすべてを見捨てられる。そう言った意味では共犯関係が近いかもしれないが、なんか違う気がしないでもない。

「うん、それはなかよしだと思うよ」

何故か鹿目からお墨付きをもらった。

「で、俺を自分の部屋まで招いておいて話はそれだけなのか？」

自分で話を逸らしておいてなんだが、話を戻すことにする。
鹿目は少しの間顔を伏せて、やがて決心したのか顔を上げ、俺と目を合わせてから口を開く。
「向井君は恐くないの？」
「恐い？」
「マミさんだけじゃなくて、さやかちゃんも杏子ちゃんもみんな死んじゃった」
初めに巴さん。彼女は油断し過ぎた。
次に美樹。彼女は自分に絶望した。
最後に佐倉。彼女は、美樹の後を追って行った。
「そうだな。魔法少女が辿り着く先は死だけだよ」
己の魂であるソウルジェムを砕かれれば魔法少女は死ぬ。魔法を使い過ぎてソウルジェムに穢れを溜め過ぎたら魔女へと魔法少女はその姿を変える。
「このままじゃ、ほむらちゃんも死んじゃうことになるのに、どうして向井君はそんなにも平気そうな顔をするの？　わたしには全然わからないよ」
顔見知りの死。それは悲しいことだ。
未だ中学生である鹿目にはそれが堪えられないのだろう。
だから彼女の長所である他人を思いやる優しさが、ほむらの安否に注がれる事は自然の成り行き上予想しやすいことであった。
ハハッ、互いに互いの安否を気にする仲か。良かったじゃないか、ほむら。
「俺は……俺とほむらには目的があるんだよ。それさえ叶えられるのならば俺たちは自分の命なんていくらでも対価として捧げても良いと思ってる」
「そんな死んでも良いなんて言っちゃだめだよっ！　わたしはほむらちゃんにも向井君にも死んでほしくないよ！」
消極的な鹿目には珍しく、腰を降ろしていたベッドから勢いよく立ち上がり、俺へと詰めかけてきた。
「お願いだからそんなこと言わないでよ……。お願い……お願いだか

ら……」
今にも泣き出しそうな鹿目の表情が見てられなかったが、グッと堪える。
「……そんなこと言われても、俺たちの決意は変わらないぞ」
心が痛い。本当は鹿目にこんな事は言いたくなかったが、非情になるしかないんだ。
「……」
「……」
「……そっか。だったら最後にほむらちゃんの家に連れてってもらえないかな？」
申し訳ない気持ちでいっぱいだった俺は、その鹿目のお願いを「それぐらいなら……」と、叶えてあげることにした。
今にして思えばこの時に周囲を警戒してなかったのが失敗だったのだろう。まさかキュゥべえがこの時の俺たちの会話を盗み聞きしていたとは思ってもみなかった。
最終決戦の最中、俺たちの目の届かないところで彼女の優しさに浸けこんで契約を結び、鹿目まどかは魔法少女になった。

＊＊＊＊＊

「ワルプルギスの夜……噂に違わぬ巨大さね」
巴さんはポツリとそう言葉を漏らした。
それもそうだろう。俺もアレとの邂逅は何度も経験しているが、それでもその超弩級の巨体に慣れることはなく、見ただけでもの凄くプレッシャーが圧し掛かってくる。
「……勝てますか？」
ワルプルギスの夜を見上げている巴さんに問いかける。
「もちろん。だって私たちはそのためにここにいるんですもの。そうよね、暁美さん？」
「ええ、何としてでも倒すわ。それが私のやらなければならないことだから」

ほむらが巴さんの問いかけに返す。
二人とも、なんと心強い言葉を出してくれるのだろうか。応援することぐらいしか出来ない俺からしてみれば、逆に何も出来なくて申し訳ない気持ちになってくる。
だけれども人には領分と言うモノがある。
俺に出来るのは記憶を持ち越して次の時間軸に移動できるだけで、魔女に対する戦闘能力は全くの皆無。そちらは魔法少女である二人に任せて、俺は後ろで勝てるように見守ろう。
「いくわよ、暁美さん」
巴さんがワルプルギスの夜に向かって駆け出す。
その進路上にはワルプルギスの夜の使い魔なのか魔法少女に酷似した影のような存在がどこからともなく涌き出てくるが、巴さんはマスケット銃を片手にその中を突きぬけてゆく。
「私も行くわ」
「ああ、いってらっしゃい。今度こそ倒せるように健闘を祈ってる」
ほむらも行ってしまう。
最後の話し合い手がいなくなり、本当に見守るしかなくなったので手頃な瓦礫に腰を降ろすことにする。
『やってくれたね、向井キリト』
どこからともなく聴こえてくるキュゥべえの声。相変わらず神出鬼没なヤツだ。
『まさか、一度精神が壊れてしまったマミをあんな方法で正常な精神に回復させるなんて思ってもみなかったよ』
「なに、孤独を埋めてあげだけだよ。それほど驚くことでもない」
巴さんは寂しかったのだ。その寂しさの渇きを埋めるために、魔法少女体験ツアーなるものを開催して後輩との繋がりを求めたり、頼れる先輩を演じてあそこまで俺たちにお節介を焼いてくれていたのだ。
その原因は彼女が魔法少女になる原因になった交通事故によるところが大きい。
数年前に家族で夕ご飯を食べに行くドライブ中、自動車事故で自分以外の家族を失い、しかも自身も瀕死の状態に合った中、命を繋ぐた

めにキュウべえと契約を交わし魔法少女になった。だけれども、彼女には遠縁の親戚しかおらず、中学生であるのにもかかわらず独り暮らしをしていたそうだ。
自分の周りにいる存在は消えて行ってしまう、そんな風に巴さんの心の中に強い不安感や孤独感が生まれ、だんだんと精神が脆くなっていったようだ。
「まぁ、俺たちにも似たような経験があるからな」
他者に依存することは楽なのだ。
だから俺はそれを巴さんに示してあげただけ。なんてことない、たったそれだけなのだ。
視線の先ではほむらが左腕に装着している楯からグレネードを取り出し、ワルプルギスの夜目掛けて照準を合わせている。次の瞬間にはいくつものグレネード弾がワルプルギスの夜目掛けて殺到していた。
ほむらが扱う魔法は時間操作。時間停止と一ヵ月前まで時間を遡らせる時間遡行だけしか出来ないが、それでも強力な魔法だ。
さきほど使用したのは時間停止を用い、その間にいくつものグレネードを楯から取り出しては撃ち、取り出しては撃ちを繰り返し、同時にワルプルギスの夜に直撃させたのだ。これにより、高威力を生み出す。
グレネード弾がいくつも直撃したワルプルギスの夜だったが、その身体に損傷は見受けられず、わずかにノックバックしただけという結果になった。
だが、その隙を窺っていたように、巴さんが召喚魔法で何百と言う数のマスケット銃を規則正しく上空に展開し、それらの全ての撃鉄を鳴らした。
吹き荒ぶ暴風にも負けない轟音。だけれども、それさえもワルプルギスの夜にダメージが通った気配がない。
『ほむらとマミだけじゃ、おそらくワルプルギスの夜は倒せないだろうね』
キュウべえが目の前で起こっている戦闘の結末を予想する。

「……かもしれないな」
俺自身も、彼女たちを送り出す前からそんな気がしていた。
送り出す時は健闘を祈ってるとか言ってはみたものの、心のどこかでまだまだ戦力が足りないと思っていた。
ほむらには本当に悪いと思っている。
彼女は、繰り返してきた全ての時間軸で真剣にワルプルギスの夜を倒そうとしてきたのだ。なのに手伝うとか言っておきながら、諦めの入った気持ちのままで望むことは失礼に当たる。
「もっと戦力が必要か」
せめてほむらがワルプルギスの夜との真っ向から戦闘を集中出来るように使い魔たちを足止め出来る存在が欲しい。
今の状況は、巴さんが戦いに参加しているとは言え、それでもなお、隙あらば使い魔たちはほむらに対して攻撃を仕掛けてくる。そのことは元来、魔法少女は単独で魔女と戦ってきた存在なので即席の連携では上手く噛み合わないことも起因する。
その辺りのことも次からは考えなくてはならないな。
『戦力なら君たちのすぐそばにいるじゃないか』
「鹿目のことか？」
『そうさ。まどかにはどんな運命を覆すことを可能にする力があるんだ』
運命、ね。
たしかに鹿目にはそれを覆すだけの力があるかもしれない。いや、実際にそのか弱い少女の身体に宿っているだろう。
それはこの俺は目で見てきた。キュゥべえと契約してワルプルギスの夜を一撃で粉砕するその姿を。
だが、鹿目にはどんな運命をも覆してしまえる力はないと思う。もしもあったのなら、俺たちが繰り返してきた意味が無くなってしまう。鹿目が自分の死の運命を覆すことが出来ると言うのなら、俺とほむらの努力は一体なんだったのだろうか？
「それだけは絶対にしないぞ」
キュゥべえに俺たちの意思をハッキリと伝える。鹿目を魔法少女

にする事はほむらが許さない。だから俺も許さない。
視線の先の戦闘中のほむらと巴さんの表情が芳しくない。戦闘に関しては素人の俺でさえもわかってしまえるほど、コチラ側が不利な状況に立たされていた。
『どうしてだい？　このままでは君たちの住むこの見滝原市が壊滅してしまうよ』
起死回生を狙った巴さんのティロフィナーレ。ほむらが囮となり、巴さんが巨大な大砲を召喚し砲弾を放つもワルプルギスの夜にかすり傷をつけられた程度。
しかも巴さんのティロフィナーレを放った後の硬直した時の隙を窺っていたかのように使い魔たちが巴さんに殺到し、黄色のソウルジェムを破壊してしまった。
超弩級大型魔女『ワルプルギスの夜』。あまりにも敵が強大過ぎた。その力の差は圧倒的で、どうしようもないくらいに無慈悲な存在だった。
「駄目だったか……」
瓦礫から腰を浮かせ、しばらく待つ。
「行こうか、ほむら」
戻って来たほむらは悔しそうな表情をしていたが、すぐさま気持ちを切り替えたのかいつもの無表情になる。精一杯の強がりだ。
――ガチリッ
時間軸を切り替える音。
その発信元はほむらの楯だ。その音に嫌な思い出も沢山あるが、今はもう、次へ旅立つための合図でしか無い。
『フフッ、なかなか面白い状況になってきたじゃないか』
次の時間軸へ旅立つ瞬間、聴こえてきたキュゥべえの言葉が嫌によく響いた。

＊＊＊＊＊

「こんな時になんなんだけどさ、向井にはホント感謝してるんだ」

ほむらを先頭にワルプルギスの夜の出現予測地点に向かう中、俺の隣で歩く美樹はえへへと恥ずかしそうに顔を綻ばせた。
「急にどうしたんだ？」
ほむらと美樹の格好は魔法少女装束。藍色のような濃い青のほむら、水色のような薄い青の美樹。魔法少女のイメージカラーとはその人の心の中を映しているようだ。
すでに二人はワルプルギスの夜との戦闘の為に気持ちを静めているかと思っていたんだが、急に美樹からそんなことを言われたので少し驚いてしまった。
「もしもあの時、向井があたしを勇気づけてくれなかったら、今ここにあたしはいなかったなーって思っちゃってさ」
あの時ね……。
特に何かをしたと言う憶えはない。俺はただ、友達である恭介のために行動した。恭介の隣にいるのは美樹が相応しいと思ったから、俺は志筑仁美よりも美樹を応援したいと思った。
「そんなに恭介のことが好きなのか？」
「うん……ってこんなこと言わせんなよ！　なんか恥ずかしくなっちゃったじゃん！」
「いやいや、先にお前が振ってきたことじゃないか」
美樹は顔を真っ赤に染めてぶんぶんと振って恥ずかしさを紛らわしている。って、おい。いくら鞘に納まっているとはいえサーベルを振り回すなよ。危ないじゃないか。
ひとしきり恥ずかしさを紛らわす行為をした後、美樹は顔を引き締めた。
「あたし、この戦いが終わったら恭介に自分の気持ちを伝えるよ」
そうなのだ。ここまで惚気ておいて美樹はまだ恭介に告白していない。
これはこちらの事情を優先してもらった結果で、申し訳なく思っている。
「……悪いな」
「どうして向井が謝るんだよ。むしろあたしは向井に感謝してるくら

いなんだよ？」
「だってさ、この一週間美樹が恭介に告白する機会はいくらでもあったのに、対ワルプルギスの夜を想定したほむらとの連携訓練ばっかりさせた。ホント悪いな」
　巴さんの時の教訓を生かして、今回は一週間ほど前から二人の連携訓練を行なってきた。成果は上々。この前現れた魔女には可哀想になるぐらいに圧勝している。
「ううん、いいんだ。だってワルプルなんとかってのを倒さないと見滝原がメチャクチャになるんだよね？」
「そうだな」
「だとしたら、恭介の身も危ないってことになるよね。それにまどかや仁美やクラスのみんな、あたしの家族だって危ないんだ。いっちょ、その元凶を倒して、みんなを助けないとね。あたし自身のことはそれをしてからでも遅くはないと思う」
　そのせいで志筑仁美に一歩リードされているとしても？
　……とは、口が裂けても言えなかった。そんなこと美樹は百も承知だろうし、こんな時に言うべきことでもない。
「そういえば気になってたんだけど、あんたたちってどういう関係なの？」
　美樹のその言葉に先を黙々歩いていたほむらがピクリと反応する。
「この一週間ぐらいあんたたちと一緒にいるけど、恋人って感じでもないし、親友……って感じでもないか。でも友達って間柄でもないよね」
「……」
　返答に困った。ほむらはこちらに聞き耳を立てたまま前を向いて前進し続けている。助け船は期待できそうにも無い。
　とりあえず考えてみることにする。
　まず恋人と言う選択肢が排除される。そもそも付き合ってないのだから当然だ。
　次に親友も無い。別に仲良くしているわけでもない。それと同じ理由で友達も選択肢から排除されることになる。

「あれれ？　訊いちゃいけない質問だった……？」
「いや、別に問題無いんだが……どう答えたら良いのか決めあぐねていてな。ほむらは俺たちの関係って何だと思う？」
助け船を期待できないのなら、救援筒を焚いて無理矢理船を来させれば良い。
先を歩くほむらに問いかける。すると、彼女は立ち止り二・三秒考え顔だけ振り返り俺の眼を見て一言。
「……仲間よ」
ほう、そんな選択肢もあったのか。
同じ目的に向かって一緒に進み続ける関係。確かに、それが一番近いかもな。
「だ、そうだ」
ほむらの視線をスライドさせるように、俺は美樹へと視線を滑らせた。
「そっか。頑張れよ、向井ッ！」
「いってぇぇぇぇぇッ!!」
何故か、バチンと背中を叩かれた。
「何すんだ、美樹！　俺はただの一般人なんだぞ!?　魔法少女のバカぢからで叩くんじゃねーよっ！」
「いーじゃん、いーじゃん」
良くねーよ……と内心思いながら諦めることにする。もしかしたら、これが美樹なりの緊張のほぐし方かもしれない。
これから彼女が立ち向かうのは超弩級の大型魔女であるワルプルギスの夜。幾度となくほむらが挑戦し、それと同じくらい敗北してきた存在。ほむらによれば、俺がこの繰り返しに参加する前に一度倒したことがあると言うのだが、詳細は聞いていない。繰り返し続けているこの現状がすでに答えなのだから。
「お出ましのようよ」
すでに出現予測地点についていたらしい。ほむらのその言葉とともに一面の空が灰色雲で覆われていた見滝原に突如として暴風が吹き荒れた。

俺はこれを何度も経験しているから反応することはないが、今回の美樹はこれが初めてなので、現れた存在に目を限界まで見開き有り得ないようなモノを見るように驚きを表している。
「あはは、あたしが予想していた以上のデカサとは……向井たちの言ってた通りだったんだね」
あれだけ何度も言い含めていたのにも関わらずに、美樹は俺たちの言葉を信じきれていなかったらしい。でもまぁ、誤差の範囲なので気にしないことにする。
「いくわよ、美樹さやか」
「よっしゃ、とっととアイツ倒してあたしたちの街を護るんだ！」
魔法少女二人を見送る。
俺には戦う力がなく、ただただ結末を見届けることしか出来ない。だけれどもそれを悔しいと思うことはない。
人には領分と言うモノがあって、俺にはそちら方面で頑張る必要はないからな。
「……いっちまったのか」
この場には俺以外誰にも居ないはずなのに聴こえてきた声。その音源へと顔を向ける。
「付き合いきれねぇってどっか行ったんじゃないのか？」
「う、うっせぇ。ちょっと見学に来てやっただけだ！」
佐倉杏子。真紅のように綺麗な赤髪をポニーテールにし、その勝気な性格を表したかのような八重歯が特徴の魔法少女だ。チャイナ服を西洋風にしたような自らの髪と同じ赤色の魔法少女装束を着ている。
「だけど駄目だな。圧倒的に経験がたらねぇ。あンなんじゃとてもじゃねーが勝てねぇよ」
美樹が契約したのはおよそ二週間前。経験不足は百も承知だったが、今回の戦力は彼女しかいなかった。
美樹がその身に宿す強力な治癒魔法を用いて壁となり、ほむらが必殺の一撃を叩きこむ。それが今回の作戦だった。
「一応壁としての役割はできてるみてぇだが、あれはそのうち押し切

られて終わるな」
「だったら、加勢してくれないか？　魔法少女としての経験が長い佐倉が入ってくれればまともな戦いになると思うんだが」
「アタシは他人のために戦うアイツらとなんて一緒に戦いたくねぇよ。悪りぃーな、負ける戦には参加しない主義なんでね」
それだけ言い残して佐倉は俺の前から消えていった。
それにしても経験か……。
魔法少女として戦い続けてきた経験がなければ、連携を練習しただけではワルプルギスの夜は倒せないようだ。
それを証明するように視線の先では美樹の犯した小さなミスからどんどん戦局が悪くなってきている。
「次はそれも考えないとな……」
俺に出来るのは、色んなことを考えてほむらが選べる選択肢を多くすることだけだ。

＊＊＊＊＊

佐倉杏子と言う少女がいる。
自己の利益のみを重視し、他人の利益を一切考えようとしない身勝手な主張をしている利己主義者だ。
魔法は自分の望みだけを叶えるためだけに使うべきだと、彼女は主張する。
だが、そんな彼女が見滝原市の市民を護るために、魔法を――その身に宿る魔法少女としての力を惜しみなく使っていた。
自分とは相反する信条を持つ美樹と対立していた佐倉であったが、美樹と関わるうちに自分の過去を美樹と重ねていった。
そして美樹が死に、美樹が護ろうとしていたものを護るため、佐倉はその力を奮っている。
「うぉおおおおおおッ!!!」
その手に握る槍でワルプルギスの夜の使い魔たちを休むことなく切り刻み続けている。その背後からほむらも援護するように、ロケッ

ト砲やグレネードを撃ちこむ。
それを離れたところから双眼鏡を用いて見守る俺は落胆の色を隠せなかった。
「……こんなものか」
これまでの中では一番善戦しているかもしれない。
だけれども、こんなものではワルプルギスの夜を倒すことは出来ない。そう、戦闘に関して素人である俺にも理解出来てしまえるほど、戦況は芳しくなかった。
巴さんの広域殲滅型の戦闘スタイルではほむらとの連携が難しい。
美樹とでは連携しやすかったが、圧倒的に魔法少女としての経験が足らない。
だから両者の欠点を補うために、ほむらとの連携が取りやすく、経験豊富な魔法少女である佐倉を苦労して生かす事に成功したと言うのに、この光景を見る限り遣る瀬無い気持ちでいっぱいになる。
「やはり鹿目を除く全員で挑まないと駄目なのかな……」
その考えは実質不可能だと言える。
巴さんが死ぬからこそ佐倉は見滝原市にやって来るので、その時点で全員そろえることは出来ない。それに、美樹だってキュゥべえと契約して魔法少女とならなかった時間軸もあった。
他にもワルプルギスの夜に全員で挑むことが出来ない理由なんて少し考えただけでも沢山出てきた。
「どうすれば良いって言うんだよ。もっとも成功率が高いと思って望んだ末の結果がこれじゃあ、諦めたくなってくるじゃんか」
愚痴を零しながらも、俺は諦めることは出来ないと自分を鼓舞する。
双眼鏡越しで戦っているほむらを見ると、その表情は今も明日を願っている。そんな彼女を見ていると、諦めようとしていた自分が嫌になってくる。
「だけどどうすりゃいいんだろうな……」
座った状態で背中から倒れ、空を仰ぐ。
一面の灰色。時々青い線が灰色のキャンパスに走り、ゴゴゴッ、と

重低音を響かせている。風も強く、台風がやって来る前兆みたいだ。
頬にポツッと水滴が当たる。それを皮切りに、バケツをひっくり返したような雨が見滝原市を襲った。
そんな状況の中でも彼女たちは戦い続けている。
「ご苦労さん……だな」
ひとまず起き上がり、屋根のある場所まで退避する。
「こりゃ双眼鏡は無意味だな」
あまりにも雨量が凄過ぎて双眼鏡を覗いても何がなんだか状況が把握できなかった。
仕方ないので肉眼で見守ることにする。幸いなことにワルプルギスの夜は巨大で、ワルプルギスの夜を見ているだけでもその動き次第でほむらたちの攻撃が通っているかどうかわかる。
もっとも、攻撃を受けて仰け反ることはそう何度も起こらなかったけど。
しばらくザーザーと降りしきる雨音に耳を傾けながら、ほとんど決まり切った結果を待つ。
時折響く爆音は、ほむらが使用する爆弾や重火器だろう。それらをもってしても、毎度のことながらワルプルギスの夜には勝てる気配がない。
ぴちゃぴちゃぴちゃ、と水浸しの地面を歩く音がする。その足音はだんだんと近付いて来て、俺の前で止まる。
その姿を確認すると予想通り先ほどまでの戦闘でボロボロになったほむらの姿だった。
「駄目だったわ……」
「……そうか」
長く艶やかな髪に雨が染み込み、いつも無愛想なほむらの顔を隠していた。俺からではその表情を窺うことが出来ない。
「それじゃあ、作戦タイムと行こうか。ほら、いつまでもそこに突っ立ってないでここへ座りなよ」
俺が座っている段差のすぐ隣をぺちぺち叩き、早く座るように促す。このまま立ち尽くしていても何も始まらないからな。

彼女が座るのを待ち、先ほどまで俺が考えていたことをそのまま話す。
「そうね。まどかを助けるためには、それしか方法は残されてないかもしれないわ」
考えつく最大の戦力。この見滝原市にいる全ての魔法少女を集め、ワルプルギスの夜に挑む。
もしもこのパーティーで負けるどころか、勝機を見出すことが出来なかったら、ほむらの心は完全に折れてしまうかもしれない。そう考えられるほどの最後の手段と言っても良いくらいだ。
「ただ問題は、全員をそろえることなんだよな……」
こればかりは神に祈るしかない。そう思えてきた自分がいた。
上着の上から首から提げた十字のネックレスを握り締める。
神よ。
俺はアンタを信じちゃいない。だけどさ、必死になって頑張っている女の子のことぐらい助けちゃくれないか。
俺のことなら気にしなくても良い。だからほむらのことを……。
――ガチリッ
薄れゆく意識の中、俺は神に祈り続けた。

第九話

繰り返す度によく見るようになったあの夢。
登場人物はまだ背丈の小さい頃の昔の俺と見憶えの無い長い黒髪の女の子。
気にならない訳ではないが、それを一生懸命思い出そうとする時間は俺にはなかった。
瞼を開ける。見慣れた天井。この光景は俺にとっての始まりである。
そしてベッドの上で起き上がって、目の前に白い生き物がいることも、俺にとっての始まりと言っても良いぐらいに当り前になってきた。
『やぁ』
「よう」
そのネコとウサギが合わさったような存在が喋りかけてきたので、素直に返事をする。
『君はなかなかに興味深い存在だね。僕を知覚しているのにもかかわらず冷静に対応してみせるその態度。それにその身に宿る莫大な魔力には驚かざるをえないよ』
キュゥべえは自分の身体を同じくらいの大きさの尻尾をゆらゆらと振っている。なにやら機嫌が良いみたいだ。
「まぁ……俺にも色々事情ってものがあるもんでね」
魔力については知らん。だけれども、キュゥべえが目の前にいた程度で驚くことはない。
『そうだ。自己紹介をしないとね』
別にしなくて良い。もうお前の名前は知っている。
『僕の名前はキュゥべえ。実は僕、君にお願いしたいことがあるんだ！』
「……お願い？」
今までになかった事象。これまでキュゥべえは、俺と言う存在を興味深そうに観察するだけで、俺に対してアクションを起こすなんて無

かった。
　だから少し困惑した。
『そうさ、お願いだよ。だけどその前に君の名前を教えてもらっても良いかな？』
「あ、ああ……俺は向井キリトだ」
『キリトは魔法少女と言う存在を知っているかい？　彼女たちは僕と契約して魔女と戦う宿命を負った女の子たちなんだ』
「それは知ってる」
　俺がそう返すと、キュゥべえは『やっぱりね』と言ってから言葉を続ける。
『僕が魔法少女を生みだすのには理由があるんだ』
　それも知っている。だけれどもそれを言葉に出すことはしない。そうしたら、ほむらのためにならないし。
『全ては宇宙の寿命を延ばすために僕はお願いしてる』
「キュゥべえは宇宙人なんだな」
『そうだね。君たち人類から見れば、僕という存在は地空外生命体だ。君はエントロピーという言葉を知っているかい？』
「熱力学の第二法則だったか？」
　言葉だけなら繰り返す中で何度も聞いた。しっかりと理解出来ているかは別として。そもそも中学二年の俺に期待してはいけない。
『簡単に説明すると生み出されるエネルギーと消費されるエネルギーは等しくないということだね。エネルギーは形を変換するごとにどうしてもロスを生じさせてしまうんだ。このままの状態では宇宙全体のエネルギーは目減りする一方だ』
「それはお前たちの責任じゃないのか。なぜ俺たちを巻き込んだ？」
　お前たちさえこの地球へやって来なければ、ほむらが苦しむこともなかったハズなのに。
『キリトはなかなか面白い質問の仕方をするね。まだ僕は説明し終えていないのに』
　キュゥべえは相変わらず無表情なのに、ニヤリと笑ったように感じた。

自分のバカさ加減が嫌になってくる。
『まぁ、今はおいておくことにしてあげようか。それよりも説明の方が先だ』
救われた……と言うわけではなく、問題が先延ばしになっただけだ。
『このままでは宇宙全体のエネルギーが枯渇してしまうということまでは説明したね。だから僕たちはその危機を回避するために、そして宇宙に飛び出した先駆者の責任として、僕たちはエントロピーに縛られないエネルギーを獲得するテクノロジーを発明したんだ』
それが俺たちを苦しめている契約システム。
『僕たちの文明が発明したのは知的生命体の感情をエネルギーに変換する技術なんだ。ところが生憎、当の僕らが感情というものを持ち合わせていなくてね、宇宙の様々な異種族の中から君たち人類を見出した』
さきほどの問いはここでするべきだった。自分の愚かさは反省するしかない。
というかそもそも、なぜキュゥべえたちの文明は自ら持っていない感情を資源とする技術を発明したのかが理解出来ない。もっと別の方法があるかもしれないのに。
『一人の人間が生み出す感情エネルギーは、その個体が誕生し成長するまでのエネルギーを凌駕する。君たちの魂はエントロピーを覆すエネルギーたり得るんだ。もっとも、とりわけ効率がいいのが第二次成長期の少女の希望と絶望の相転移というわけさ』
だから男の俺とは契約できない。
この繰り返しの中で、知ることになった真実。それがこの事実だ。
『ソウルジェムとなった魂は、燃え尽きてグリーフシードへと変わる瞬間に膨大なエネルギーを発生させるんだ。それを回収するのが僕たちインキュベーターの役割というわけさ』
「……まぁ、うん。お前が言っていることは一応理解出来た。それで、これがお前の言うお願いとどう関係するんだ？」
『そう急かさないでくれないか。もう少しキリトは落ち着くべきだ

よ』
自分では十分落ち着いているつもりだ。
これまでは起こることがなかったキュゥべえからのお願いという事象。俺としては早くそれを確認してワルプルギスの夜を倒すために役立てられるかが知りたい。
『さて、これからが本題だ。僕たちはエネルギーを欲している。それは理解出来たかい？』
「ああ」
宇宙の寿命を延ばす。表面上の平等な契約。
その二つを免罪符に、奇跡を対価に魔法少女を生み出し、魔女へと成長させ、エネルギーを回収する。そしてその魔女が絶望を撒き散らし、それによって不幸になった少女が奇跡に縋り魔法少女となる。
新たなエネルギーを生み出すための見事な循環が整った円環構造のシステム。
もはや驚嘆に値する。
『ならば、君にお願いするとしよう――』
続くキュゥべえの言葉に驚きを隠すことが出来なかった。
『僕と契約して魔法使いにならないか？』
キュゥべえの言っている事の意味がわからなくて頭が混乱した。
――俺と、契約……？
確かにキュゥべえはそう言っていた。俺の耳がおかしくなったか、俺の願望のせいで幻聴を聞いたとか、まだこれは夢の中だとかしない限り間違いないハズだ。
尻尾をフリフリさせていつもと変わらない円らな瞳で返答を待つキュゥべえ。だが、俺はコイツに対して即答してはいけないということを知っている。
なぜならキュゥべえは合理主義者だからだ。
筋を通すためなら、情報を制限して相手に誤認させたまま物事を進めてゆく。
その最たる例を上げるのならば、魔法少女という存在だろう。
少女たちは奇跡を対価にキュゥべえと契約し、魔法少女となり魔女

を戦う宿命を負う。だけれどもキュゥべえは、少女の魂をソウルジェムへと変容させることや、魔法を使い過ぎてソウルジェムに穢れを溜め過ぎると魔法少女が魔女へと変貌を遂げることなどを、あえて契約の時には話さない。

おそらくそれを話せば少女たちが契約を結ぶことを躊躇する事を理解しているのだろう。だから情報を制限する。嘘の言葉を吐くのではなく、言葉の一部を隠すのだ。

「なぜ俺と契約しようと思った？　それに俺は生物学上男に分類されているから、お前の言う最も効率の良い第二次成長期の少女はもとより女ですらないんだぞ」

そうなのだ。これもおかしい。

キュゥべえは別に誰もかれもと契約して人類を蔑ろにしようとしているわけではなく、損害を最小限に抑えるために契約対象を最も効率の良い第二次成長期の少女だけに絞った。

だとするならば、俺と契約するなんて言い出すなんて有り得ない。

何か思惑があるのではないかと疑ってしまう。

『なに、簡単なことさ。君のその身に宿る莫大な魔力は、決してエネルギー回収効率が良いと言えない第二次成長期の少年であるにもかかわらず、魔法少女一人が生み出すエネルギーとなんら遜色のないレベルでエネルギーを生み出すんだ。まぁ、もっとも君の合意を得られなければ、この例外的契約はなかったことになるんだけどね』

キュゥべえの言葉を聞いて考える。

その言葉に偽りはないハズだ。それがキュゥべえにとってのルールだから。だとしたら、隠された言葉はないか？

わからない。それが出された結論だ。

今の俺の状況で、真実を見つけ出す事は出来ない。そう結論付けた。

「俺はお前の言葉を素直にそのまま信じられることが出来ない。だから少し時間をくれないか？」

『もちろんだよ。僕は君を急かすつもりはないよ。でも、できるだけ決断が早いに超したことはないかな』

せっかく起こした上半身を再びベッドへと沈める。
「なぁ。気になったんだけど、なんで『魔法使い』なんだ？　お前と契約した存在は『魔法少女』になるんじゃないのか」
契約のことばかりが頭の中を駆け巡っていて、頭がパンクしそうになったので別のことを考えて気を逸らそうとする。
結局種類は違うが系統は同じ。それぐらいにしか逸らすことに成功していないが。
『君はなぜ、彼女たちが『魔法少女』と呼称されているか知っているかい？』
キュゥべえは嫌な顔一つしないで説明してくれるようだ。感情がないのだから当り前なのかもしれないが。
「それは彼女たちが少女だからじゃないのか？　お前と契約する時の年齢や肉体的な意味でも」
『ふむ。たしかにキリトが言ってる意味でもあるね。でも、それだけじゃないんだよ』
「どういうことだ？」
『この国ではキリトが言うように成長途中の未熟な女を「少女」と呼ぶんだろ？　だったら、やがて浄化しきれなくなったソウルジェムが燃え尽き、「魔女」へと成熟する彼女たちのことは「魔法少女」と呼ぶべきじゃないか』
つまり、魔法少女とはやがて魔女へと成長する存在という意味なのだろう。
『だが君という存在はイレギュラーだ。僕と契約した末に絶望したからと言って、君が魔女になるかどうかなんて僕でも予測しようがない。魔王になるかもしれないし、そもそも君が絶望を撒き散らす存在になるかどうかすら現状では推測することは叶わない。だから君がなるべき存在を「魔法使い」と呼ぶことにしたんだ』
「じゃあ、なんで俺と契約しようとする。そんな不確定要素を受け入れるお前じゃないハズだ」
『やれやれ、キリトは勘違いしてやいないか？　君が願いの果てにどういう存在へと変貌を遂げるかなんて君たち人類の問題じゃないか。

僕は君たちに奇跡を手にする手段を提示するだけで、契約に同意している時点で結果は君たち人類の責任さ』
あくまで対等に。それがキュゥべえが言っていることだ。
どんな奇跡でも叶えてやるから、代わりに宇宙の寿命を延ばすためにその結果から生じるエネルギーを貰っていく。
それが悪いことではないと理解出来る。愚かだったのはホイホイ真実も聞かず簡単に契約する人類の方なのだから。
だけど、納得は出来そうもない。
――どうすりゃいいんだよ、俺は……。
奇跡を手に入れる片道切符は入手した。
だけれども、その線路の先に待ち受けている未来は真っ暗で何も見通すことができない。
『僕はもう行くよ。契約する気になったらいつでも呼んでね』
見慣れた部屋の天井を仰ぎながら思考していると、キュゥべえがそんなこと言ってきた。それに俺は飛び起き、待ったをかける。
「俺との契約のことは誰にも言わないでくれないか？　それが守れないのならば俺は絶対に契約なんてしない」
『わかったよ。それで君が契約してくれる気になってくれるなら安いもんだ』
今度こそ、キュゥべえは俺の部屋から出て行った。
胸中では契約について迷いに迷っている。
俺がこの繰り返しから解き放たれ得たいと願えば、きっとその通りになるだろう。だが、それではほむらが一人になってしまう。
もしくは他の願いを叶えてもらい、俺が魔法使いになってワルプルギスの夜との戦いの戦力になれば良いのだろうか。
他にもいくらでも選択肢が思いついていく。
それだけ、奇跡というものが魅力的なのだ。
だが、もしも契約して俺が絶望した時の未知のリスクを考えると、契約すること自体に尻込みしてしまう。
――もう、どうしたらいいかわかんねぇよ。
結局今日も、母親が起こしに来るまでベッドの上で考え事に耽るの

だった。
どうれば……どうすれば良いんだ。
俺は考え続けた。
朝食を食べながら、中学への道程を歩きながら、授業を聞きながら……ずっと考え続けた。
だけれど、答えは出なかった。
ほむらに相談するのが一番良い選択肢だろうと思う。
俺よりもキュゥべえとの付き合いが長いのは彼女だけであるから、キュゥべえが隠しているかもしれない言葉の意味がわかるかもしれない。
それにもしかしたら、俺がほむらの魔法から脱出できることを喜んでくれるかもしれない。
全ては可能性でしかないが、これが一番の選択肢に俺は思えた。
しかし、俺はほむらに相談することに抵抗感があった。
やっと掴んだ奇跡を望む権利なのに、それを俺が手にしたことを知ったほむらの反応が恐かった。
さっきは良いイメージだけを想像したが、どちらかというと悪いイメージの方が簡単に想像出来る。
それに、俺がこの繰り返しから解き放たれたら、ほむらが独りになってしまう。
孤独は寂しい。悲しい。苦しい。
俺がほむらと出会うまで抱き続けてきた感情。きっと、ほむらも同じ感情を抱き続けてきたはずだ。
だから俺だけ途中で抜けるなんてとてもではないが出来ない。
「どうかしたかしら？」
思考の海に潜り過ぎていたようだ。ほむらの呼びかけで意識を浮上させる。
「ううん。なんでもない」
場所は見滝原中の屋上。時刻は昼飯時。
俺たちは昼休みということで二人きりの屋上で昼飯を食べていた。
手に持ったコンビニで買った食べかけの総菜パンに齧る。

「で、今後はどういう方針で動くんだ？」
ほむらも自分で作ったと思われる小さな弁当箱の中身を突きつつ、返答する。
「あなたが言った通り、巴マミ、美樹さやか、佐倉杏子の全員と協力してワルプルギスの夜に挑むわ」
「うん、まぁそりゃわかってるんだよ。これまでの経験から言って、それが一番成功率高そうだし。ただ問題はどうやって全員そろえるか……なんだよなぁ」
「その方法はあなたに任せる。あなたの存在を知るまで何度か試したことがあるのだけれど、全て失敗。私には無理だと判断したわ」
そんなことを言われてもなぁ……。
確かに、俺が加わってからは全員そろえようとはしてこなかった。それは俺が意図的にそうしてきたのだ。
最大戦力で向かって行って歯が立たなかったら、ほむらが絶望してしまいそうで恐かったからだ。ほむらが絶望してしまえば、時間を巻き戻す存在が消え、俺は繰り返しから解き放たれることになるのだが、今の俺には進んでその選択肢を取ろうとは思えなかった。
終わって欲しいという半面、ずっと続いて欲しいと思っていた。二律背反。
……そうか、俺はほむらと過ごすこの時間が終わって欲しくなかったのか。
だから、キュゥべえとの契約をこんなにも悩み、尻込みしている。
今さらそんなことに気づくなんて、本当に俺はどうすれば良いんだよ。
この俺が経験している状況が物語の中の事だったのならば、終盤も終盤。結末へ向けたラストスパートに入ったところじゃないか。
最後の手段を切るしかなくなったこの状況で、終わりたくないと望んだって、もう立ち止まることは出来ないんだよ。
「そう……だな、ほむらは今まで通り、鹿目に忠告し続けてくれ。あとは全部俺が何とかするから」
キュゥべえに「この時間を永遠に」とでも願うのか？

いや、そんなことは、ほむらの願いに反する。俺は一生懸命なほむらの隣で進み続ける今の状態が好きなのだから、それを邪魔するなんて考えられない。
俺に出来るのは、ほむらの願いを叶えるだけ。
考えた末、結局これしか答えは出なかった。
「あなた一人で大丈夫なの？」
「ああ、大丈夫。ほむらは愚直に鹿目のことを想い続けてやれ」
そんな君の隣にいるのが好きだから。
だけれども、ずっとこの状態に甘んじてはいけない。この状態を積極的に望んではいけない。
だから、全てのことが終わって再び俺たちの時計の針が進み出した時に、ほむらの隣に居続けられるように頑張ろう。
――最高の結末を求めて。
昼飯を食べ終えて、教室に戻る。
ほむらとは彼女の教室の前で別れ、俺は自分の教室へとさっさと戻って俺に与えられた机に着席する。
「向井ィィィィィィィィィィ!!　貴様どういうことだッ！　なんでお前なんかが美人と噂の転校生と一緒に昼飯食ってんだよ！」
耳元で叫ばれてうるさかったので途中から耳を塞いでいたが、それでも友人の声は聞こえてくる声量だった。
耳がキンキンして頭が痛い。
しかも最悪なことに、友人が叫んだせいで教室中の視線が俺たちへと向けられた。
「どういうことだ向井！　オイテメェ、俺に納得出来る説明してくれるんだよな?!」
友人は目尻に涙を溜めながら「向井だけは信じてたのによォォォォ!!」と俺に詰め寄ってきている。
「とりあえず、うるさい。ほむらとは昔の知り合いだったってだけよ」
「な、なんだとぅ?!　下の名前で呼び合う仲だと……」
驚愕の表情を顔に貼り付ける友人。
というか、驚くところはそこなのか。普通は知り合いってところだ

と思うんだけどな。
まぁこれは、俺たちの関係性を訊かれた時の方便なんだが。おそらくほむらも壁数枚離れた教室で同じようなことを言っていることだろう。
「向井様！　わたくしめを噂の転校生に紹介していただけないでしょうか！」
綺麗なお辞儀。腰を９０度まで折り曲げた最敬礼。俺は天皇じゃないんだからそんなことをされても困る。
俺たちを見る視線も友人の女を求めるその姿に呆れていた。
「そんなこと言われても無理だ」
俺たちには時間がない。
こんな友人のために割いてやれる時間なんて、今こうして相手してやってる時間ぐらいだ。
友人はチャイムが鳴るまで「そんな殺生な、殺生な」と俺を説得し続けてきたが、教室に入ってきた担任に怒られることで渋々俺の席から離れて行った。
放課後。友人に掴まり、美少女転校生を紹介しろとウザかったが、一時間ほどでなんとか逃げ出すことに成功した。
あの下駄箱での靴の確保は一生忘れることが無いと思ってしまうほどの攻防だった。まぁ、伊達に魔女とやり合ってきたわけでないので俺が勝ったわけだが。
「なんで初っ端からこんなに時間を無駄にしてんだよ」
友人の飽くなき執着心には驚くしかなかった。
友人から逃れた俺は見慣れたショッピングモールにいた。
これまでの経験則から言って、ここで初めて鹿目や美樹はキュゥべえとの邂逅を果たす。別にそれを止めようとは思わない。そうしたら美樹が魔法少女となる可能性が消えてしまうかもしれないから。
「時間もちょうど良いくらいか」
どうやら友人に拘束されていた時間は無駄ではなかったらしい。携帯で時間を確認するといつもと同じくらいの時間だ。
書店やＣＤショップの目の前を横切り、固く閉ざされた改装中と張

り紙が貼られている扉を開けて、立ち入り禁止のフロアへと足を踏み入れる。
日中であるのにもかかわらず最低限の照明だけの薄暗さ。すでに毛玉のように丸い髭の使い魔は倒されているようで、結界は見当たらなかった。
危険はないと判断し、つかつかと奥へ進んでいく。このフロアの構造は完璧に把握しており迷うことはない。
「こんにちはー」
開けた場所に彼女たちはいた。
魔法少女の衣装を身にまとった巴さんとほむらは睨みあう形で。鹿目は傷ついたキュゥべえを抱きしめながら美樹と事の成り行きを見守っていた。
「こんな時にそんなッ!? 君、危ないから早くこっちに来なさいっ!」
優しい優しい巴さんは、俺を何も知らずに迷い込んだ一般人であると勘違いしたらしい。この構図から考えるに、今回、ほむらは巴さんと敵対することにしたらしい。
「あー、ご心配なく。俺はコチラ側の人間なんで」
そう巴さんに告げてほむらの隣に並ぶ。
なっ、とほむらに言葉を投げかけるが、無視された。こんな巴さんみたいにベテランを相手に睨み合いの状況で、俺に意識を向けることの危険性を考えれば当り前なのだが、釈然としない気持ちになった。
「あら、そうだったの。それは残念なことだわ」
「俺としても残念でなりませんよ。あなたみたいな人とこういう状況になっていることは」
今はほむらの側についている。だがあの時、俺は巴さんの後ろで会話についていけずに困り果てている鹿目や美樹の隣にいた。
何も知らないわけではなかったが、それでもいきなり現れたほむらを心の奥の方で恐れていたのを憶えている。
なのに、全てを知った今では鹿目たちに恐怖を植え付ける側になってしまっている。
「そうだ。自己紹介がまだでしたね。俺の名前は向井キリト。で、

こっちが暁美ほむらって言います。二人とも見滝原中の二年なんで学校で会った時はよろしくお願いしますね」
円滑な話し合いにはまずは自己紹介。ということで、ついでにほむらのことも紹介しておいた。勝手にしてしまった事なのであとで怒られやしないかと、ほむらの顔色を窺ってみたが大丈夫そうである。
これで少しでも警戒心が解ければ良いかなと思ったけれど、駄目だったようだ。出来る限り陽気に話しているつもりなんだけどな。
「私の名前は巴マミ。あなたの言っていることが正しければ、あなたたちと同じ見滝原中の三年生よ」
「あっ、酷いなぁ。見てくださいよ、この学ラン。ちゃんと見滝原中男子の制服なんですよ？」
「ごめんなさいね。現状ではあなたの言っていること信じられないの」
……泣いてなんかない。何度も経験して予想をしていたことだけれども、これは心にグサリと突き刺さるんだよな。
人外であるキュゥべえを除いて俺の言葉を初めて聞いてくれた人は巴さん。そんな人にこうも拒絶の意思を示されることは何とも堪え難い。しかし、ほむらのために堪えなければならない。
「それは残念です」
表情を変えないように、あくまでも陽気に返す。
「それで、君たちの名前は？」
巴さんの後ろに控えていた鹿目と美樹に喋りかける。どうせほむらのことだからまだ名前訊いてないんじゃないかと思ってついでに訊いたが、そう言えば同じクラスだったと思い出して、自分の思慮の無さが露呈する。
だがまぁ、俺が彼女たちの名前を知る機会として考えれば問題ないか。結果オーライである。
「「え……わたし（あたし）たち!?」」
双子と見紛うばかりにシンクロする鹿目と美樹。二人は緊張した面持ちで顔を見合わせて頷き合う。
そして代表して傷ついたキュゥべえを抱える鹿目が口を開く。

「あの、わたし、鹿目まどか。それでこの子が美樹さやかちゃん」
「よろしく」
おどおどしながらも、自己紹介する鹿目。そして美樹は顔を強張らせながらも無愛想に挨拶をしてきた。
「おう、よろしくな」
友好的な関係を築くにはまずは笑顔だと俺は思う。キュゥべえやほむらみたいに無表情では人が寄り付かないと思うんだが。この二人の目的を考えたら疑問が浮かんでくるのは俺だけではないだろう。
「さてさて、一通り自己紹介も終わったし――」
スー、と斜め後ろに移動し、ほむらの両肩を掴む。巴さんと睨みあいの攻防を繰り広げていたほむらは反応できない。
「俺たちは帰ることにしますわ」
ほむらの背をぐいぐいと押し、元来た道を戻ることにする。
「あっ、ちょっと、まだ話がッ!?」
「良いから良いから。俺に任せてくれるんだろう?」
細い身体で抵抗するほむらを無理矢理説得する。
しかし、敵対していたハズの存在から待ったが掛かった。
「あなたたち待ちなさいッ!」
巴さんだ。まったく、せっかく引くというのだから見逃してくれたっていいじゃないか。
仕方ないので、首だけ向ける。
「良いんですか? そちらには何も知らない足手まといが二人。ですが、こちらにいる足手まといは俺一人。どちらに分があるか、巴さんなら理解できると思うんですが」
ここでほむらを戦わせるわけではないが、退散するために少し脅してみる。
「――ッ!?」
効果覿面(てきめん)ってところかな。
さすがは魔女との戦いで長く生き残ってきている魔法少女だ。油断さえなければ状況判断は問題ない。
やはり巴さんには最終決戦の舞台に立ってもらわないと。

「それでは、また会いましょう。ほら、行くよ」
ぐいぐいとほむらの背中を押して改装中のフロアから退散する。
ほむらは最後まで鹿目のことをチラチラ見ていた。
ショッピングモールへと出る前にほむらは変身を解き、見滝原中の制服へと戻る。そしてから、夕焼けの中ショッピングモールの中を歩く。
「本当に、アレで大丈夫なの？」
「ほむらこそ巴さんと対立してどうするつもりだよ。あの人に生きていてもらうためには、ケンカ売ってたら駄目だと思うんだけど」
「あなたこそ、最後にケンカ売っていたじゃない。それはどう言い訳するつもり？」
「ああ、早くあの場から退散したほうが良いからだよ。この後、鹿目たちは巴さんの住んでいるマンションで魔法について教えてもらうんだ」
ホント懐かしいな。あまり良い思い出ではないけれど。
「以前に、似たような経験があるから、今後の展開を予想しやすいように物事を進めようってわけだ。あのままグダグダとあの場に留まるのは得策じゃない」
俺とほむらの考え方には違いがある。
鹿目を救うために今までと違う展開を求めるほむらに対し、俺は展開を予想してその節々に介入することで鹿目を救おうとしている。
些細な違いだが、これは意外と大きい。
ほむらが立ち止まり、俺の顔を見てきた。だから俺も見つめ返す。
長時間見つめ続けていると紫紺の瞳に吸い込まれそうになる。
「考えがあるのなら良いわ。今回、私はあなたに全て任せてるから」
ほむらは俺の返事も待たず、プイッと顔を正面へと向け歩きだした。

第十話

俺の住む見滝原市は、近代的な都市開発によって地方都市化が進められた街だ。新興住宅地には人工的な景観の緑地や小川が整備され、郊外には風力発電施設や水門、工場などが置かれている。

そして病院もまた、都市開発によって最新鋭の医療機器が揃えられている。

だが、そんな医療機器があるにもかかわらず、助けられない病気や怪我は確かに存在するのだ。

上条恭介。交通事故によって自らの夢を諦めなければならなくなった俺の友人。

恭介とは中学に入学した直後からの付き合いだが、かなり親しく、彼が交通事故にあった時は俺も心を痛めた。

将来有望と資質を認められたヴァイオリニストであったのに、たった一つの交通事故で、夢を諦めなければならなくなった。

コンコンッ、と病室の戸を叩く。すでに時間は午後七時だ。面会の残り時間は一時間ほどしかないが中から恭介の返事を待って入室する。

まずベッドの上で起き上がっている恭介が見え、少し視線をズラすと……。

「なんであんたがここに……!?」

「そりゃまぁ、俺は恭介の友達だからな」

何を当然ことを、と恭介に視線を飛ばす。

「そうだよ、さやか。僕とキリトは中学に入学してからの仲でね。というか、君たち知り合いだったの？」

「知り合いってほどのモノじゃない。ただちょっと、昨日会ったばっかりって感じだな」

「へぇ、それは奇妙な廻り合わせだね。どうしたんだい、さやか。そんな顔して？」

明らかに警戒している美樹。

おいおい、そんな表情を恭介の前でするなよ。

「……ごめん、恭介。少し、アイツ借りてくね」
美樹は見舞客用の椅子から立ち上がって、俺の腕を服の上から乱暴に掴み、恭介の病室から強引に連れ出す。
恭介が呆気にとられていたので、俺が「大丈夫」と言い残しておいた。これで、恭介のことは心配ないだろう。
「どこまで行くんだ？」
ズンズンと進んで行く美樹に訊ねる。
さっきから入院患者や白衣の天使たちから、「青春ねぇ」みたいな視線を貰いまくって、非常に居心地が悪い。それもこれも、腕なんて掴んでどこかへ向けて一心不乱に早歩きで進み続ける美樹のせいだ。
ようやく美樹が止まったのはエレベーターの前。扉が開くと、中へ連れ込まれ、ここでようやく拘束が外れた。
美樹が押したのは屋上へと登るボタン。ウィーンと胃の内容物が競り上がる浮遊感が始まる。屋上へ上がるまで、いくら話しかけても終始無言で気まずいことこの上なかった。
「あんたどういうつもり？」
時間が時間なので、照明で照らされた屋上の中ほどまで進み、美樹がこちらへ振り返ってようやく口を開いた。先ほどと同様、俺を警戒している。
「どういうつもり、とは？」
「恭介のことだよ！　なんであんたみたいのが恭介の友達なのよ!?
それにあたしはあんたのこと知らなかったし、まさかあんた魔法を使って……ッ!?」
もう色々と勘違いをしているようだ。
「はぁ……、さっき恭介が言ってただろ。俺と恭介は中学に入学した時からの付き合い。んで、俺もお前のことは知らなかった。ただそれだけだ。それに俺には魔法なんて使えない」
「嘘だッ！」
真実だけしか喋っていないのに、真っ向から否定される。なかなかにツライものである。
本当に、この繰り返しが始まる前までは俺は恭介と美樹が幼馴染

だったなんて知らなかった。何の因果の廻り合わせか、何度も病院に見舞いに来ていたハズなのに、病室でカチ会うこともなかったし、恭介自身が美樹の話をしてきたこともなかった。
「嘘じゃない。真実だ」
　それだけ言って、近くにあったベンチに腰掛ける。物分かりの悪いヤツと話すのは想像以上に疲れるのだ。
「それで、美樹は魔法少女のことは聞いたか？」
　ちょうど良いタイミングだったので、これ幸いと話題を振る。
「一応、一通りは……。でもあんたには関係ないことでしょ」
　関係ないわけではない。むしろ、関係あり過ぎるほどだ。
「それでどう思った？　奇跡も、魔法もこの世に存在すると知って、美樹はどうしたいと思った？」
「そ、それは……あんたには関係ないじゃん！」
「ハハッ、恭介を助けたいとは思わなかったのか？　キュゥべえに願えば、恭介の身体は元通りになるぞ」
　俺は見てきた。
　美樹が願い、そして恭介の指が治ってきた、その光景を。何度も、何度も。
「だけど……それは」
「魔女と戦うのが恐いか？」
「ちがうっ！　ただあたしは、恭介の意思を無視してあたしだけの想いで、勝手にしちゃうのは駄目だと思うんだ」
「美樹は、幼馴染のくせに恭介の想いがわからないのか……？　アイツはどこまでもヴァイオリンが好きなヤツだ。だから感謝こそすれ恨むことは絶対にない」
「そんなことわかってる。だけど……だけど、あたしは恭介を……」
　それ以上、美樹の口から言葉が発せられることはなかった。自分の想いを上手く言葉に出来ないんだろう。
　俺にも憶えがある。想いを伝えられなくて後悔したこともあった。
「迷うなら考えろ。そして答えが出たらそれに向かって一直線に進んで行け。それが俺から言えることだ」

幸い俺には時間だけはあった。だからずっとずっと長い時間の中で考え続け、答えを出した。
だけど、美樹には時間をかけて欲しくない。それが本心だが、彼女のためにそれはあえて言わない。
ポケットから携帯で時間を確認するともうすぐ午後八時。面会時間の終了だ。
「もうこんな時間か。俺は帰るぞ」
携帯を仕舞いつつベンチから立ち上がり、とぼとぼとエレベーターを目指す。
「待って」
「ん？」
呼び止められたので顔だけ向ける。
「あんたは恭介の友達なんだよね？」
「ああ、恭介が友達だと思ってくれているなら友達のハズだ」
訊きたかったのはそれだけらしかったので、さっさとエレベーターに乗り込み病院から出る。
夜道は街灯に照らされ、変なモノを踏んでしまうことも無い。
『感謝するよ、キリト。まさか君が契約の手伝いをしてくれるとはね』
「まー、俺にも事情があるんでね」
いつの間にか、隣を歩いているキュゥべえ。神出鬼没にも程がある。
『その事情について詳しく訊かせてくれると助かるな』
「まー、そのうちお前には話すかもな」
別に隠し立てするほどの事情でもない。
ただ単に、美樹さやかに早いところ契約してもらって、魔法少女としての経験を少しでも積んでもらいたいだけだ。
切り札を切ったのだから、最高の状態でワルプルギスの夜に挑みたい。
今日たまたま、恭介のお見舞いに行ったら美樹がいたから、契約を促したに過ぎない。少々強引過ぎた部分もあったが、まぁ良いだろう。

「そういや、恭介の病室に戻るの忘れたな……」
これは心配をかけたかもしれない。
ここは、美樹が病室に戻って説明してくれていることに期待しておくとしよう。
翌日。今日も今日とて、友人に美少女転校生を紹介しろと詰め寄られながらも、用があるの一点張りで教室から抜け出し昇降口までやって来ると、知ってる顔が二つ並んでいた。
玄関口の右と左にそれぞれ立って、誰かを待っているようだ。二人の間に会話はなく終始無言である。
右は長い黒髪のカチューシャ。左は短い青髪のヘヤピン。どうしてこうなっているのか事情が知りたい。
ギスギスしている雰囲気が流れていたが、美樹が俺のことに気づく。
「あっ――」
「遅いわ。いつまで待たせるつもり？」
何事か言おうとしてきた美樹にほむらが言葉を被せてきた。美樹がほむらを睨む。
あれ、君たちはいつからこんなに仲悪くなったの？　そもそも、今回はそれほど接触してないハズなんだが。
「いや、待ち合わせなんてしてないだろ」
とりあえずツッコム。基本的に別行動。用がある場合は携帯に連絡。それがルールだったハズなのに、いきなりどうしたんだ。
「細かいことを気にする必要はないわ。それじゃあ、行きましょう」
美樹を完全に無視して話を進めるほむら。おいおい、最終的には美樹の協力が必要なんだぞ？　何をイライラしているんだ？
美樹の方もイライラにゲージが存在していたとしたら振り切れているだろうレベルで噴火寸前である。
「待ちなよ。あたしも向井には用があるんだけど」
精一杯の強がりだろう。魔法少女の戦闘能力を知った後では、ほむらを恐れるのは理解出来る。自分と敵対しているかもしれない存在が、自分では敵わない強さを持っていたら恐れるに決まってる。

巴さんみたいな、対抗出来る味方が傍にいてくれれば別だが、今美樹は一人。
魔法少女であるほむらに、その仲間といった俺。美樹が体育会系の女の子だからと言っても、その力は無力に等しい。
「そうだぞほむら。せっかく来てくれたんだ。話しぐらい訊いてやっても良いじゃないか」
そう言うと、ほむらは一瞬嫌そうな顔をしたが、すぐにいつもの無表情へと戻す。
「と言うわけで、場所でも移動して話すか」
これ以上ここにいて、明日、意外と情報通の友人が修羅場とか言いだしてきたら面倒なので、場所を移動する。
場所を近くのファミレスへと移す。
学校帰りの学生達で賑わっており、深刻な話をしても、他へ耳を傾ければ気分はそこまで沈まないだろう。
「向井は昨日言ったよね。恭介の友達だって」
「ああ、言ったぞ。それがどうした？」
俺の隣にはほむらが座り、対面には美樹が座っている。
「それじゃあ、恭介の身体が治ったら嬉しいんだよね」
「当り前だろ。友達なんだから」
美樹が魔法少女として戦う切欠になる願いはいつだって恭介の治癒だった。もっと他に、恭介が美樹のことを好きになるとか、彼女にとって都合の良い願い方はいくらでもあるのにも関わらず、彼女は恭介の指を治し続けた。
それがどれだけスゴイことだか、美樹自身は理解できるだろうか？
俺みたいに選択肢が一つ増えただけで悩んだり、やるべき道を踏み外しそうになったりせずに、いつだって美樹は一つの奇跡を願い続けた。
それが俺には眩しくて、嬉しくて。だから、俺は恭介の隣にいるべきなのは美樹であるべきだと思っている。
「昨日の夜ずっと考え続けたんだ。おかげで、授業中爆睡するハメになっちゃったけど、それでも答えは出たよ」

「それで、美樹は奇跡も魔法もあるって知ってどうしたいんだ？」
答えが出たと言ってきたのでもう一度問う。
「あたしは恭介が好きだ。だから恭介には夢を叶えてもらいたい。身勝手なこんな願いだけど、それでもあたしは恭介が好きだから」
「そうか……」
それで良い。今回の美樹も、俺が知る美樹さやかだった。それを確認できただけでも、応援したくなる。
「そう言えば、なんで俺にそれを話すんだ？　普通なら巴さんに話すべきじゃないのか」
どう考えても、二日前は軽く敵対関係になった感じだったし、あの後絶対に巴さんに俺たちのことを信用するなとか言い含められただろうに。そういう注意が出来るのが巴さんの優しさである。
「いや、だって、向井は恭介の友達って言ってたし……でも、そこ転校生を信用したつもりじゃないけどね」
視線をズラし、ほむらを睨みつける美樹。まるで肉食動物に対して草食動物がビクビクしながら噛みついているようだ。
ほむらの方はと言えば、始めから終始無言で美樹にガン垂れまくっていた。
あの、だからさ……なんで君たちはそんなに仲が悪くなっちゃったわけ？
前回までは、こんなに急に仲悪くならなかったじゃないか。ほむらも自重してくれよ。君がちゃんと美樹と連携とれないと勝てるもんも勝てなくなっちゃうんだぜ？
……みたいなことを、もちろん言葉に出せる度胸を持ち合わせているわけも無く、仕方なく話を進めることにした。
「ははははっ、まぁほむらとは追々仲良くなってくれたら良いけどさ。でも、いくら俺が恭介の友達って言っても、巴さんは危険だから俺たちには近付くなって言ってただろ？」
「うん、たしかに言われた。マミさんはあたしたちのことを心配して言ってくれたんだな、って思ったよ」
だったら何故？　そう、問う前に隣に座ったほむらがようやく口を

開いた。
「巴マミはそんな高尚な人間ではないわ。孤独になることに恐れを抱いている、人一倍臆病で可哀想な存在。それが巴マミという人間よ」
「おい」
言い過ぎだ。
もしもこの会話をキュゥべえに聞かれていた時はどうするつもりだ。アイツと敵対するのは得策じゃないぞ。そう思えるほどに、彼らの知力は凄まじい。
「え？　それはどういう……」
反応して欲しくないのに、美樹は空気を読んでくれない。
「あー、もう。ええっと、つまりアレだ。巴さんは魔法少女として後輩になる可能性のあるお前たちにお節介を焼いているだけだ。そうすれば最低限、お節介を焼いている間は独りではないからな」
独りは寂しい。経験しないと意外とそんなことでもわからないからな。
「それじゃあ、行くか」
「どこに？」
立ち上がる俺に美樹が疑問を口にした。
「病院に決まってるだろ。美樹が決意したんなら、少しでも早く恭介にヴァイオリンを弾かせてやりたいじゃないか」
俺にはこれまで他人を導いてやることしか出来なかった。だけど、奇跡を望む権利を手にした。だと言うのに、結局他人を導いてやることしか出来ない。
それで良いんだと思う。奇跡なんて忘れて、今まで通りにやっていけば。
ほむらはすでに立ち上がり俺の隣でスタンばっている。だからこれで恭介の身体が治ると呆けている美樹に言ってやる。
「ほら、行くぞ」
「うんっ！」
返事をする美樹の表情は、いままでの彼女との付き合いの中で一番の笑顔だった。

そして、一人の少女が戦いの宿命を背負い、一人の少年が再び夢を取り戻す。
何度となく行なわれてきた契約。それが今、病院の屋上で行なわれている。
俺の隣には、それを忌々しそうに見守るほむらがいる。
『覚悟は決まったかい。美樹さやか』
「本当にどんな願いでも叶うんだね……」
『大丈夫。君の願いは間違いなく遂げられる。じゃあ、いいんだね？』
キュゥべえが美樹に近寄り、最後の言質を取る。
「うん」
迷うことなく、美樹は答えた。
すると、彼女の胸元からソウルジェムが生み出される。
『さあ、受け入れるといい。それが君の運命だ』
ここに契約は成された。
契約後、俺たちは恭介の病室を訪れ、彼の指の痺れが取れていることを確認した。あまりの嬉しさで美樹が泣きだし、宥めるのがもの凄く疲れたことを憶えている。
その時に恭介が一緒にいたほむらのことを彼女と勘違いした時はキモが冷えた。そんな関係じゃないと恭介を説得するまで生きた心地がしなかった。
「ふぅ……」
「麦茶よ」
「おっ、さんきゅー」
美樹の邪魔をしては悪いので、早々に病室退散した俺たちは、ほむらの住むアパートへ場所を移していた。
その部屋は上から見れば時計盤のような内装をしており、真っ白でとにかく言葉で説明し難い内装をしている。魔法を使っているようなのだが、まったくよくわからない。どうして外から見るよりも中が広いんだ？　まぁ、きっと魔法の力なんだろうが。
差し出された麦茶を口に含む。
「そういやさ」

「なにかしら？」
　ようやく一息つけたのでかなり気になっていたことを訊くことにした。
「なんであんなにも美樹と険悪な雰囲気になってんだ？　滅茶苦茶ビックリしたんだけど」
　繰り返しになるが、かなり気になっていた。
　ワルプルギスの夜を倒すためには美樹の力が絶対に必要。であるのにも関わらず、ほむらがわざわざケンカ売る必要はないのだ。むしろケンカ売るのは連携の邪魔になる可能性が高い。
「だ、だって、美樹さやかがあまりにも愚かだったから……」
　俺から顔をそむけ、ほむらは小声で呟いた。
「愚か？」
「危うくまどかに契約をさせてしまうところだったのよ」
　つまりアレだ。こういうことらしい。
　昨日、巴さんに連れられ、あの頭にバラが咲いており、背中には蝶の羽の生えている四足歩行の魔女と彼女たちは戦った。もちろん、ほむらは見届けていたらしい。
　そこで美樹が軽率な行動をし、危うく死にかけたそうだ。そして仕方なく傍観していたほむらが助けに入ることになった。この時美樹が死ねば鹿目は契約する。それはわかっていたことだ。
　だからほむらは助けた後、美樹にぐちぐちと色々言い聞かせたそうで、そこから犬猿の仲。もう少し自重はできなかったのかと俺は言いたい。まぁ、鹿目関連のことでほむらが自重するなんて難しいことだけど。
「まあ、アレだ。とりあえずこれからは最低限仲良くしてくれよ。別に仲悪くても良いけど、戦闘訓練とかはしときたいしさ」
　美樹が俺たちの側に来るとは思えない。だけれども、今回の一件で気にかけてはくれることだろう。
　基本的に美樹はほむらと同様で鹿目のことが好きだから、鹿目が巴さんの傍にいる限り、美樹もあちら側にいるだろう。
「わかっているわ、それぐらい。そうじゃないとまどかを助けられな

いもの」
　時々だが、ほむらはこうして年相応の子供みたいな反応をすることがある。いつもは無表情の仮面を被っているのでわかりづらいが、付き合いの長い俺にはなんとなくわかるようになってきた。
「それなら良いんだけど、ホントにわかってるよな？」
「確認してこなくてもちゃんと理解しているから問題ないわ。私の方が付き合い長いのよ」
　そりゃごもっとも。むしろ繰り返しの原因であるほむらの方が付き合い長いのは当たり前だと思うんだけどな。
「ただまぁ、結果から見れば、ほむらと美樹のケンカは意味あったな。まさかこの時点で美樹の契約に漕ぎ着けられるとは思ってもみなかった」
　予想外と言っても良い。おそらく美樹は恭介の怪我を治すためだけではなく、ほむらへの対抗心が後押しになって契約に踏み切ったのだろう。もしも、巴さんに助けられていたら、〝助けられて当り前〟。そんな風に思ってしまうかもしれない。
　麦茶の入ったコップを傾け、全て飲み干してテーブルの上に置く。
「おかわりはいるかしら？」
「いや、いい」
　部屋の主の気配りに断りを入れる。
　ほむらは、「そう」と言ってから、
「それじゃあ、昨日あなたは美樹さやかと何があったの？」
　という爆弾を落としてきた。……別に爆弾でもないか。
　訊かれたので素直に返す。
「ああ、昨日は恭介の見舞いに行ったら美樹が病室にいてな。たぶん、ほむらに助けられて気分が沈んでいたのを恭介と会って無理矢理上げようとしてたんだな。で、色々と言われたから、逆にこっちも色々と言った。そんだけ」
　そして、結果的にそれが契約に結び付いた。
　果たして今回の美樹は真実を知った時、どういう反応をするんだろうか。契約を促した俺を憎むんだろうか。それならそれでも良いん

だけどさ。それでワルプルギスの夜を倒せるならな。
「ん？　どうした？」
ざっくり説明し過ぎたのが悪かったのだろうか、ほむらからの返事がない。
なにやら難しそうな顔をして、何かを考えているようだった。
「なんでもないわ。少しあなたの言葉が本当か考えていただけだから」
「うわぁ、酷いな。俺はほむらには嘘はつかないぞ」
キュゥべえの姿勢を見習って、俺はほむらに嘘を言うことはやめようと思った。嘘をついて彼女を傷つけてしまうのならば、言葉を隠してしまえば良い。
ほむらにとって必要な真実の言葉だけを俺は彼女に言うことにした。それが彼女の笑顔に通じると思って。
「それじゃあ、詳しく説明してもらおうかしら」
「ああ、もう。仕方ないなぁ」
昨日のことを出来るだけ細かくほむらに説明していく。
まったく、メンドクサクないように簡略説明したと言うのに、彼女ときたら……。全てを疑っていたら疲れるだけだぞ。
そして美樹が契約してしばらくの時が経った。
予想通り美樹は鹿目と一緒に巴さんについて、魔法少女としての経験を順調に積んでいっている。巴さんが指導するのであれば、俺としても何ら心配ない。
ただ、一つだけ懸念事項が残った。
それは鹿目のことだ。美樹が契約したことで、鹿目が自分も契約しなければ、と焦り出した。これは予想外の出来事で、早急に対応しなければならないかもしれない。
「そろそろよ」
「りょうかい」
ほむらの声に思考を止め、視線を向けた先のグリーフシードが孵化しそうになっていることを確認する。
ここは恭介が入院していた病院。現在はリハビリのために通院し

てるとかなんとか。その病院の駐輪場の壁にグリーフシードはあった。
普通なら孵化前のグリーフシードは、発見次第すぐに回収するのだが、今はそうもいかない。この状況で回収しても穢れが溜まっている状態なので、これ以上ソウルジェムからの穢れの吸収が出来ない。だからワルプルギスの夜との決戦に備え、一度孵化させ、溜まりに溜まっている穢れを解放してから回収しておきたいところだ。
周囲の空間が歪み始め、魔女の結界の中に取り込まれる。
その時に俺たちが分断されないように、ほむらと俺は手を握っている。若干恥ずかしいが、もしも俺がほむらの近くから離れたらかなりの確率で死んでしまうので必要なことだ。
結界の内部に入り込んだ瞬間に握っていた手が離されてしまったのが、少し残念でならない。
結界の内部は、視界一面に巨大なケーキやらクッキーやらプリンやらが埋め尽くす、ある意味夢の空間ではないだろうか。しかし、だからこそこの空間には異質さしか存在しない。
周囲を確認するとグリーフシードは小さなテーブルの上にあった。それを囲むように背凭れの高い椅子が二つあったので、俺とほむらはそれに座って孵化を待つことにした。
「あとどれぐらいで孵化するかわかるか？」
五分ぐらいで待ち切れなくなったので、専門家のほむらさんに訊く。素人目には今にも孵化しそうとしかわからない。
ほむらは一度ソウルジェムへと視線を落としてから予想をする。
「そうね……あと十分ぐらいといったところかしら。こればかりは焦っても仕方のないことだわ」
「いやだって、もしかしたら巴さんが駆け付けてくるかもしれないじゃん。そうなって、もし巴さんが死ぬことになるのは絶対に避けたいからさ」
そう、今回俺たちが狩ろうとしている魔女は、俺の右上半身をバリバリと喰いやがったアイツだ。
今から生まれるこの魔女は、もしもあの時俺が巴さんを助けなけれ

ば、巴さんを何度も殺してきた凶悪な魔女だ。もちろん、巴さんの油断ということでもあるのだけど。
「そんなに暇であるなら、ソレの感触でも確かめておいたらどうかしら」
「コレ、ねぇ……」
テーブルの上に無造作に置かれている拳銃に視線を落とし、それを手に取り試しとばかりに構えてみる。
「重いな」
これが命を穿つ武器の重みか。
これからは俺も最低限身を護らなくてはいけない。ほむらが少しでも集中出来るように。
手始めに立ち上がって試し撃ちしてみる。
――パンッ
初めて体験する射撃の衝撃に手元から拳銃が吹き飛ぶ。
「――ッ」
よくもまぁ、ほむらの細腕でこんなことが出来るよな……とは思うことはない。魔法少女は身体能力が強化されているから当り前のことだ。
床に落とした拳銃を拾い、椅子に座り直す。
「うん、俺には無理そうだ」
肩が外れそうになったし、とてもではないが俺には使いこなすことが出来そうにもない。やせ我慢しているが、腕が痺れている。
「どうやらそのようね」
先ほどの俺の様子を見て、ほむらが溜め息をつきながら言った。
情けない限りだが、仕方ないことだと割り切る。男として拳銃には憧れてたんだけどな……。
「でも何があるかわからないから一応持っておいて」
「……そうするわ」
少し悩んでから返す。
さて、どうやって保管するかな。親にバレたら大変そうだ。
「キタわ」

そうこうしている間に孵化するとのこと。すぐさま椅子から立ち上がり、俺は後退する。
パキパキィ、と音を立てて、まるでヒヨコが孵化するようにグリーフシードに罅が入り半分に割れ、中から愛くるしいぬいぐるみのような魔女が飛び出してくる。
そして次の瞬間には爆発。こうして魔女はほむらの時間停止と爆弾のコンボで倒された。
「お疲れ」
待ち時間の方が長いとは、なんともやるせないが、わざわざ危ない橋を渡る意味もない。
爆発によって巻き上げられた粉塵が収まるのを待って、グリーフシードを回収してからほむらへ近寄った。
魔女の結界が崩壊する。
すると、目の前に巴さんに連れられた美樹とキュゥべえを抱いた鹿目がいた。
しかも彼女たちは魔女の結界の内部にいたらしく、巴さんと美樹は魔法少女の衣装を身に纏っている。
「早く変身解いた方が良いですよ」
人の気配が少ない病院の駐輪場だからと言って、誰かが来ないと言うわけでもない。今は偶々俺たちだけの姿しかないから良いものの、もしも誰かが来た場合、魔法少女の姿でいたら「コスプレです」という恥ずかしい言い訳をしなくてはいけない。
それがわかっているようで、すぐさま二人は変身を解いて見滝原中の制服へと戻る。ちなみにほむらは魔女の結界が崩壊する前にすでに変身を解いている。
「魔女はあなたたちが倒したようね」
見滝原中の制服に戻った巴さんが喋りかけてきた。
「ええ、今回の獲物はこれまでと訳が違うもの。あなたたちでは殺されるのがオチだったわ」
おいおい、本当のことだとしてもそんな挑発みたいなことを言うなよ。ほら、巴さんが睨んでくるじゃないか。

フォローするために口を挟む。
「なんでしたら、このグリーフシードいります？　良かったら差し上げますよ」
ほむらには一応十分なグリーフシードの蓄えがあるため、これ一つぐらい巴さんにあげたって問題ない。まぁ、魔法少女にとってグリーフシードの貯蔵量は魔法の使用回数とイコールで結ばれるので、多ければ多いほど良いんだけど。
「遠慮しておくわ。あなたたちからの施しは受けたくないの」
巴さんの後ろで美樹がごめんと手を合わせているのが見える。
別に巴さんの態度を気にする訳じゃない。あっ、いや、気にするべきか。このままじゃ、どうやって巴さんをコチラ側に引き込むか悩む結果になってしまう。
巴さんの命を助けた結果こうなってしまったので、プラスマイナスゼロといったところか。
「そうですか。それは残念です」
このグリーフシードで機嫌を直してくれたら最高だったが仕方がない。グリーフシードを俺のポケットへ仕舞いこむ。
「ああ、そうだ。もしも、何もかも嫌になったら俺のところに来てください。そこにいるキュウべえよりはあなたのチカラになれると思いますよ」
『酷いなぁキリト。僕だってみんなのチカラになれるんだよ』
「とのことよ。心配してくれてありがとう」
大きな溜め息を一つ。
「残念です……本当に残念ですよ。行こうかほむら」
「ええ」
巴さんたちに背を向けて俺たちは歩きだす。
とりあえずはほむらのアパートで反省会といったところだろう。

第十一話

昼休み。学校の屋上で俺は本来持ってくることが禁止されている携帯を手に、記憶の片隅からとある番号を引っ張り出して電話をかけていた。

プルルルル……プルルルル。なかなか相手が出ない。

「はぁ……早く出てくんないかな」

空を見上げれば、今日も今日とて穏やかな青空。とてもではないが二週間後、この空が暗雲に覆われるとは思いたくない。

『……』

どうやら電話が繋がったらしい。だが、相手は無言でこちらの様子を窺っているようだ。吐息だけが受話器から漏れ聞こえてくる。

「こんにちは、佐倉杏子さん」

『……誰だテメェ』

「なに、しがない一般人ですよ」

今の状況では佐倉には見滝原にくる理由がなかった。巴さんが亡くなって、ここら一帯の縄張りが空席になるわけでもなし、たまたまフラリと立ち寄っている様子もない。

だったらこちらから招くしかない。

『そのしがない一般人様とやらがアタシに何の用だい？　しょーもないことだったらただじゃタダじゃおかねぇからな』

「おお、恐い恐い。ただちょっと招待状をお届けしたいと思いましてね。と言っても、電話という形ですが」

『招待状……？』

知らない番号からの通話。俺のことを疑うのは当り前のことだ。

「ええ。とても大きな舞台会場があるのですが、あなたにはその舞台を彩る女優の一人になって欲しいんですよ」

その巨体は他の魔女の追随を許さないほどの大きさだ。佐倉を除いた三人だけでは間違った意味で役者不足なのだ。

『アタシは回りくどいのは嫌いだ。ハッキリ言いな』

声からハッキリと殺気立っていることがわかる。

俺って一般人のつもりなのに、なんでこんなことがわかっちゃうんだろうな……。
「ああ、すいません。怒らせるつもりはなかったんですよ。つまりこういうことです。およそ二週間後、ワルプルギスの夜が見滝原市に出現します。俺たちはあなたのチカラをお借りしたい」
『見滝原といえば……マミの奴の縄張りじゃん。手が足りないならそっちに頼みな』
「いえ、巴さんも勘定に入れてもまだ足りないんですよ。他に新人の魔法少女も参戦させて合計3人の魔法少女でワルプルギスの夜に戦いを挑むとしても、それでもまだ勝てそうもない。だから、巴さんに次いでここら一帯で魔法少女としての経験の長い佐倉杏子さんにお願いしているという状況なんです」
俺の言ったことをよく吟味しているのか、しばらく佐倉は無言で考えていたようだが、三十秒ほどで口を開いた。
『信用なんねぇな』
「どうしてです？」
『そもそも何故、お前はワルプルギスの夜が二週間後に出現するとわかる？　それに出現位置まで特定してみてぇじゃねーか。その根拠を提示してもらわない限り、アタシはお前を信用できねぇ』
たしかにもっともな切り返しだ。
キュゥべえを見習ってみたんだけどな。俺程度では相手が冷静な状態なら気づかれるのは無理ないか。
「根拠はそうですね……秘密かな」
『ハァ!?』
受話器の向こうから素っ頓狂な声が聞こえてきた。
「こんなこと言うのも頼む側として情けないんですが、今この状況であなたに根拠を口頭で説明してもとてもではないですけど、理解してくれそうもありません」
俺は未来からきた。
そんなことを電話越しにまだ会ったことのない人から言われても信じる人はそうはいないだろう。

「ですが、これであなたは見滝原に興味が出てきたでしょう？　今回お電話させて頂いたのはそれが目的なんですよ」
『どういうことだよ』
　やや呆れた風な口調だ。
「あなたが少しでも興味を持ってくれて、それが見滝原に来る切っ掛けになってくれればと思いまして。俺たちとしてはあなたという戦力が欲しくて欲しくて堪りませんので、少しでも可能性の底上げをと」
『……アンタ、喰えねぇヤローだな。名前は？』
「向井キリトです。もし見滝原に来た際は俺のところに来て下さると助かります」
『まー、考えておいてやるよ』
　ここでプツリッと通話が切断される。
「はぁ……」
　全身からチカラが抜け、その場にへたり込む。
　想像以上に疲れた。もしもこれで佐倉が見滝原に来てくれなかったら、マジで無駄な労力だ。そうはなって欲しくはないところだが。
　空を見上げて精神の回復を図っていると、ガチャリと屋上と校舎を繋ぐ扉が開く音がした。
　無論のこと、俺の視線が自然と向けられる。
「はぁ、はぁ、はぁ……。やっと見つけたよ、向井君」
　全力疾走した後のように息を荒げた鹿目だ。
　俺は立ち上がって鹿目が落ち着くまで少し待って応対する。
「どうかしたか？」
「向井君は知ってたの？　ソウルジェムが魔法少女の魂だってこと」
「ああ、知ってたよ」
　どうやら真実の一端に辿りついてしまったらしい。幸いなのは魔女のことをまだ知られてないことだろう。
「だったらなんで、さやかちゃんに契約を勧めたのっ！　そのせいでさやかちゃんはあんなに悩んで……」
「なんで、ってそりゃ、美樹が恭介の身体を治したいと望んでたからだ

ぞ」
「いくらさやかちゃんが望んだからって、何の説明なしになんて酷いよっ！」
そんなことを言われてもな……。
全てはお前を助けるため、とか言ったら鹿目はどんな反応をするのだろうか。そんなことしたらほむらに怒られてしまうのですることはないが、鹿目は自分がどれだけ守られているか一度知るべきだ。
「酷いか……まぁ鹿目の視点ではそう映るかもしれないな」
しょせん、人間は自分で見聞きしたことがその人の世界の全てなのだ。
それを否定するのはちょっとばかしメンドクサイ。
「だがな、例え全てを代償にしても好きな人を助けたい。それが愛ってもんじゃないのか。美樹はその果てに魔女と戦う宿命を背負った。人間のままでは、すぐに死んでしまうかもしれないが魂をソウルジェム化させれば死ににくくなる。それはある意味幸せなことじゃないか。その美樹の想いまでを鹿目は否定するのか？」
「……ッ」
口を噤む鹿目。お前はみんなに守られるお姫様らしくしていてくれ。じゃじゃ馬姫じゃ、助けられるものも助けられなくなっちまう。
「まぁ、美樹のことは俺に任せておいてくれ。一応、俺の責任だからな」
じゃーな、と手を振り屋上を後にする。ちょうど昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴り響いた。
てか、この調子じゃ巴さんもヤバいかもしれないな。とりあえず五時間目は遅刻するつもりで巴さんの教室を覗いておくことにする。
チラッと三年生の教室を覗いてみたが巴さんの姿はなかった。
あの人には心が弱いところがある。だからその隙間を埋めてあげなければならない。そして、彼女には俺たちのチカラになってもらわないとな。
と、その前に鹿目とした一方的な約束を守るために美樹の方を何とかしなければならない。

三年生が固まっている階層から自分の教室に戻る時に、ついでに美樹の教室を確認したが、ほむらと視線があって「まどかに何したのよ……？」みたいなことを言われたような気がして速攻で逃げた。鹿目が絡んだ時のほむらは恐いのだ。ちなみに美樹の姿はなかった。

「と言うわけで、放課後遥々美樹の家にやって来ては見たわけだけど……」

どうしようか。女の子の家のチャイムを鳴らす勇気がない。これは大問題だ。

ここまで来ておいてどうしようかと悩んでいると、不意に二階のカーテンが開けられた。

「あっ……」

交差する視線。パジャマを着たあちらさんも俺と同じように唖然としている。

とりあえず手を上げて、コミュニケーションを試みる。すると美樹は窓を開け、「ちょっと待ってて」と言ってきた。

どうやって美樹を呼び出そうかと悩んでいた俺は、これ幸いと待つことにする。

五分ほど経って、パジャマから動きやすそうな格好に着替えた美樹が玄関から出てきた。

「今日休んでたんだってな」

「……うん」

表情は暗い。まぁ、真実とはいつも残酷なものだ。

これまでも、美樹は何度となく真実の前に屈してきた。それを近くで見てきた俺は心苦しくて仕方がなかったのだが、今回の美樹は乗り越えられるだろうか。それでも俺の前に出てきてくれたということはそこまで思い悩んでないと感じる。

「とりあえず公園でも行くか」

このまま立ち話もなんだし、美樹の家にお邪魔させてもらうのも悪いし、近くにあるそこそこ大きな緑豊かで開放感がある公園に向かうことにした。

ベンチの端と端。まだ隣り合って座るほど仲が良いわけでもない

ので、人ひとり座れる隙間を空け座る。
「魔法少女になって後悔しているのか……？」
グダグダと機嫌を窺っていても仕方がない。
「わかんない。でもね、こんなゾンビみたいな身体になっちゃったのは少し後悔してるかな。だって、こんな身体を恭介に抱きしめてなんて言えないよ……」
「それで今日学校を休んだのか。ちっぽけな悩みだな」
その程度のことで悩むなんて元気印の美樹らしくないじゃないか。俺は、美樹がそんな悩みなんて吹き飛ばした未来を知っている。その姿がダブって見えて仕方がない。
「ハハッ……ちっぽけな悩みか。たしかに魔法少女じゃない向井から見たらそう映るかもしれないね。でも、あたしは悩んでるんだ。そりゃ、恭介の身体を治せたのは嬉しいけど、こんなあたしなんかがその隣にいて良いのかなって……」
俯き、ボソボソと言葉を吐き出す美樹。
そんな彼女に俺は言ってやる。
「良いに決まってるじゃん」
「えっ……？」
「美樹が恭介のことを好きなら何の問題もないじゃないか。お前のその首から提げられた魂はその程度のことで曇っちまうのか？」
美樹の首から提げられたソウルジェムはちゃんと穢れをグリーフシードに吸収させているようで綺麗な青色だ。
そうであるなら、あとは美樹の気持ちの問題だ。
「あたしの……魂」
美樹はソウルジェムを掬うように持ち上げ見つめる。
「俺の知り合いにさ、一人の魔法少女がいたんだよ」
いきなり語り出した俺に美樹が視線を上げる。
「そいつはお前と同じように好きな相手の夢が叶うようにキュウべえに願ったんだ。そのくせ用量悪くてさ、その好きな相手になかなか告白できないんだよ」
まぁ俺のせいでもあったんだけどな、と付け加える。

「それで、その子は好きな相手に告白できたの？」
「いや、死んだよ。魔女に戦いを挑む前に、アイツを倒したら告白するなんて言ったのが悪かったんだろうな」
　あの時はそんな気持ちで戦うんじゃなくて、戦う前に告白して幸せな気持ちで戦うべきだったんだ。
　希望や幸福。そういった善の気持ちが魔法少女にチカラを与える。
　もちろん、告白が成功する事前提だけど、あの時告白してたら絶対に一組のカップルが生まれていたと俺は確信している。
「……そんな。それじゃあ、その子は自分の想いを伝えられなかったんだね」
「ああ、だから俺はお前にはアイツみたいになって欲しくないんだよ」
　俺の見通しの甘さのせいで死なせてしまった彼女。贖罪と言うわけではない。今もあの時と同じ気持ちだから。
「そんなわけだから、今度恭介に告ろうぜッ！」
「えっ!?」
　いきなり過ぎたかもしれない。だけど、そんなことは知らない。俺は俺の思った通りに、最善の選択肢だけを選んでいくんだ。
「でも、あたしの身体は――」
「気にするな。その身体は人間のモノだ。人間の身体に魂、この二つがあるんだから、美樹は人間だよ」
　例え魂をソウルジェム化させたとしても、その身体は人間のモノと変わりない。老いもするし怪我もする。
　もっとも、魔法で老化を止めたり怪我を治療したりできるようだが、そこら辺は俺にはよくわからん。
　とにかく、魔法少女だって人間の身体なんだよ。
「告白する場所を決めたり、シナリオだって考えてやっても良い。土壇場になって緊張しても俺が時間を稼いでやる。とにかく俺は美樹に後悔して欲しくないんだよ」
　ついでに遅刻しそうになったら、ほむらに頼んで間に合わせるようにしても良いな。それだけ、俺は美樹と恭介の仲を応援している。
「あはは、向井は意外と強引だったんだね」

「そうだよ。俺は身勝手で我が侭で強引なんだ」
そのせいで、ほむらには色々と背負わせてしまった。
だけど、そんな身勝手なところが美樹の役に立てるなら嬉しい。
「うん。いいよ。あたし、恭介に告白するよ」
その笑顔だ。やはり、美樹には笑顔が似合うよ。
陽が沈み始め、オレンジ色に染まる公園で、俺たちは作戦を立て始めた。
――もう心配いらない。
自らの家に向かって去っていく美樹を見送りながら俺はそう思った。
ただ少し、自分の気持ちに素直になれなかっただけなのだ。自分の身体がもう人間のモノじゃないと思いこんで、そんな自分が恭介の隣にいるのはおかしいって、そういう風に美樹は感じていた。
本当は大好きなのに、抱きしめ合いたいのに、自分の気持ちを殻に閉じ込めようとした。
だけれども、美樹はもう心配いらないのだ。
自分の気持ちに素直になって想いを告げると言った。あの笑顔に心配なんてしようがない。
「だとすると、あとはあの人だけか」
すっかり陽が落ちて街灯の光が辺りを照らしている。早く帰らないと母親に怒られてしまうが、今となってはそれさえも慣れたモノだ。繰り返すようになって、門限破った数は百を軽く超えているんだから。
そんなわけで、とあるデザイン性の高いマンションにやってきた。
エレベーターの胃の内容物が競り上がるような気持ち悪い感覚に堪えて、目的の部屋の前に着いてチャイムを鳴らす。
「こんにちは」
誰かが出たはずなのに反応がなかったから挨拶をしておくと、
「……少し待っててね」とか細い声が聞こえてきた。
そしてガチャリと鍵が開けられ、部屋の住人が姿を現す。
「もてなしはできないけど、入って」

「お邪魔します」
俺を部屋に案内する巴さんの表情は暗い。
いつも通りおしゃれな内装。だけれども、今日はどこか寂しく感じる。
俺たちは向かい合うように絨毯の上に腰を降ろした。
「あなたたちは知ってたのね」
「ええ」
「知っていたのに、美樹さんを巻き込んだ」
「ええ、必要なことでしたので」
美樹は単純な火力としては期待できないが、彼女の治癒魔法は味方の怪我を治療したり、美樹自らが壁役となって他の魔法少女の大技の準備のための時間稼ぎに最適だ。
「必要？」
「およそ二週間後、この見滝原にワルプルギスの夜が襲来します。俺とほむらの目的はヤツを倒す事だけなんです」
「そう、ワルプルギスの夜が……」
巴さんは窓の外の暗闇を見やる。どこか心ここにあらずと言った様子だ。
「そんなにご自身の身体のことが気がかりですか？」
その問いに巴さんは首を振る。
「ううん、そういうわけではないの。あの時私は死ぬはずだったのに、こうしてキュゥべえと契約を結んだことで生き長らえている。だから私は魔法少女になってしまったことを感謝しても後悔はしていないわ」
何度も巴さんの口から聞いた、彼女が魔法少女になることになったきっかけの交通事故を思い出す。
楽しいはずの家族揃ってのディナーに向かうドライブ。それなのに生き残ったのはキュゥべえと契約した巴さんだけ。
きっと、あんなことを言っていても巴さんは心の底で後悔しているだろう。なぜあの時、自分の身だけではなく、家族全員が助かることを願わなかったのだろう、と。そのせいで他人とコミュニケーション

を取ることを恐れて独りになった。
「そうですか。それは良かった」
　良いわけない。だが、俺の考えをそのまま伝えても巴さんの精神は壊れてしまう。それだけ彼女の心は脆かった。
「でもね、それと同時に私は恐れているの」
「何をですか？」
　続けられたその言葉に俺は疑問を投げかける。
「今まで長いこと魔法少女として生きてきたけど、ソウルジェムが魂の結晶化したモノだったって昨日初めて知ったの。だからまだまだ私の知らないことがありそうで、何もかもが恐くなった。本当に私たちは生きていていいのかなって」
「ありますよ。巴さんが知らない真実なんて沢山あります。知りたいですか？」
　おそらく俺とほむらは人類の仲で一番インキュベーターのことを知っているだろう。俺みたいな冴えない男子中学生がＮＡＳＡみたいな国家機関よりも宇宙の真実に近いなんて笑えない冗談だ。
「遠慮しておくわ。君の表情を窺う限りでは気持ちの良い話ってわけでもなさそうだし」
　あなたの精神がほぼ確実に壊れます。はい。
　そんなことは言えるはずもない。
「なんか今なら、あの時の君の言葉が理解できそうだわ」
「ん？　ああ、あの時のキュゥべえよりも俺の方が巴さんのチカラになれるってヤツですか」
　一瞬、何のことかわからなかったが、今回は巴さんとの接点が少なかったのですぐに思い出せた。
「当り前じゃないですか。俺と巴さんは人間なんですから、キュゥべえなんかよりもわかり合えるんですよ」
　だが、キュゥべえは悪ではない。
　俺たち人類には到底理解出来ないことかもしれないが、アイツらにもアイツらなりの正義があるのだ。俺はそれを否定してはいけないと思う。

だけど、ほむらは敵意満々なんだけどさ。まぁ、モノの捉え方は人それぞれだし、些末な問題でしかない。
「そうね……うん、私は人間なのよね」
「ええ、巴さんは人間ですよ。そこでお願いがあるんですけど……」
うんうんと頷く巴さんを見てこれはいけると思ったので話を切り出そうとする。
「ワルプルギスの夜のことね。それなら私も手伝うわ」
「おお、話が早くて助かりますよ」
「たしか……向井君だったかしら？」
「向井キリトです。どうぞお好きに呼んで下さい」
「改めて自己紹介するわ。巴マミよ。よろしくね、向井君」
互いに手を取り合い握手する。
これでも残りは佐倉が見滝原に来てくれるかだよな。まぁ、それはアイツの気まぐれに賭けるしかない。ダメだったら次に賭ければ良いことだし。
「ところで、もう九時だけど門限はないのかしら？」
巴さんに言われ、壁時計に視線を動かすと、巴さんのいっていた通り午後九時。これは完全に夕飯抜きが確定された。
「あはは……、まぁなんとか大丈夫そうです」
帰りに自腹でコンビニ弁当を買えば問題ない。というわけで、俺たちにとって良い話を持ち帰ることにした。
というか、話がトントン上手い方向に進み続けている気がする。
とくに今まで以上に頑張ったわけでもないし、むしろ今までよりも頑張ってないかもしれない。なのにどうしてこんなに状況が良い方良い方に進んでいくのだろうか。
これは一度気を引き締めておかないと危ないかもしれない。

＊＊＊＊＊

「ハァァァッッ!!」
美樹は手に握るサーベルで自らに迫りくるツタを斬り裂く。しか

し斬った傍から別のツタがやって来てキリがない。
今美樹が戦っているのは、髪の毛がツタになっているという異形な姿の人型の魔女だ。まずは基礎的な経験を学ぶためにこうして一人で魔女と戦わせている。
「ほら、気を抜いては駄目よ」
ツタに拘束されそうになった美樹を助けるようにマスケット銃から弾丸が放たれる。基本的に美樹の教育は巴さんが担当することになっている。
それもこれも、ほむらと美樹の仲が微妙に悪いことが関係している。
少しは仲が縮まったハズなんだけどな……。
思い出すのは二日前。美樹が恭介に一世一代の告白をした日のことだ。
ガチガチに緊張した美樹を見かねたほむらが、自分の想いを伝えることの大切さとやらを彼女に説いた。さすがは何度も経験している猛者は違うな。
で、あるハズなのに、二人の仲は一向に縮まってくれない。その原因はほむらのコミュニケーション能力の欠如と言っても良いほどの不器用さなのは間違いない。
「はぁ……」
戦っている美樹から視線を隣に立つほむらへと向ける。
「なにかしら？」
「なんでもないよ」
本当に不器用すぎだろ。もしも俺がいなければ、他の魔法少女三人をそろえることなんて出来そうにないぐらいに。
「なにか、失礼なこと考えているわね」
突きつけられる拳銃。
おお、恐いな。例え殺す気がなかったとしても、そんな物を向けられたら、ひ弱な一般人である俺には恐怖の感情しか湧いてこないぞ。
「まぁ、気にするな。別にほむらの信念をバカにしているわけじゃないよ」

「なら、いいわ」
拳銃が下げられたことに一先ず安心する。
「で、ほむらから見て、今回の美樹はどうだ？」
視線を再び戦場へと戻し、歴代の美樹を知るほむらに意見を乞う。
「そうね……間違いなく今までの彼女よりはチカラを手にしているわ。それだけ彼女の心は希望に満ち溢れているのね」
そうか、それなら良かった。
「それは僥倖だな」
「ええ。あなたのおかげよ」
「俺の……？」
「あなたがいなければ、ここまでの戦力を集めることはできなかった。感謝しているわ」
その言葉に思わず俺は苦笑する。
「オイオイ、まだ佐倉が来てないぞ。それなのに感謝されても困るんだが」
俺たちの目標は四人の魔法少女でワルプルギスの夜に立ち向かうこと。そこからがスタートだが、便宜上これを目標としているハズだ。
なのに、何故ほむらはそんなことを言うのだろうか。
「心配いらないわ――」
ほむらのその言葉と同時に切り絵のような魔女の結界内に一迅の風が走った。
「ほら、佐倉杏子ならあそこにいるじゃない」
先ほどまで美樹が苦戦していた魔女をいとも容易く槍で斬り刻む、紅いチャイナ服を西洋風にしたような服装を赤髪の少女の姿があった。
美樹は唖然とし、巴さんは知り合いなので若干驚きながらもその姿を認めた。
佐倉は槍を担ぐと俺の方へと身体を向け言う。
「アタシがわざわざ来てやったのに、話が違うじゃンか」
「何がですか？」

「コイツだよコイツ」
槍の穂先で美樹を指す。
「なんで、こんな駆けだしのヒヨっ子みたいなヤツと、一緒に戦わなくちゃいけないわけ？」
「ど、どういうことよ！」
美樹が佐倉に噛みつく。まぁ、あそこまで言われたら当り前だけど。
なんとか巴さんが美樹を止めることで話が再開する。
「そうですかぁ？　ちゃんと新人の魔法少女もいるって伝えたと思うんですけどね」
「たしかに聞いた憶えはあるが、ここまでヒデェとは聞いてねーぞ。仮にもワルプルギスの夜に挑むンだろ？　こんなのがいたら、逆に足手まといになっちまいやしねーか？」
「ほら、そこはベテランの佐倉さんが美樹のことを指導してくれたら良いじゃないですか。それなら足手まといにならないでしょう？」
「……ったく、そーいう腹積もりかっつーの」
俺が佐倉と交渉事の真似ごとをしていると、巴さんが会話に割って入ってくる。
「久しぶりね、佐倉さん。もしかして、あなたも今度の戦いに参加するのかしら？」
「あン？　なんだ、何も話してなかったのか」
「佐倉さんが本当に見滝原に来てくれるかすら未定でしたからね。まぁ、そういう事なので、巴さんよろしくお願いします」
「つーわけだ。短い間だけど、共闘といこうぜ」
「そうね。噂に聞くワルプルギスの夜は強力な存在だそうだしね。よろしくね、佐倉さん」
巴さんと佐倉が握手を交わし、共闘の意を表す。よかったよかった。過去に嫌な別れ方をしていたはずだが、なんとかなったようである。
「え？　ちょ、もしかしてあたし置いてきぼり!?」
そんな美樹の叫びが聞こえるが、佐倉が味方に加わってくれたこと

は本当に良かった事なのだ。
いままで成しえなかった異業とも言える今回の成果。あとは個々の美樹のレベルアップと、連携の練習のみだ。
「……私もいるのだけれど」
うん、そうだ。俺には何も聞こえなかったんだ。
俺の隣にはどこか寂しそうなほむらがいるわけがない。そうに決まっている。
そんなこんなあり、最後のピースがそろった。
それからは佐倉の美樹強化特訓という名の扱きが行なわれ、美樹も普通の魔女なら苦戦することもなく倒せるまでに成長した。
ところどころ惚気てくるものだからその度に佐倉がキレ、言い合いになってケンカが始まるが、それもまた美樹のレベルアップの一環となっている。それほどまでに愛のチカラは偉大だ。なんせ、美樹がギリギリとは言え、佐倉とまともにやり合えるぐらい善戦出来ているのだから。
連携の方も割と何とかなっている。
基本的には近接武器の二人が前衛となり使い魔を蹴散らし、後衛の残りの二人が最大火力で攻撃を加える。
一応そのつもりで連携を練習しているが、それだけでは予測不能の事態になった時に困るので他の連携も色々と試している。
さて、俺たちの努力は報われてくれるんだろうか……？

第十二話

努力はしてきた。そして、見合うだけの実力や連携を魔法少女たちは身についたことだろう。

そして運も味方に出来た。これが一番大きかったんじゃないかと俺は感じている。

全てが俺の思惑通りにはいかなかったものの、状況があれよあれよと良い方向に好転していった。それだけに恐かった。これは運命が俺とほむらに諦めろと囁いているんじゃないかと。

だから俺は、最後の不安を取り除くべく行動する。

――鹿目さんは他人のことをわかってあげられる優しい子よ。

黄色の魔法少女は言った。

うん、知っていますよ。今まで俺が見てきた鹿目まどかという少女は、いつだって自分ではない誰かのために一生懸命頑張っていた。

――まどかはね、ホントにドジだけど、それに負けないように努力できる子なんだ。

青色の魔法少女は言った。

それも知っている。そんな彼女だから、俺とほむらは苦労してまで救うために行動している。だけど、そんな彼女でなければ、助けようとは思わなかっただろう。

――鹿目まどか？　まー、アタシから見たらただのアマちゃんだねぇ。

赤色の魔法少女は言った。

この時間軸では、鹿目と彼女の関係は薄い。だからこういう言葉になるのは必然であろう。

――まどかを頼むわ。

同じ時間を歩み続けた魔法少女は言った。

短い言葉。だけれども、その言葉には今までの想いが凝縮されている。今回失敗したら、きっとほむらは壊れてしまうんじゃないかと思う。

＊＊＊＊＊

雲で覆われた一面の灰色の空。視界いっぱいのその光景が、ワルプルギスの夜が見滝原市に襲来することを知らせてくれている。

準備は万全。もうやれる事がないぐらい色々と下準備を終えていた。

その過程で、美樹と佐倉との衝突などがあったのは良い思い出かもしれない。なんせ、これが最後の時間軸になるのだから、それぐらいあってみんなが仲良くなっていた方が良いに決まっている。

「どこ行くんだ？」

避難場所として開放されている市立体育館から見知った顔の少女が飛び出してきた。どこか決意したような雰囲気を纏っている。

「……向井君。お願いだからそこを通して」

「それだけは出来ないよ、鹿目。お前がここを通って戦場へと進ませるわけにはいかない」

桃色の二房の髪が吹き荒れる風に揺れる。表情は真剣そのものだ。

いつだって彼女は、他人のために己を犠牲にしようとする。俺を助けたあの時だって……。

だからここを通すわけにはいかない。

「どうして……どうしてなの向井君！　このままじゃ、みんな死んじゃうっ！」

「そうならないように、みんな努力はしてきた。だから無力な俺たちは祈りながら待っているしかないんだよ」

「キュゥべえから訊いたよ」

「何を？」

「今度の魔女は四人がチカラを合わせても勝てるかどうかもわからないぐらいに強い魔女だってっ！」

俺は視線を鹿目の後方へとズラし、キュゥべえを見やる。

余計なことを言ってくれやがって、それほどまでに鹿目の感情エネルギーが欲しいのか。

それならば仕方ない。

「たしかに、俺自身も勝てるかどうか不安だよ」
俺の弱気ともとれる発言に鹿目の表情に一筋の光が差す。
「だったら、わたしも契約して魔法少女になって戦うっ！　それなら勝てるってキュゥべえは言ってたよ！」
まぁ、勝てるだろうよ。何度か、鹿目が魔法少女となってワルプルギスの夜を一撃で倒すところを俺は見ている。
「それだけは駄目だ」
鹿目まどかは日常の住人でなければならない。その対価としてほむらが非日常の中で生きると決意したのだから。
その決意を踏みにじるようなことは、例え鹿目だって許さない。俺にとって優先度が高いのはあくまでほむらなんだ。ほむらが納得しない限り、俺が鹿目に従うことはない。
「どうして!?　そうしないと見滝原に住む人たちが死んじゃうかもしれないんだよ！　向井君にだって家族がいるならわかるよね!?」
「家族ね……。最近は怒られてばっかりだったよ」
その原因は言わずもがな帰宅時間が遅いと言う一点のみだけど。
「だけどな……。俺とほむらには家族や見滝原に住まう人々よりも大切なことがあるんだよ」
「大切なこと……？」
「まあな」
鹿目まどかの運命を覆す。俺たちにとっては大勢の人間の命より、お前の命の方が大切なんだ。
「まぁ、いいか。そうだな、お前の目で見届けろよ。契約するかはそれからでも遅くないだろ？」
もしも鹿目が契約することになったら、俺が絶対に止めるだろうが、こうでも言わないと鹿目が納得してくれそうにもなかった。
それだけ鹿目は頑固者だということなんだけどな。
「え？　う、うん……」
いきなり意見を変えた俺に驚きながらも鹿目は頷く。
「とっておきの観覧席にご招待ってな」
というわけで、鹿目を戦いの現場を一望できるビルの屋上へと案内

する。
　そこからはサーベルを振るう美樹、槍で薙ぐ佐倉、マスケット銃を発砲する巴さん、そしてそれらの後方からグレネードランチャーを構えるほむらの姿がよく見えた。
　いつの間にか最終決戦は始まっていたらしい。
　隣に立つ鹿目が唾を飲み込む音が聞こえた。
「本当にアレに介入できると思っているのか？」
「うん。わたしならどんな願い事でも叶えられるってキュゥべえが言ってた」
「おかしいな。キュゥべえに騙されたとこの前わめいてたのは誰だったかな？」
「……だけど、みんなが戦ってるのにわたしだけが何にもしないなんて堪えられない」
　大人しくお姫様でいてくれれば、それが一番良いんだけどな。
　戦場へと視線を戻せば、戦況は押されつつもなんとか均衡を保っているようだ。だがそれもいつまで持つかはわからない。
　本当は解消してくれればいいのだけど、これは消耗戦になりそうだ。
「ほら見てみろ。鹿目がいなくてもなんとかなってるだろ。もう少し様子を見ても大丈夫じゃないか？」
　今はそれが精一杯の時間稼ぎ。
　本当なら鹿目は俺の言葉なんて耳を貸さずにキュゥべえと契約を結んでしまえば良い。もちろん、それを簡単に許すつもりはないけど。
　これは俺も覚悟を決めないといけないかもしれない。
　全ては順調だった。
　いくら超弩級魔女ワルプルギスの夜であろうとも、その身に宿る魔力には限界が存在しているハズである。たとえ一撃が必殺に及ばない魔法少女たちの攻撃でも、ワルプルギスの夜の身体を削り、その傷を治癒するためにワルプルギスの夜は魔力を消費する。
　先ほどから行なわれている戦闘はそういったものだ。

いつ終わるかもわからない精神状態の中、手持ちのグリーフシードが消耗されていく恐怖と闘うしかない。
右手をズボンのポケットに突っ込む。
「……頼むから、コイツを使わなくちゃいけない状況にはならないでくれよ」
ボソッと口の中で呟く。鹿目には気づかれていないようだ。ただ、キュゥべえには気付かれたらしく、ヤツと視線が交差した。
本当に嫌な時に現れてくれるよな。まぁ、干渉はしてこないようだが。
「あっ、駄目!? そ、そんな……」
鹿目が屋上のフェンスに縋りつくように叫ぶ。俺も戦場へと視線を戻すと、どうやら美樹がポカをやらかしたらしい。
だがすぐさま佐倉がカバーに入り、事無き得ている。
鹿目のホッとした溜め息が聴こえた。
「わたし、やっぱり戦うよっ！」
俺の方に振り返って、鹿目がそんなことをのたまった。
「まだまだだろ。戦いは始まったばかりだ」
「でも、向井君だって今の見たでしょ!?」
今のとは美樹がやらかしたポカのことだろう。だからあくまでも非情に返す。
「あんなのは予想通りだ。あのメンバーの中で一番経験の足りない美樹だ。そんなことは織り込み済み。それに、それを予想しているからあそこで佐倉がカバーに入っていけたんだ」
現在は美樹も態勢を整えて戦いに参加しているから大丈夫のハズだし。
「そうなんだけど……だけど、わたしがあそこに加われば状況は好転するんだよね？」
「まぁ、キュゥべえによるとそうらしいな。俺からしたら新人の魔法少女があの場に行っても足手まといにしかならんと思ってるけど」
嘘だ。鹿目が契約して魔法少女になった次の瞬間、ワルプルギスの夜は鹿目の一撃の下に消滅することになるだろう。

だけど、それではほむらの努力が報われない。
『酷いなぁ、キリト。僕が他人を騙す行為に及んでいるとでもいうのかい？』
「いや、お前が嘘をついている認識がないだけで、その実は勝てないかもしれないじゃないか」
『たしかにその通りかもしれないね。僕から言えるのはワルプルギスの夜は鹿目まどかが魔法少女にならない限り倒せないという事実だけだよ。どうするまどか、僕と契約するかい？』
おそらくキュゥべえは俺たちの正体に気づいているんだろう。それでも、いつもと変わらない行動を取っている。
「えっ、あの……わたしは……」
俺が言った揺さぶりが効いているらしく、鹿目は言い淀む。
そうだ。悩んで悩んで、結果的に契約なんて止めてしまえ。
そのためには魔法少女たちが頑張っていないといけないんだけど

突如、ビルの屋上に何かが墜落したような轟音が鳴り響いた。立ち込める砂けむり、そしてその中心に居たのはほむらだった。
それに続くように周りのビルに他の三人の魔法少女が次々と打ち付けられる。
「ほむらちゃんっ！」
鹿目がほむらの元へと駆け付け、その身を抱き起こしている。
俺はというと、ワルプルギスの夜に視線を向けていた。
ウフフフ……という貴婦人のような笑い声。何度と聞いてきたワルプルギスの夜の笑い声。
今はそれが憎くてしょうがない。
「どうして……どうしてこんなことになっているッ!?」
叫ぶしかない。あれだけの下準備をして、さっきまで善戦していたのにどうしていきなりこんなことになるんだ!?
俺たちがワルプルギスの夜のことを測り違えていたとでもいうのか。それぐらいしか、こうなった原因が浮かんでこなかった。
『キリト。君に確認したいことがある』

俺の疑問を解消してくれたのはキュゥべえだった。
『君と暁美ほむらは時間遡行者だね？　数多の平行世界を横断し、君たちが望む結末を求めてこの一ヶ月を繰り返してきた』
「それがどうした。そんなことお前は確認しなくても確信してるんだろうが」
おそらく俺のせいでそのことがキュゥべえにバレてしまったのだろうが、今はそれどころではない。
『もしかして、繰り返すたびにワルプルギスの夜は強力な魔女になっていったんじゃないのか？』
言われてみて初めてその事実に気づく。
初めて俺がワルプルギスの夜と対峙した時、ほむら一人でもなんとか戦えていた。だが、今回は四人で戦っているのだ。それなのにこの状況になってしまっている。
早く決断しなければならなかった。
頭から血を流すほむらのことをそっと床に寝かせてこちらに振り向く鹿目の姿が目に映る。
「待って……駄目よ、まどかぁ……。あなたはキュゥべえと契約してはいけないのッ!?」
必死に身体を起こそうとしながらほむらは叫ぶが、鹿目は苦笑するばかりだ。
「ごめんね、ほむらちゃん。でも、戦えるのはわたししか残ってないんだよ。わたししか街のみんなを守ることができない。だから……わたしが魔法少女にならなくちゃ」
おい、待て、止めろ……止めてくれ。
これ以上、ほむらの心を傷つけないでくれ。
ガラスが割れる音がした。きっと、幻聴に違いないが、確かに俺の耳には聴こえたんだ。
「待てよ、鹿目。頼むから待ってくれ」
「どうして？　向井君は言ったよね、見届けてからでも遅くはないって。たぶん、これ以上見届けていたら手遅れになっちゃうよ」
そんなこと言われなくてもわかってる。

「そうだな。だけど、鹿目が契約する必要はない」
だから俺は……
「契約するのは俺だ！　俺の願いを叶えろ、インキュベーター!!!」
ほむらが笑顔になれるように犠牲にならなければならない。
「え？　そ、それはどういう……」
俺の宣言に鹿目が戸惑うのが視線を向けずともわかった。
それも当り前のことだ。俺は少年であり、少女ではない。だから本来、キュゥべえと契約できるハズがない。
だけれども、この俺は契約する権利を持っていた。
『それは本気かい？　僕としては全然構わないんだけど、キリトが契約して魔法使いになったとしてもワルプルギスの夜相手じゃ負けるのが目に見えているよ』
そんなことはわかっている。いくら莫大な魔力を身に宿している俺だとしても、感情のエネルギー変換効率が悪い第二次成長期の少年である以上、契約して魔法使いになったとしても、普通の魔法少女一人分の戦力にしかならないだろう。
だけど、魔法少女は条理を覆す存在だ。それならば同じ過程を踏んで契約した魔法使いに適用されないはずはない。
「だが、それは俺の願いによって変わってくるんじゃないのか？　魔法少女の強さはその身に宿る魔力の総量だけじゃなく、契約の際に願った希望により生まれた固有魔法によっても変わってくる」
美樹が恭介の身体を治すことを願って強力な治癒魔法を獲得したように、願いによってはワルプルギスの夜に俺が勝つことのできる固有魔法を手にする可能性がある。
『確かにキリトの言う通りかもしれないね。だけど君に運命を変えるほど願いをすることができるのかい？　そんな雲を掴むような可能性に縋るより、僕はまどかのチカラに頼った方が建設的だと思うな』
「そうだよ！　なんで向井君が契約できるのかとか、よくわからないことがたくさんあるけど、わたしが戦うからっ！　それで街のみんなを守れるならわたしは良いんだよ？」
こんな時にまで鹿目に契約させるように誘導するか。

鹿目の顔を窺うと真剣そのもの。あの表情は自らを犠牲にしたとしても他人を助けようとする顔だ。
「良くないよ。鹿目……お前が魔法少女になったら悲しむ人がいるんだよ。なぁ、ほむら」
「ほむらちゃん……？」
ここまで、何度も何十回も何百回も、いや、もっとそれ以上かもしれない。鹿目のためにこの一ヶ月を繰り返し続けてきたのはほむらなんだ。
詳しい事情を俺は知らない。だけれども、その想いが本物だと知っている。
「ええ、私が……悲しむわ」
ほむらは必死に身体を起こす。
「平行世界のあなたと約束したの。残酷な運命からあなたを助けるって……何度繰り返してもあなたを救ってみせるって」
その瞳から涙を零しながら言葉を続ける。
「今まで騙してごめんね。……私たちはまどかを救うために未来から来たんだよ」
言いきって、ほむらの身体からチカラが抜けたようで倒れそうになるが、鹿目が駆け寄ってほむらの身体を支えた。
もうほむらの身体にはチカラが残されていないのかもしれない。ならば急がないといけない。
「キュゥべえ……いや、インキュベーター。お前たちの目的は宇宙の寿命の延ばすためのエネルギー回収なんだろ？　そのために最高の魔法少女になれる素質を持った存在と契約したいわけだ」
『いきなり何を言っているんだい？』
「じゃあ、例えばの話だ。もしも俺の魔力がもっとも効率良くエネルギー変換できたとしたらどうだ？」
『鹿目まどかが生み出すエネルギーには及ばないかもしれないけど、たしかに魅力的な話だね。だがそれはあくまでも仮定の話でしかないよ。君が少年である以上……いや、まさかキリトの願いと言うのは!?』

俺の願いは最初からたった一つしかない。
この繰り返しから解き放たれること。色々と回り道をしてきたが、ようやくみんなが笑って終われる道を見つけた。
「そうだ。俺が最高の魔法少女を生み出せば、お前たちインキュベーターは必要以上の人類への搾取を防ぐために鹿目まどかに手を出せなくなる」
だから希(ねが)う。
「この身に宿る全ての魔力を暁美ほむらに譲渡したい。それが俺の答えだッ！」
これでやっと終われる。きっとほむらならやってくれるハズだ。
『君はそれがどういう願いなのか理解しているのか!? 魔力を全て譲渡するということは、君が感情を失うということと同義だ！』
「ああ、わかってるよ。良くて、廃人か植物人間。悪かったら、きっと死ぬんだろうな」
後悔はしない。
ほむらと過ごし続けたこの一ヶ月は楽しかった。きっとこの思い出は神様とやらがくれた最後の手土産なのかもしれない。
身体から何かが抜け出ていくような喪失感を感じる。この抜け出ていくのが魔力なのか。ここまできて初めて魔力というものを実感できた。
「あなたはなんていうことを!?」
「ん？ ほむらか」
俺から譲渡されている魔力でボロボロだった身体を治したのだろう。俺の胸倉を掴むように詰め寄ってきた。
「これで、お前は鹿目を護るチカラを手にし、俺は繰り返しから解き放たれる。そして、鹿目が契約する心配もなくなった。なんともまぁ、最高の結末じゃないか」
「……冗談じゃないわ。これが……あなたの望んだ結末だって言うの？ あなたは生きたくはないのっ!?」
「おいおい、泣くなよ。ほむらに涙は似合わないぞ」
別に死にたいわけではない。だけど、これが最良の選択だと思った

んだよ。
「鹿目。ほむらのことを頼んだぞ」
「……うん」
何故か鹿目まで涙を流していた。
ああ、最後までほむらが鹿目のことを救おうとした理由がわからなかったな。
「ほれ」
ズボンの右ポケットからとあるモノを取り出し、ほむらの目の前に出す。
「グリーフシード……？」
「そうだ。これからほむらにはワルプルギスの夜を救ってもらわないといけないからな。お前の時間操作でワルプルギスの夜の時間を巻き戻してやれ。そして消耗した魔力をコイツで回復ってな」
ほむらの時間操作には対象の時間を巻き戻すという能力はない。時間を停止させるか、あの始まりの日に時間を戻すかの二つのチカラだけだ。
だけど、今のほむらの身には俺の魔力が流れ込んでいる。俺の願いによって譲渡された魔力は、きっと俺の思惑を叶えてくれるだろう。
俺の中の魔力がほとんどなくなってきたようで足元がふらついてきた。
ほむらを抱きしめることでなんとか誤魔化す。
「ありがとう。ほむらと過ごした日々は楽しかったよ」
鹿目まどかを救うために試行錯誤し続けた日々。正確ではないがおそらくその日数は俺の年齢である１４年以上のモノであることは間違いない。
その中での出会いと別れ。
泣いた日があった。笑った日もあった。本当にほむらと出会ってから毎日が充実していた。
「でも、あなたが……」
「気にするな。ほむらは鹿目のことだけを考えて行動してれば良いんだ。俺のことなんて放っておいて行ってこいよ」

俺に出来るお膳立ては全てやったハズだ。
きっと成功すると俺は信じている。
俺は鹿目のために一生懸命になるほむらが好きだったから。そんな彼女の隣にいれただけで満足している。
薄れゆく意識の中、俺は最後にそんなことを思った。

エピローグ

朝、窓から差し込む朝日が眩しい。時折、少し開いた窓から優しい風が吹き込んでくる。

「うんん……？」

俺が寝るときは窓もカーテンも閉め切っているハズなんだがな。

意識が覚醒したばかりで瞼を開けるのが億劫だ。

「……え？　なんで？」

はっ、と今の状態のおかしさに気がついて瞼を開き、ベッドの上で身体を起こす。視線の先には見慣れた光景というか、見慣れた少女が泣きそうな顔でこちらを見ていた。

「まさか失敗したのか？」

この身に宿る魔力を全てほむらにあげたのにも関わらず、それでもまだワルプルギスの夜に届かなかったとでも言うのか。俺の頭は混乱していた。

俺の問いかけにほむらは目尻に溜めに溜めていた涙を零し、ベッドの上にいる俺に向かって抱きついてきた。

「……会いたかった」

わんわん泣きだしたので、またこうして繰り返している事情を訊くわけにもいかず、ただただ彼女の頭を撫でることしかできなかった。

しばらく撫でつづけていると落ち着いてくれたようだ。

「もしかして、ワルプルギスの夜を倒せなかったのか？」

「いいえ、倒せたわ。あなたが言った通りの方法で」

「じゃあ、どうしてまた繰り返しているんだ？　あれを倒して鹿目の運命を変えることが、ほむらの願いだったんじゃないのか？」

鹿目のためなら非情になって何でも切り捨てられる。それがほむらの唯一の強さの源だった。

なのにどうして、今はこんなにも弱々しい少女のようになってしまっているんだ。

「そうよ。あの時の私の願いはまどかを救うことだった」

「だった……？」

「思い出したの……何もかも。まどかを助けてから、ようやく私は自分がキュゥべえに祈った本当の願いを思い出したの」
長いことほむらと共に行動してきた俺だが、彼女が魔法少女となることになった契約の内容を聞いたことがなかった。
だから勝手に『鹿目まどかを救う』と思ってきたのだが、ほむらのこの様子を見る限り、そうではないらしい。
「私が願ったのは、出会いをやり直すこと。あの時は初めて立ち会うまどかの死に気が動転して、それだけを必死に願った。人に迷惑をかけてばかりだった私のことを友達だって言ってくれたまどかにもう一度会いたかったの」
「友達って、一緒にいるだけで楽しいもんな」
恭介のことを思い出す。
アイツが交通事故で入院するまでは一緒にバカやってよく怒られたもんだ。片や将来有望のヴァイオリニスト、片や一般家庭で育った普通の少年。理不尽に感じたこともあったが、そんなのは一緒に遊んで笑い合えば……あれ？
「なんで思い出せないんだ……？　楽しいことがいっぱいあったハズなのに、なんで一つも思い出せないんだ!?」
しっかりと思い出せるのは繰り返し続けている一ヶ月の日々の記憶だけ。
始まりの今日という日から前の記憶は全ておぼろげにしか思い出す事が出来ない。
頭を抱えて必死に思い出そうとする俺を、ほむらは優しく抱きしめてくれた。
「ごめんなさい。それは私のせいなの」
「どういう、ことだ？」
なにがなんだかわからなくなって頭がこんがらがっているが、自分のせいだというほむらに問いかける。
「全てはこれがあなたの下にあったのが、全ての始まりだったの」
そう言って、ほむらが見せてくれたのは、いつも俺が身につけている両親が買ってくれたハズの十字のネックレス。

「ありがとう。大事にしてくれてたんだね、キリトくん」
その瞬間、全てが俺の頭の中で繋がった。
「ほむらちゃん……なのか？」
あのわけのわからなかった自分の過去の夢。
あの夢こそが俺の本来の記憶。
「あの頃は入院するほど病弱じゃなかったけれど、それでも私は普通の子たちと一緒に駆けまわって遊べなかった。そんな時にキリトくんは一緒に遊ぼうって言ってくれた。それが嬉しくてしょうがなかった」
確かにそうだ。小さい頃のほむらはいつも室内で一人遊びをしていた。だから俺はそんな彼女に話しかけたんだ。
「だけど、キリトくんが引越ししちゃうことになって、その時にこのネックレスをあげたんだよね」
確か父親の仕事の都合。引越しの理由はそんなありふれたものだったハズだ。
「私がキュゥべえに願ったのは出会いをやり直すこと。きっと願いが、このネックレスを中継してキリトくんにも影響しちゃったんだと思うの」
ごめんなさい、とほむらは謝ってから、彼女の推測を話してくれた。
ほむらの願いは出会いをやり直すこと。その願った時は鹿目のことを思って、友達とのもう一度再開することを望んだ。
だから友達であった俺が、その願いに引き寄せられるようにこの見滝原市へと強制的に連れてこられた。あたかも始めからこの街に住んでいたかのように記憶操作までされて。そしてその中継地点となったのが十字のネックレスというわけだ。
「気にするな。俺はほむらとまた会えて嬉しいよ」
彼女の推測を聞いたが、俺は怒る気にはなれなかった。
「たしかに仲良かったヤツもいたけど、それよりもほむらといる今の方が俺は好きだよ」
それだけこの繰り返しが濃密で、俺にとってそれだけでほむらを選ぶ理由になった。

「だからさ、二人で鹿目を救う方法を探そうか。もちろん、俺は犠牲になんてならないぞ。俺はほむらと一緒にいることを選んだからさ」
時間が巻き戻されているということは、俺がキュゥべえに願ったほむらへの魔力譲渡はなかったことにされていることだろう。
アレ以外のみんなが笑って終われる方法なんて今の俺には考えもつかないが、それも二人で試行錯誤しながらやっていけば何とかなる気がする。
俺が手を差し出すと、ほむらがその手を握ってくれた。
「うんっ！」
俺たちの時間遡行の旅は続く。
どれだけ辛くても、どれだけ挫折したくなっても、二人でなら乗り越えていけると信じて歩み続ける。
――三人で笑い合える結末を望んで。

Another Epilogue ― α&β

Another Epilogue ― α

「そんな結末、私が許さないっ！」
消えかかった意識の中、ほむらが俺の身体を強く抱きしめ叫んだ。
すると、抜け出ていったはずの俺の魔力が身体に戻る感覚が訪れた。それもほんの少しだけ。
「あなたの時間を戻したわ。私が拘束し、あなたを苦しめてしまったその時間を」
「どう、いう……ことだ？」
俺は死んでも良いくらいの覚悟でほむらに全ての魔力を譲渡したのに、なんで俺の身体にほんの少しだけとはいえ魔力が戻ってきている。
ほむらは抱きしめていた腕のチカラを緩め、俺と彼女の視線が交差する。
「魔法少女は条理を覆す存在よ。どんな不条理だって、どこかの誰かさんのおかげで最高の魔法少女になった私に成し遂げられないわけないじゃない」
「ふっ……、そうか」
俺はアレが最高の結末だと思ったけど、主演女優様は俺がお膳立てた舞台で踊ることを拒否しますか。それも俺が考えつかなかった方法で開演中に無理矢理物語を改変してしまうとは、さすがほむらだよ。
だったら、最後ぐらい俺が脚本通りに舞台で踊ってくれよ。
「さっさと、片づけてこいよ。そして全てが終わったら祝勝会でもやろうぜ」
「ええ、下準備は任せて良いかしら？」
「任せろ。こう見えて下働きの経験かなり長いんだぜ」
「知ってるわ。ずっと一緒だったもの」
俺たちは笑い合ってから身体を離し、視線を超弩級魔女ワルプルギ

スの夜へと向ける。
「デカイな……」
「ええ」
「とてつもなく高い壁だったな……」
「ええ」
でも、終わってくれる。
長かった俺たちの11月は終わりを告げ、ようやく12月がやってくる。
12月はそうだな……、みんなでクリスマスパーティーでもしよう。恭介と美樹のカップルをみんなで冷やかしたり、バカ食いするであろう佐倉をからかったりとなかなかに楽しそうだ。
「私たちの長かった旅を終わらせてくるわ」
「ああ、行って来い」
ほむらがワルプルギスの夜の元へと駆ける。すべてを終わらせるために。
時間停止の魔法でも使ったのだろうか、次の瞬間にはほむらの姿は逆さになったワルプルギスの夜の顔の前にあった。
――ガチリッ
聴きなれた時間軸を移動する音。だけれども、今回は平行世界に旅立つことはない。
――ガチリ、ガチリ、ガチリッ
その音は際限なく鳴り続ける。
さて、ほむらが一度に戻せる時間は一ヶ月分。ワルプルギスの夜はいったいどれほどの時間を生きてきたのだろうか？
――ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリッ
ドレスを着た貴婦人の顔が苦痛に歪む。
ほむらの時間操作の魔法に抵抗しようと、使い魔を生み出す。だが、その使い魔は生み出された瞬間に存在の時間が巻き戻され、最初から生み出されなかったことにされる。
――ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリッ
どれだけの時間が経ったのかわからない。だけれども、しだいに超

弩級魔女と称されていた巨体は徐々に収縮し始めた。
　まるでその存在を無理矢理産まれる前の卵の形に戻す様に、小さく小さく。
「ほむらちゃんはスゴイね」
　気づけば、鹿目が俺の隣に立って、一人戦うほむらのことを見守っていた。
「ああ、ほむらはスゴイぞ。鹿目、お前のために何百……いや、もしかしたら何千と時を繰り返してきたんだからな」
「わたしのために、そんなに……」
「お前は幸せモノだよ……鹿目。だから、改めて言うよ。ほむらと友達になってくれな」
　すでにワルプルギスの夜は面影すら残っておらず、直径一メートルほどの大きなグリーフシードへとその姿を変貌させていた。
　だが、このままではすぐに孵化してしまいそうなぐらいに、ワルプルギスの夜のグリーフシードは穢れきっている。
　だから、ほむらは時間を巻き戻し続ける。
「うん。わたしはほむらちゃんの頑張りを知らない。だけど、ほむらちゃんが本当に一生懸命にわたしのために頑張ってくれていたのは伝わってきたよ」
「そうか……それなら良いんだ」
　そして大きな大きなグリーフシードは一粒の普通の卵と同じくらいの大きさになった。ここからではそれが小さすぎて上手く確認出来ない。
　ほむらはそれを手に取り、こちらへと戻ってくる。
「もちろん、向井君もわたしの友達になってくれるよね？」
「えっ？」
　ほむらのことを視線で追っていたので上手く理解出来なかった。
　思わず、鹿目の顔を見てしまう。
「俺と友達……？」
「うん。向井君もわたしのために頑張ってくれたんだよね？」
「えっと、まぁ……一応な」

別に俺は鹿目のためではなく、ほむらのために頑張っていたんだけどな。結果的には変わらないけど。
「いいじゃない。まどかの友達になってあげれば」
俺が答えあぐねていると、背後からほむらの声が聴こえてきた。
「まぁ……うん、そうだな。これからよろしくな」
「これからよろしくね、向井君っ！」
鹿目と友達か……。
今までは仮の友達になった時もあったけど、本当の友達になるのは初めてだ。
「あっ、そう言えば、ワルプルギスの夜のグリーフシードはどうなったんだ？」
「これよ」
ほむらがその手に持った物を見せてくれた。
「キレイ……」
思わず鹿目が声をあげた。
確かに綺麗だ。だが、おかしかった。
「これはソウルジェムだよな？」
紫色の輝きを放つソウルジェム。奇しくもほむらの藍色のソウルジェムと色合いが似ていた。
「そうよ。この状態ならもうワルプルギスの夜が孵化することはないわ」
「それなら良かった。じゃあ、早く傷ついた魔法少女たちを回収しないとな。これ以上放っておいたら死んでしまいそうだしな」
「あっ、そうだ！　みんながっ！」
俺の発言で鹿目は彼女たちのことを思い出したらしい。どうしようどうしよう、と慌てだすが、俺としてはそれほど気にしていなかった。
「てことで、ほむら。あとは頼んだ。一分一秒も勿体無いからな」
ほむらの時間操作があればまったく問題ないのだ。
さすがに死者を生き返らせることは出来ないと思うけど、生きていれば時間を巻き戻して治癒させることぐらいは楽勝で出来るだろう。

「ふふっ、少し待ってて」
そう言ってほむらの姿が消える。
それを見て俺は再度感じるのだ。
――やっと今日が終わったんだな。

Another Epilogue ― β

あの日から一ヶ月ほどの時間が経った。
彼の言った通り私の魔法によってワルプルギスの夜を倒すことができて、ようやくまどかの死の運命を覆すことができた。
長かった……あまりにも長い時間、私はあの一ヶ月に囚われ続けていた。
「ほむらちゃーん！」
まどかが私を呼ぶ声がする。あの日以来、まどかは私のことを気にかけてくれるようになった。この時間軸では酷いことばかりしていた私に、彼女は笑顔で接してくれる。
それもこれも全ては彼のおかげだろう。
「早く帰ろ。さやかちゃんも仁美ちゃんも待ってるよー」
「すぐ行くわ」
机に入れていた教科書やノートをカバンにしまって、まどかたちのもとへ小走りで駆け寄る。
今日はクリスマスイヴ。放浪癖のある佐倉杏子も呼び出して、みんな集まって巴さんの家でささやかなクリスマスパーティー。
美樹さやかは彼氏がいるのだから、そっちでよろしくやればいいのに、わざわざこのためだけに上条恭介との時間を一日ズラしたようだ。
「ほむらちゃん」
「なにかしら？」
「パーティー楽しみだねっ！」

まどかの満面の笑み。その笑顔が私を元気づけようとしているものだとわかる。
わかっているからこそ、私も笑顔で返す。
「ええ、今から楽しみだわ」
私なんかと友達になれて嬉しかったと言ってくれた、あの時のまどかのような笑顔はまだできないけれど、それでも今できる精一杯の笑顔。
彼の犠牲によって手に入れることのできた幸せな日常。それを感謝しないわけではないけれど、心のどこかで重荷になっていたことは間違いなかった。
楽しかったクリスマスパーティーが終わったのは、夜十時のことだった。
中学生だけでその時間まで騒いだのはあまりよろしくないことだが、こんな日ぐらいは良いだろう。
私はパーティーが終わった足で、病院を訪れていた。
もちろん、面会時間は終了しており、魔法少女としてのチカラをフルに活用した不法侵入だ。こういう時に私の時間操作の魔法はとても便利である。
ベッドに横たわる彼の頬をそっと撫でる。
表向きは、大災害の時に頭に強い衝撃を受けた結果による頭部遷延性意識障害。俗に植物人間と言われる重度の昏睡状態のことだ。
だけど、その実態は私に全て魔力を譲渡したことによる精神の喪失らしい。キュゥべえの言ったことなので信用はしていないけれど。
『本当にキリトにはしてやられたよ。彼のおかげで、もっとも手っ取り早い鹿目まどかからのエネルギー回収をするわけにはいかなくなった』
どこから湧いて出たのか、キュゥべえがその姿を現す。それはいつものことなのでいまさら驚くことはない。
『それに最後の一撃の後、君が魔力を回復できるようにグリーフシードを一個残しておくなんて、キリトには恐れ入ったよ』
「当り前よ。彼は……向井キリトは私にとってのキリストなんだか

ら」
私が歩み続けてきた時間の終末を報せる救世主。
彼がいなければ、私の心はとうの昔に折れていたことだろう。私が繰り返し続けていたことで、平行世界の因果線が全て今の時間軸のまどかに繋がれているという事実を運命との戦いの最中に知っていたら、私は私を許せなかった。
だけど、彼は私がそれを知る前にすべての準備を終え、私に運命と戦うチカラをくれた。
『キリストか……懐かしい敬称だね。暁美ほむら、その首から提げられたネックレスから推察するに、君はキリスト教の信者なのかい？』
「いえ、ミッション系の学校に通っていたことがあるだけよ。あの頃はイエス様を信じてはいたけれど、今となってはこの世に神も仏もいないということを知ったわ」
私の首から提げられた十字のネックレスは彼の物だった物。私が彼の両親に無理に頼みこみ、譲り受けた。
彼と私は一心同体。そういう意味を込めて彼の物だったネックレスを身につけている。
『ははっ、たしかにこの世には神も仏もいないね。地球上で、そう呼ばれていた存在のほとんどは魔法少女だったんだから。例えばそう、イエス＝キリストとかね』
懐かしいなぁ、と何かを思い出しているようにキュゥべえは言った。
『僕にはよく理解できないけど、人類はつい最近まで男尊女卑の傾向があった。もちろん、その逆もまた然りだけど、その期間を比べてみれば、男尊女卑の期間の方がずっと長かった。だから事実は伝わるうちに書き代わり、今日（こんにち）の歴史では魔法少女の多くが男性とされてしまったよ』
「それがどうかしたかしら？」
『なに、ただの昔話だよ』
それなら私ではない誰かにして欲しい。
今は彼と私が過ごす時間だったのに、割り込んできたのはキュゥべ

えなのだから。
「何を期待しているのかはわからないけど、これだけは言っておくわ」
『なんだい？』
「私は絶望しない。例え、まどかや彼が死んだとしても、私は絶望なんてしないわ」
これは最高の魔法少女としての最後の抵抗。
私が絶望して魔女になってしまえば、この身に宿る魔力はエネルギーに変換させられインキュベーターに奪われてしまう。
私の魔力だけではなく、私の中に宿る彼の魔力まで……。
それだけは嫌だった。私を救ってくれた彼の想いは誰にも渡さない。
『そうか、それは残念だよ』
キュゥべえはそう言って姿を消した。
きっと私が死ぬのは人類が滅亡してインキュベーターが地球から離れ、私と彼の魂が誰にも奪われることなく、天に召されることになる時だ。
「頑張るよ、私……。どれだけ辛くても、どれだけ泣きたくなっても絶望だけはしない」
もう一度、彼の頬を撫でる。
今日はクリスマスイヴ……いや、壁時計を確認する限り日付変わってクリスマスになったようだ。
「メリークリスマス……キリト」
――私だけの救世主。

また違う未来

時間は、少年が地球外生命体インキュベーターに契約を持ちかけられる時まで遡る。

これはありえた未来と、ありえたかもしれない未来とは、また違う未来。

少年がチカラを望んだ時、結末はどのように変わるのだろうか……。

＊＊＊＊＊

その日、時間遡行者暁美ほむらは、言葉で表現出来ない大切ななにかが欠けたような不安感に襲われていた。

何度も繰り返してきた一ヶ月。いつもと変わらず時間遡行に成功したハズであるのに、何かが足りない……。ほむらはそれを勢いよく頭を振ることで無理矢理抑え込む。

ほむらの目的はただ一つ。鹿目まどかを救うこと。それさえ叶うのならば、例え自らが犠牲になったとしても、ほむらには些末なことでしか無いのだ。

転入初日。朝のＨＲの時間に自己紹介をする。普通に生活している人ならば、何度も同じ転入という経験をすることはそうそうないが、ほむらは何百回と経験してきた。だから自己紹介の内容も自然と少なくなってきて、今となっては自らの名前と最低限のことぐらいしか話す事はない。

教室を見渡す。見慣れた光景。見慣れたクラスメイト。そして、鹿目まどかの姿。彼女はほむらと視線が合うと驚いた風に身体を硬直させる。それを見たほむらは表情に出さないように心の中で微笑みを浮かべた。

この時間軸のまどかは、ほむらが知っているまどかと何ら変わりない。その事実だけで、ほむらは嬉しさが込み上げるのだ。

その後、まどかにキュゥべえと契約しないように遠回しな表現で忠

告したほむらは、その姿をショッピングモールの一画に移していた。そのフロアは更なる利益を求めたショッピングモール側の意向で改装中であり、人の気配はない。
そんな空間でほむらは拳銃片手に、全ての根源であるインキュベーターを追いかけていた。
パンッ、パンッ、パンッ。インキュベーターに向けて何度か発砲する。しかしその小柄な体躯のせいで上手く照準が合わず命中しない。
早くしなければまどかが来てしまう。ほむらは焦り、周囲の被害を考え楯から小動物を殺せる程度の火薬が詰まった爆弾を取り出し、インキュベーター目掛け投げつける。
爆発はほむらの狙い通りインキュベーターを襲ったが、その時の爆風が床に溜まっていたホコリを巻き上げた。結果的には彼女の視界を遮ることになり、ほむらはインキュベーターの姿を見失ってしまった。
ようやくほむらがインキュベーターの姿を見つけた時、その姿はまどかと共にあった。傷ついたインキュベーターをまどかが抱き上げ介抱している。
その光景に舌打ちしてから、ほむらはその舞台に上がった。
結果から言えば、最悪の一言だった。
まどかとインキュベーターの接触を許してしまったし、そこに巴マミや美樹さやかの介入があったのが悪かった。
これでまた、障害が増えてしまった。
ただ、友達のまどかを救いたいだけなのに、どうして運命とやらはここまでほむらの邪魔をするのだろうか。
運命と戦う一人の少女は、自分を騙しながらも、そのたった一つの想いに向かって突き進むしかない。
そんな魔女と戦い続ける日々を送っていたほむらに転機が訪れたのは、マミに拘束魔法で動きを封じられてしまった時のことだ。
このままでは、まどかの目の前でマミが死ぬところを見せてしまう。マミが死ぬのは良い。だが、その光景を目の当たりにしたまどかが悲しむことは避けたかった。

だけれども、今のほむらは身体の自由を奪われている。楯から道具を取り出すことができないし、仮に時間を停止させたとしても身動きできない状態では意味がない。まさに手も足も出ない状況である。

――シャリンッ

拘束された状態で顔を俯かせ、自分の失敗を嘆いていたほむらの耳に鈴の音が聴こえてきた。新手の魔女や使い魔の可能性があるので、すぐさま鈴の音が聴こえてきた方を確認する。

「助けはいるか？」

ほむらの視界に飛び込んできたのは巫女装束を身に纏った一人の少女。ホコリ一つ付着していない純白の白衣、胸の下辺りから緋色の袴が少女の長い黒髪に良く似合う。その長い黒髪は鈴の付いた髪留めで留められており、時折シャリンと鈴の音を鳴らす。

しかし、少女の胸元には巫女装束にはそぐわないロザリオのような十字のネックレス。それがなければ、正月ならどこの神社にでも居そうな巫女だった。

ほむらはいきなり現れた巫女装束の少女に警戒しながらも、助けを求めることでマミの死をまどかに見せずに済むかもしれない、そう考えた。

「そうね。できればお願いしたいところだわ」

「ん、わかった」

少女は召喚魔法で日本刀を呼び出すと、ほむらを拘束していた魔法を容易く斬り裂いた。魔法少女として経験の長いマミの使った強力な拘束魔法であるハズなのに、いとも容易く斬り裂いたのだ。

ほむらは内心驚きつつも、先を急ぐことを少女に告げることにした。

「感謝するわ。でも、今は時間がないの。お礼はまた今度にさせて頂くわ」

「ああ、お礼なんて別にしなくても良いよ。俺は自分のやりたいことをしただけだしさ」

「いえ、受けた恩は必ず返すわ。それじゃ」

ほむらは駆けだす。時間停止の魔法を使いながらなので、傍から見

ればテレポートのように見える。
その場に残された少女はほむらの背中が見えなくなるまで見届けると、そっと溜め息を吐いた。
「やっぱ、憶えてないか……」
少女――向井キリトは、その事実に落胆した。だけれどもキリトやるべきことは一つしかない。
ほむらにまどかを救わせる。そのためだけにキリトは魔法少女になったのだから。
想定したよりも代償が大きかった。
キリトはほむらが戦いへと進んでいった方向をボーッと眺めながら、心を痛めていた。
魔法少女となったキリトならば、鹿目まどかを救うことなど造作もないだろう。そのためにチカラを手にしたことをキリトは後悔などしていない。だけれども代償が大き過ぎたのだ。
『まさかキミが見滝原にやって来るとはね。ちょっと意外だな』
魔女の結界の中であるから異質なことは当り前なのだが、キリトの脳内にまるでロボットに言葉を喋らせたような感情の灯らない声が響いた。
特にその声に驚くこともなく、キリトは自然に応対する。
「なんだキュゥべえか」
キリトが視線を下げると、そこにはウサギとネコが合わさったような奇妙な白い小動物が居た。
そいつの名前はキュゥべえ。彼と契約することで魔法少女へとなることができる。
『まったく、イレギュラーは暁美ほむら一人で良いというのに、どうしてキリトまで見滝原に来ちゃうのかな？　これ以上、僕が思い描いたシナリオから脱線したくないのに』
「それは悪かったな」
『本当だよ。僕が契約した記憶のない魔法少女なんて、一人ですら持て余していたと言うのにね。だけど、暁美ほむら以上に不可解な存在が現れたとなっては警戒せざるを得ないかな』

キュゥべえはキリトと契約したことを憶えていない。しかし、キュゥべえはそのことに違和感を持ったりはしない。それは数千年という長い時間、人類と関わってきたキュゥべえの前には、時折、彼女たちは現れるのだ。

キュゥべえの認識外の魔法少女。彼女たちはその強い想いの結晶である願いによって、孵化者であるキュゥべえの認識の外に出ることに成功した。だからキュゥべえは彼女たちとの契約を憶えていないのだ。

ほむらは平行世界の過去に戻ることによって、そしてキリトはチカラを望んだ結果として。

だが、誤解してはいけない。キュゥべえにとって契約していないことを憶えていなかったとしても、彼女たちが魔女へと変貌を遂げることにより感情エネルギーを搾取出来る。だからキュゥべえにとってはさほど気にすることでもない。所詮は乾いた宇宙を潤すためのエネルギー源でしかないのだから。

「この街にワルプルギスの夜がやって来る」

変えようのない確定された未来。今この状況でキュゥべえに伝える必要などまったく無いが、キリトは少し考えてから言うことにした。

『ほう、それはそれは。なかなかに興味深い情報じゃないか。それを僕に教えてしまっても良かったのかい？』

「別にかまわない。どうせ、近い未来キュゥべえも気づくことだ」

『たしかにね。本当にワルプルギスのような超弩級魔女が見滝原に現れるとしたら、僕はその予兆にいち早く気づくことになるだろうね』

「まぁ、シナリオとやらに修正でも加えておくと良い。これが俺のキュゥべえに送る最初で最後の感謝の印だ」

時間の繰り返しに巻き込まれた根本的な原因はキュゥべえなのかもしれない。だけれどもキュゥべえ――いや、インキュベーターがこの地球にやって来なければ、今もなお人類は狩猟生活を営んでいたという。

それに繰り返しに巻き込まれたと言っても、そのおかげでキリトは

ほむらと出会えた。その事実に関して、キリトはキュゥべえに対して感謝の気持ちを感じていた。
『フフッ、そうだね。キミが何を願ったか僕に記憶はないけど、その願いの果てにキミが何を見せてくれるのか楽しみにしているよ』
魔法少女となったキリトは、魔法少女の中で最強のチカラを手にしている。その事実を感じ取れるキュゥべえは不敵に笑う。
最強の魔法少女と最大級の魔女。それらがぶつかれば激闘必至。それでもキリトが勝利を手にするだろうとキュゥべえは予測している。だが、どちらに転んだとしても自分たちの利益になることをキュゥべえは理解している。
キリトが最強の魔法少女として最大の敵を倒してしまったら、当然後は最悪の魔女になるしかない。それほどまでに魔力を消耗し、ソウルジェムに魔法を使った分だけの穢れが蓄えられ、キリトは魔女へとその姿を変貌させる。その時に生み出されるだろう、エネルギー量は莫大なモノで、それはおそらくキュゥべえのエネルギー回収ノルマを大幅に埋めてくれることだろう。
それにもしも、キリトが倒れることになっても、優しいまどかならば魔法少女となり、ワルプルギスの夜と戦うだろう。彼女もまた、キリトと同じく最強の魔法少女になれる素養を持っているのだから。
『それじゃあ、期待しているよ』
白くて犬のように太い尻尾をフリフリと揺らしながら、キュゥべえはその姿を消す。
それと同時に魔女の結界が崩れ始める。
「終わったか。ほむらのヤツ、しっかり巴さんを助けれられてると良いんだがな」
キリトにとって、まどかを、そしてまどかを救うほむらを救えれば、他のことを犠牲にしても良いのだが、それでもやはり知り合いが死ぬところは極力見たくないのだ。
それに友人が殺されればまどかが悲しむことになる。そうなってはほむらも悲しむ。出来る限り他も救う。それぐらいの気休め程度しかキリトに出来ることはない。

キリトは一度、オレンジ色の空を仰ぐと、誰にも見られる前にその場から姿を消した。

＊＊＊＊＊

少年――向井キリトが魔法少女になったのは、実は身体は男であるのに心は女の子みたいなトランスジェンダー……日本語にすると性同一性障害、さらにわかりやすく言うとオカマであったとか、そんな愉快な理由からではない。

単純にチカラを求めた結果と言えば良いのだろうか。

キリトがキュウべえに願ったのは『運命を斬り裂くチカラ』だった。

運命と言うのは説明するまでもなく、まどかの死の運命であるし、それと同時にワルプルギスの夜を討ち倒すことの出来ないほむらの残酷な運命である。

それらを斬り裂くのにはチカラが必要不可欠であったために、キリトはそう願った。

契約の果て、キュウべえに言われた通り魔法使いになる気満々であったキリトであったが、彼の思惑とは異なる結果となってしまった。それはキュウべえにも言えることである。

キリトがチカラを手にするにはどうすれば良いのだろうか？

その疑問に答えることにしよう。なに、簡単なことだ。

キリトはまどかに準じるとまでは行かないものの、それでも魔力の塊であることには変わりない。しかし、彼が第二次成長期の少年であることで、契約して魔法使いになっても魔法少女一人分と同等のチカラしか発揮できない。いくら貯蔵量が多くても外部に出力する機能が脆弱では、その真価を発揮できない。

願ったのは『運命を斬り裂くチカラ』。あまりにも分不相応な願いであった。

だとするならば、外部に出力するチカラを強化してやればいいのだ。水道の蛇口を捻って勢いが足りなければ、消防車についているホースを持ってくれば良い。

その結果、キリトは魔力を外部に出力する最適な身体である第二次成長期の少女の身体を手にすることになった。
と、ここまではキリトは許容出来たのだ。
そもそもキリトはほむらのために全てを投げ捨てて、ワルプルギスの夜を討ち倒そうとしていた。だから、自分の身体が少女になったことであるとか、なぜか現在位置が夢で見ていた自宅のある見滝原市でないどこかの地方都市であることもまだ良かった。
だけれども、向井キリトという人間の記録がこの世界から消えてしまったことは許容できるハズもなかった。
自宅である建物の表札には『向井』とあるのに、その家の住人は両親であるのに、なぜか両親はキリトのことをまったく憶えていなかった。そのため、頭のおかしい少女だと両親に勘違いされて危うく警察に通報されるところだった。
これにはさすがのキリトも堪えた。そのすぐ後、廻り合ったキュゥべえも、見滝原にやっとこさ辿りついた後に会うことの出来たほむらも、キリトのことを憶えてはいなかった。
これには契約の際にまだ少年の身体であったため、契約時に生じたエネルギーが少なく、本来なら記憶消去した上で記憶操作によってキリトの周りの人間の記憶を書きかえるのだが、それが出来ずに記憶消去で止まってしまった。それでは矛盾が生じてしまうので、キリトが存在したという痕跡も全て消し去って。
それを知らないキリトはパニックに陥りそうになるが、ほむらを救うことを強く意識することで、自分を押さえこんだ。それでも悲しんだりするわけだが。
「ああ、クソッ！」
清らかな鈴の音を鳴らしながら、キリトは踊るように日本刀を振る。キリトが日本刀を振り切る度に使い魔は斬り裂かれ、その存在を滅殺される。
相変わらずの巫女服に十字のネックレスと言う、宗教を馬鹿にしているのではないかと勘繰ってしまう衣装で魔女の結界内を突き進む。しかし、この巫女服がキリトの魔法少女としての衣装であるし、十字

のネックレスを首から提げないという選択肢はキリトには選択できない。よって、こんな格好になってしまっている。
誰も自分のことを憶えていない。その事実を一応は受け入れたキリトではあるが、それでも時々こうして心の中のモヤモヤを発散しなければならない。それは受け入れきれてないと言うことなのだが、そこら辺は気にしないことにしているようだ。
魔女の結界内はスーパの店内のような場所だった。棚には商品の代わりに使い魔が並べられ、キリトが奥に進もうとすると使い魔たちが棚から飛び出して襲って来るのだ。
それにイライラをぶつけるようにキリトは日本刀を振り回すのだが、それが何度も繰り返されるにつれ、その行為自体にもキリトはイライラしてきた。
「いい加減に魔女を見つけたいところだな」
調味料の棚らしきところを右に曲がると、冷凍食品が陳列されている冷蔵庫が見えてくる。
冷凍食品のパッケージみたいな使い魔が襲ってきたので、邪魔くさそうに斬り捨てる。
「そう言えば、まだ店の裏側行ってないな」
そうと決まれば、と言うことで、店員の休憩スペースに続く扉を探しだし、躊躇うことなく中に入る。
キリトの予想通り、そこには異形の存在が俯き加減に佇んでいた。エプロンを着た人間と同じくらいの大きさの身体に異様に大きな頭部。いったい彼女は何に絶望したと言うのだろうか。
「まぁ、結局のところは俺のために消えてもらうわけなんだけど」
言ったが早いか、斬ったが早いか、どちらにしても魔女は次の瞬間にはこの世から消されることになった。少し間をおいてから、まるで主の後を追うように結界が崩れ出した。
キリトは残されたグリーフシードを手早く回収すると、その場から立ち去った。
少し経ってからやって来たマミ一行や、ほむらに第三勢力かと言う疑念を抱かせて……。

＊＊＊＊＊

――やっぱ、ワルプルギスの夜は現れるんだよな。

逃れようのない事実にキリトは溜め息を吐いた。

ワルプルギスの夜が現れない未来。そんなみんながみんな、望むような未来に期待していたわけであるが、その願いは当たり前のように叶わない。

落胆気味にキリトは灰色が覆う空を仰いだ。

「どうして邪魔をするの、向井キリト！　やっと……やっと、私の想いを伝えられて、まどかたちと理解し合えたのに！」

叫ぶような少女の声にキリトは視線を向ける。

頭から血を流し全身ボロボロのほむら。それに地に伏し気絶する三人の少女の姿。マミとさやかという魔法少女。さらに未だ一般人であるまどかの姿も確認出来た。

この惨状はキリトが己の意志でやったことで、今さら後悔はない。

殺さずに動きを止める。それには昏倒させることが最も簡単な手段で、確実に動きを止めることが出来る手段だ。

日本刀の峰の部分を三人の少女の首筋に叩きこみ、意識を刈り取った。

「邪魔、か。確かに俺は君の邪魔をしていることになるんだろうね。それはすまない。素直に謝るよ」

「そう思うなら、そこを通して！　私がアイツを倒すから！」

ほむらが言うアイツとはワルプルギスの夜に他ならないだろう。今まで倒すことが出来なくて時間を繰り返し続けている彼女が、一人で倒すと言う。

それだけ、今回の時間軸がほむらにとって居心地が良いのだろう。だから、ほむらは無茶を通そうとしている。

キリトはほむらの想いを感じとって笑う。しかし、その笑った顔はほむらには馬鹿にされたと誤解を生んでしまったらしく、ほむらの眼孔が鋭くなる。

「ああ、ごめん。決して君を馬鹿にしたわけじゃないんだ。だけど――」
謝ってから、
「そんなほむらが悲しむ残酷な運命なんて俺が斬り裂いてやる」
キリトはほむらの背後に一瞬で移動し、さきほどまでと同様に峰で首筋を打って意識を刈り取る。
ほむらが一人でワルプルギスの夜と戦っても勝つことは出来ない。そしてまた繰り返すのだろう。
そんな残酷な運命をキリト知っているから、絶対に許容出来ない。
キリトは意識のない少女たちに背を向け、悠然とその場所に存在する超弩級魔女ワルプルギスの夜に相対し、日本刀の切っ先を向け宣言する。
「さぁ、宴を始めようじゃないか！　舞台は見滝原、演者は最強の魔法少女である向井斬人が務めよう！」
――そして、戦いが始まる。
経過は語るまでもないだろう。
キュゥべえが予測した通りの激闘であった。両者は互いに傷つけあい、片方が勝利をおさめた。ただそれだけだ。
戦いを終えたキリトは瓦礫の中、力無く横たわっていた。ほとんどの魔力を使い果たし、指一本も動かせない状態である。
『感謝するよ、向井キリト。キミのおかげで、僕のノルマが大幅に埋まることになる』
キリトの顔を覗き込むようにその白い生物はいた。
『ははは、それは良かったよ』
口を動かす体力も残っていないキリトは、最後に残った少量の魔力を使って、直接キュゥべえに話しかける。残った魔力が尽きてしまえば魔女になるしかないと理解しているのにも関わらず。
『確認したいんだが、俺から搾取するエネルギーで、お前のノルマはどの程度まで埋まるんだ？』
『七割ってところかな。君一人から得られるエネルギーは、今まで僕が得てきたエネルギーとそう変わらない。これは素直に驚きを隠せ

ないよ』
『そうか、それなら良いんだ』
キュゥべえの回答を聞いて、キリトは安堵する。
――これでもう、心配することはない。
ゆっくり眼を閉じる。
もうすぐキリトは魔女になる。それは変えようがない運命で、キリト自身も変える気はない。
キリトにとって大切なのは、一人の少女が笑っていられる世界を造ることなのだ。
自分のしなければならないことを全て終え、キリトは思う。
――願わくば、全ての魔法少女に希望を。
その日、最悪の魔女は討たれ、新たな魔女がその地位に君臨した。
彼女はどんな絶望を撒き散らすのだろうか。それを彼女たちが知ることになるのは数年後のことである。

＊＊＊＊＊

例え、少年がチカラを望んだとしても、結末はさして変わらない。
早いか、遅いか。たったそれだけの違いだ。
だがそれでも、彼女たちが笑い合える時間を少しでも作れた。そのことに意味があったのではないだろうか。